

ゼロの使い魔×ポケットモンスター

蜜柑ブタ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なんとなく思い付いたネタ。

短編です。

2019/05/20

タイトルを変えました。

元『ルイズが召喚したのが、ビードル（ポケモン）だつたら？』です。

## 目 次

『ルイズが召喚したのが、ビードル（ポケモン）だつたら？』

1

『ルイズが召喚したのが、ポニータ（ポケモン）だつたら？』

4

『ルイズが召喚したのが、ビリリダマだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、ベトベターだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、モンジヤラだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、ベロリンガだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、タマタマだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、スリープだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、ナゾノクサだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、プリンだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、ラツキーだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、ガーディだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、パウワウだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、ディグダだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、ミニリュウだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、ゴースだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、ドードーだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、コイルだつたら？』

『ルイズが召喚したのが、ニドラン（♂&♀）だつたら？』

『ルイズが召喚したのが、オニスズメだつたら？』

68

64

60

56

53

48

45

43

40

37

35

32

29

26

23

19

15

12

9

『ルイズが召喚したのが、イシツブテだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、キヤタピーだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、カラカラだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、メタモンだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、ロコンだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、コンパンだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、ストライクだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、ニヨロモだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、ズバットだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、アーボだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、ドガースだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、ガルーラだつたら?』

ほのぼの版  
悲しい版

105

『ルイズが召喚したのが、ガルーラだつたら?』

108

『ルイズが召喚したのが、ヤドンだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、マンキーだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、パラスだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、ピッピだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、カイロスだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、ケンタロスだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、ブーバーだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、エレブーだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、マダツボミだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、コラツタだつたら?』

『ルイズが召喚したのが、ゴクリンだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、ヒメグマだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、ミルタンクだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、ミルタンクだつたら?』 別ルート  
 147 144 141

149

『ルイズが召喚したのが、ツボツボだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、クヌギダマだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、ハネツコだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、ケムツソだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、ラルトスだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、メリープだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、イワーハだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、ゴニヨニヨだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、マリルだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、ウソツキーだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、ウパーだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、フワンテだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、ミツハニーだつたら?』  
 『ルイズが召喚したのが、ゴマゾウだつたら?』  
 189 186 183 180 177 174 171 167 164 162 160 158 155 152

『ルイズが召喚したのが、ビードル（ポケモン）だつたら？』

何度目かの爆発の後。

晴れていく煙の中に、小さな姿を見つけた。

それは、一言で言えば芋虫だつた。

芋虫にしては大きく、けれど人ほど大きいわけじゃなく、たぶん大人の掌の上に乗れるぐらいの大きさだろうか。つぶらな二つの目に、丸い鼻なのか口なのか分からぬ部位、可愛らしい見た目に反する頭頂部に生えた大きな角のような針だけが嫌な予感をさせる。

コルベールに促され、ルイズは、その芋虫に近づいた。

芋虫がビクツと震え、ルイズの陰に覆われると、プルプルと涙目になつてゐる。

ルイズは、とてつもない罪悪感を感じるが、この儀式をしないと進級できないので心を鬼にする。

そして芋虫の頭上に杖を掲げてコントラクトサーヴァントの呪文を唱え、芋虫を持ち上げて口らしき場所に口づけをしようとして……。

ビーー！

つと鳴いた芋虫が暴れて、チクツと頭の針がルイズの額に刺さつた。

途端ルイズは、パタリツと倒れる。

倒れる拍子に遅れて落ちてきた芋虫の頭、特に口の部位がルイズに触れ、その結果、芋虫にルーンが付くことになつた。

次にルイズが目を覚ますと、そこは保健室だつた。

心配していたコルベールから聞くと、とてつもない毒であつたらしいが、間一髪解毒できたそうなのだ。

ふと見ると、ルイズが寝ているベッドの布団の上にあの芋虫がいた。

ルーンが体に刻まれている芋虫は、ルイズが気がついたのことに気づいて、ビービーと鳴き、スリスリッと懷いてきた。

ルイズは、針を警戒したが、とても人懐っこい芋虫にだんだんと絆され、プニプニとした感触を楽しむように指でつづいてやつたりすると、またビービーと鳴きながら嬉しそうにする芋虫。

コルベールは、おめでとうと賞賛してくれた。

芋虫…、ビーちゃんと名付けたルイズは、自分の部屋に連れて帰った。

まず、図鑑で虫を調べたが、ビーちゃんに該当する虫はいなかつた。

後日、図書室でも調べたが該当する虫はいなかつた。生物に詳しい教員に聞いても分からず、新種か、未開拓の地域の新種かもしれないと言つた。

コントラクトサーヴァントをする際に刺されたのは、単に怯えていただけだと分かり、すっかりルイズに懐いてくれている今、毒針で刺されたことは許している。

虫の幼虫のようだからと、葉っぱを食べさせようとしたが、ビーちゃんは食べてってくれなかつた。

困つたなあつと思いつつ、どうしても離れてくれないので仕方なく食堂に連れて行くと、シエスタというメイドが、ビードル！つと驚いていた。

知つてゐるのかと聞くと、とても大きな蜂の幼虫らしかつた。なお、成長後の蜂の名前は、スピア－といふらしい。

詳しい生態は分からぬそうだが、幼虫のうちは好物の葉っぱを匂いで判別しているそうなので、適当に森に行けばいいのでは？つという助言を貰い、学院近くの林の中にビーちゃんを連れて行くと、ルイズの肩から飛び降り、クンクンつと鼻らしき部分を動かして、ある種類の葉っぱだけを食べ始めた。

それ以降、ルイズは、その植物を調べ、毒性があるものだと分かると、それだけを集めてくれと使用人に頼み集めさせたことで、ビーちゃんの食事問題は解決した。

ルイズは、ビーちゃんをとても可愛がった。

ブニブニした感触も、つぶらな目も、本当に可愛くて可愛くて仕方なかつた。毒針だけが難点であるが…。

どれくらいかして、ビーちゃんは食事を摂らなくなり、やがて糸を吐いて、あつという間にサナギになつてしまつた。

サナギになつて何日目か……。ついにその時はきた。

硬いサナギの殻を破り、立派な蜂になつたビーちゃんが現れた。

両手部分に大きな針を持つ、大きな蜂。

けれど、変わらずルイズに懷いてくれる。

トラブルがあつて、ギーシュと決闘になつた際も凄まじいスピードと攻撃力でギーシュのワルキユーレを倒し、トロル鬼も毒針の一撃で屠り、どこからか番を見つけてきたのか、本塔に巣を作り、同じルーンが刻まれたたくさんの子供達をルイズにもたらし、ルイズは、ビーチちゃんにたくさん感謝した。

群れとなつたビーちゃんの家族は、その後起ころる戦争で大活躍し、レコン・キスタの軍勢を退け、トリステインに平和をもたらした。

ビーちゃん自身が寿命を迎えた時、ルイズはいっぱい泣いた。泣き尽くすほど泣いた。

その後、ビーちゃんの子孫達がルイズの生涯を支える使い魔としていてくれた。

ルイズ自身が寿命を迎えるとき、ルイズの遺言でビーちゃんと同じ種類が住むと言われる森の中に墓を作つてもらい、ビーちゃんの子孫達も森に帰り、ルイズの墓を守り続けたという言い伝えが残ることとなつた……。

『ルイズが召喚したのが、ボニータ（ポケモン）だつたら？』

綺麗だつと、まずルイズは思つた。

それは、一言で言うなら、馬。

けれど、ただの馬ではない。白に近いが黄色っぽいような体の表面の色、つぶらな黒い目、そして最大の特徴は、たてがみが炎だつたことだ。

赤と黄色に燃えるそのたてがみが、ユラユラと揺れている。やがて、キヨロキヨロと馬が周りを見回し始めた。

コルベールがルイズにコントラクトサーヴァントをするよう促し、ハツとしたルイズが炎の馬に近寄る。

すると、炎の馬はキツとルイズを睨むように身構え、ヒヒーンツ！と鳴いて炎を放ってきた。

突然のことに対応できなかつたルイズだつたが、コルベールが魔法を使いその炎からルイズを守つた。

すると炎の馬が今度は突撃してきた。  
そのスピードにルイズは、コンマゼロで頭で、あつ、これ避けられないつと思つた。

炎の馬とルイズが接触しようとした直後、炎の馬の横から無数の氷の矢が当たり、炎の馬が横へ転がり倒れた。

タバサが、今だと小声で言つた。

しかし、すぐに炎の馬は立ち上がり、タバサを睨む。僅かに目を見開いたタバサが続けざまに氷の魔法を放つが、炎の馬が放つ炎の壁で遮られて蒸発した。

馬の注意が完全にタバサの方に向いている隙を突いて、コルベールが酸素操る独自の魔法を使つた。

酸欠に陥つた炎の馬が倒れ込む。コルベールが今のうちに！つとルイズに声をかけた。

辛そうにバタバタと暴れている炎の馬を不憫に思いながらも、ル

イズは、コントラクトサーヴァントを行つた。

炎の馬はルーンが刻まれる痛みに余計に辛そうに鳴き声を上げ、やがて気絶したのか動かなくなつた。

コルベールが学院まで炎の馬を運び、大型の使い魔が入れれる舎の干し草の上に炎の馬を乗せた。不思議なことにたてがみの炎が燃えているにもかかわらず、干し草も舎の木造建築を燃やすこともなかつた。

ルイズは、炎の馬のそばにいた。

進級のためとはいえ、酷いことをしてしまつたとは思つてゐる。見た目からして氷が苦手そうだつたのに喰らつて、さらに追い打ちをかけてルーンを刻まれて目を覚まさないのだ。

不思議な炎だな…つと思いつつ、干し草も木も燃やさない不思議な炎に触れようと手を伸ばそうとした。

その直後、背後から、ポニータだ！…つという声が聞こえた。振り返るとそこには夕食を入れたバスケットを運んできたメイドのシエスタがいた。

見たことも聞いたこともない馬なので、聞いてみると、なんでも曾祖父が飼つていたらしい非常に珍しい幻獣のような馬で、曾祖父亡き後は、馬小屋から逃亡して近隣の森に住み着いたと言られており、ごく希にその子孫と思われる炎の馬が見られるそうだが、知能が高く非常に警戒心が強いのだという。

しかも、シエスタの家の言い伝えによると、心を開いた相手にしかたてがみの炎で熱くしないように触らせ、しかも背中に乗せてくれないのだと。そのため、曾祖父以外は乗るどころか、触ることすらできなかつたらしい。

そんな話を聞いていると、やがてブルル…つという鳴き声が聞こえたのでそちらを見ると、炎の馬…ポニータが目を覚ましていた。

ルイズがだいじょうぶ？…つと声をかけると、ハツとしたのか飛び起きたポニータは、距離を取り、メラメラとたてがみの炎を揺らした。

ルイズは、ショックを受けた。他の生徒達のように使い魔のルーンを刻めば主人に対しても友好的になるはずなのに、ポニータは、今に

もこちらを燃やそうといきり立っている。

するとシエスタがこう言つた。

曾祖父も飼い慣らすのに非常に苦労したらしい。だから頑張ればきっと心を開いてくれるはずだとルイズを励ました。

この日から、ポニータという不思議な馬との攻防が開始された。

毎日餌をやりに来るが、ルイズの姿がなくなるまで決して口を付けようとしない。そして触ろうモノならその手を容赦なく焼かれる。それが毎日繰り返された。

保健室の常連になつたルイズを、保健医がもうやめたら？ つと心配して声をかけるほどだつた。

同級生からは、火傷のルイズなどと揶揄されるが、ルイズは諦めない。水の秘薬を買うお金もなくなり、両手は度重なる火傷のせいで常に包帯を巻かれ血などがにじんでいる。時に蹴られることもあり、美少女と言えるルイズの顔に痛々しい蹄の形をした青あざが出来ているときもあつた。そんな姿に、ルイズを揶揄する声はなくなつていつたが、同情する目が向けられるようになつた。

コルベールは、少なくとも学院から逃げようとしていないのは、ルーンの従属性が効いている証だろうと分析してコントラクトサークアンント自体は成功しているとみている。

しかし、それでも元々気難しい気性のポニータは、一向にルイズにその炎のたてがみを触らせようとはしなかつた。それでも少しづつは心を開いてくれているのか、餌をあげにくると顔を見せてくれ、そしてルイズがいても気にせず餌を食べててくれるようにはなつた。そんなある日……、トリステインをあげての馬のレースが開催されることになつた。

馬を使ひ魔に持つ生徒や、自慢の系統の馬を持つ生徒がこそつて参加しようと言つてゐる。

ルイズは、そんな生徒達を羨ましそうに見る。自分のポニータが出れば、きっと華になるはずだろうに……、けれどそれは叶わない。意氣消沈したまま、自然とその足はポニータがいる舎に向かつていた。

餌の時間がと思つたのか顔を出してくれた。ポニータに、ルイズは、泣き笑いの顔で独り言を言う。

あなたと、レースに参加したかつたなあ……つと。

そして背中を向けて去ろうとした時だつた。

マントが引っ張られた。見ると、マントの端をポニータがくわえていた。

ルイズは、目を見開き、ポニータを見つめた。

そして、恐る恐るそのたてがみに手を触れると……、炎をすり抜け、その首筋に手が触れた。熱くなかった。

それを理解するのにたっぷり時間をおいて、ルイズは決壊したよう泣いた。

そして、そんなルイズの顔をポニータが舐めた。

泣き止んだルイズは、ポニータにありがとう！ っと感謝し、抱擁した。

そしてギリギリのところでレースの受付に申請したのだつた。

レース当日……。

ルイズの両親も見に来ている中、ルイズは、堂々と背筋を伸ばして、ポニータの背に乗つていた。これまでの傷などは、キュルケとタバサが気を使つて秘薬をくれたので癒えている。でないと手綱を握れないからだ。

ポニータの幻獣のような美しい姿に、会場の観客席は釘付けだ。参加貴族の中には、幻獣を参加させて良いのかとレース本部に抗議していたりしていたが、魔法で調べた結果、幻獣ではないということで却下されていた。

そしてレースのスタート位置に着く。

合図と共に、駆け出したポニータと他の貴族の馬たち。

レースのために鍛えられた馬が参加しているため、抜きつ抜かれるデッドヒートとなつた。

しかし、レース終盤で魔法による妨害があり、ポニータが一気に失速した。

その後だつた。

ポニータの体が白い光に包まれ、一回りほど大きくなつた。

そして現れたのは、一本の角を持つ美しく立派な炎の馬、ギャロップだつた。（名前はあとでシェスタから聞いた）

最下位まで落ちていたが、ポニータを超える長く強靭な足が生み出すスピードが他の馬をごぼう抜きし、ハナ差でギャロップとルイズの勝利となつた。

なお、このあと、魔法による妨害工作をした貴族は工作員もろとも、しつかりと処罰され、ルイズはギャロップとともに表彰台に上がつた。

厳しいルイズの両親が、ルイズがどれほど努力してギャロップ（ポニータ）との絆を生んだのかコルベールらから聞いて、よく頑張つたなつと褒められた。

キルケ達からも評され、胴上げをされたりと、ルイズにとつては、大変な日となつた。

もみくちやにされながら、堂々と立つているギャロップの傍に来て、首筋を撫でて、感謝すると、ギャロップは、ルイズの顔を舌で舐め、顔をスリスリと擦り付けてくれた。

ルイズは、使い魔との絆を築けたことが何よりも幸せだつた。

## 『ルイズが召喚したのが、ビリリダマだつたら?』

煙が晴れると、そこには、玉が転がっていた。

半分が濃い赤色で、半分が白という二色の玉だ。

ルイズは、がつかりした。どう見ても生き物じやないからだ。

しかしそれでもコルベールは、コントラクトサーヴァントを促す。

他の生徒達の嘲笑をぶつけられながら、悔しい気持ちを抑えたルイズは、玉に近づいて、触ろうとした。

その瞬間、ビリツ!と電撃がルイズを痺れさせた。

たまらず悲鳴を上げ、玉から離れる。

すると、赤い部分が上の状態でクルリツと振り向くように回る。そうなつて初めて分かつた。その玉には、目があるのだ。

しかも相手を睨み付けるような敵意ある鋭い目だ。

生き物だということに気づいたコルベールが大人しくさせようと杖を向ける。途端、玉のような生き物から凄まじい電撃が放たれ、コルベールを痺れさせて焦がした。

痺れた手を押さえていたルイズは、それを見てギョツとするとが、果敢にも電気を持つ玉のような生き物に近寄る。

ルイズが接近すると、凄まじい嫌な音を出し、ルイズは耳を押さえるが、それでも近寄る。

そして杖を掲げて呪文を素早く唱える。そしてビリビリと電気を放つてくるが痛みと痺れを我慢して口を近づけてキスをした。

その瞬間、ドカーン!っと、玉が爆発した。

ルイズは、さすがに黒焦げになつて倒れ、玉はケホツと煙を吐いてコロコロつとルーンが刻まれる痛みに耐えていた。

次にルイズが目を覚ましたのは保健室のベッドの上だつた。

ちょっと服を焦がしたコルベールがいて、ルイズが起き上がる。そしてベッドから足を降ろしたとき、ビリツ!とまた電気が走つた。

ベッドの傍の、ちょうど足の下にあの玉のような生き物がいたのだ。

ルイズがなんでそこにいるんだ！っと怒るが、よく見るとルーンがちゃんと刻まれていた。

コルベールがおめでとうと賞賛してくれた。

ルイズは、とりあえず進級はできることになつたのでホツとしたが、同時にこの玉のような生き物がなんなのか分からず、コルベールと頭を悩ませた。

ルイズが歩くと、コロコロと丸いだけの体を転がしてついてくる。触ろうものなら、またビリツ！と来るのだ。それに怒ると、目つきは悪いが、どこかシュンツ…と落ち込んでるように転がるのだ。

どうやら電気を帯びているのは、この生き物の体质らしい。

触ることができないが、後ろをついてくれるので、一応は懐いてくれているらしい。

何ができるのか分からないので、そのままにして歩いていると、メイドのシエスタが、ビリリダマだ！つとびっくりしてズザザザ…つと逃げていた。

捕まえて話を聞くと、彼女の故郷であるタルブ村付近の森でたまに目撃される謎の生き物で、変な玉だと思つてうつかり触ると、電気で痺れたり、突然爆発して大怪我したりする危険な存在だということだつた。聞くところによると、彼女の曾祖父がタルブ村に住み始めてから現れるようになつたらしい。

なんてこつたい…つとルイズは思つた。そんな得体の知れない危険な生き物だつたなんて…つと。

しかも、成長することでマルマインという更に危険な生き物になるらしく、こちらは、でかくなる分、大量の電気を蓄えすぎて遊びでたまに爆発するというもつと危ない奴らしい。

ルイズは、使い魔にビクビクすることになつた。それが伝わつているのか、ビリリダマは、目に見えて落ち込んでいた。

おそらくそんなつもりはこれっぽっちもないだろう。だからルイズは、罪悪感を感じた。

それでボーツとしてしまい、うつかりギーシュが所持していたモンモランシーからの贈り物である香水を踏み潰してしまい、決闘騒ぎ

になつたのだが、ワルキユーレに襲われそうになるルイズをビリリダマが助けに入つた。

ソニックブームという技でワルキユーレを破壊し、コルベールをもノックアウトした膨大な電量でギーシュを見事倒した。

つい邪険に扱つてしまつていたのに、自分を守つてくれたビリリダマに、ルイズは何度も謝りそして助けてくれたことを感謝した。

触るとビリツ！となるのは相変わらずだが、親が決めた婚約者だつたワルドが裏切つた時、ビリリダマは、マルマインに進化し、教会を大爆発させるほどの爆発でもつてワルドを撃破した。

まあ、当然その場にいた者全員が巻き込まれたので、焦げたルイズがビリリダマ、改めマルマインに怒つたのだつた。

怒られ慣れたマルマインは、コロコロと転がつてむしろ喜んでいたのだった。

## 『ルイズが召喚したのが、ベトベターダつたら？』

もう何度目かの爆発。

ルイズを揶揄していた生徒達もいい加減飽きてきていた。

しかし、ふいに吹いた強い風によつて煙が晴れると同時に風下にいた生徒達は、その悪臭に、うえ！つとなつた。

するとベトーという鳴き声のような声が聞こえた。

爆発で空いた穴から紫色のヘドロのようなモノが出てきた。それには手の形があり、口があり、そして目がある。

一目で生き物だと分かるが、風に乗つてくる、その悪臭にルイズもコルベールも思わず鼻を押さえた。

生きたヘドロがまたベトと鳴くと、コルベールがハツとして、ルイズにコントラクトサーヴァントを促した。

ルイズは、ギョッとしてコルベールにやりたくない！つと訴えた。

しかしコルベールも教師としてルイズを進級させてやりたい。だから早くやりなさいと促した。

ルイズは、眉間にしわを寄せて、チラリッとヘドロのような生き物を見る。ヘドロのような生き物は、ジーツとルイズを見ている。案外大人しいらしい。臭ささえなければ。

ルイズは、一生懸命息を止め、ヘドロのような生き物にコントラクトサーヴァントを行つた。

キスをした途端、体を駆け回る毒成分。たちまちルイズは倒れ、コルベールが慌てた。

次に目を覚ましたルイズは、自室にいた。

夢か…つと思つたが、自室に充満するあの悪臭に、顔を歪めた。まさか！つと思い床を見ると、あのヘドロのような生き物がいた。まるでルイズを心配するようベッドに手を乗せている。

大慌てで窓を開け換気する。しかし匂いがなくならない。そして気づく、キスをした時の唇に匂いがついていたことに。

ルイズは、部屋を飛び出し、井戸に向かつた。そして石けんと井

戸水で必死に唇を洗つた。

すると遠くから、ベト～つという鳴き声が聞こえ、ズルズルっと近寄つてくる音が聞こえた。どうやらルイズを追つてきただらしい。

ルイズが来るな！つと叫ぶと、ヘドロのような生き物は、ビクツと止まり、しょんぼりと頃垂れた。

ルーンは刻まれていて、それで懐いてくれるらしいが、どうにもこの匂いが我慢ならない。

どうしたものかとため息を吐いていると、洗濯籠を落としたメイドがいた。途端、ベトベタ～！つと言つて驚いていた。

逃げようとするので捕まえて話を聞くと、あのヘドロのような生き物は、ベトベタ～といい、月の光を浴びたヘドロから生まれたとされる生き物だという言い伝えたがあるそうだ。

また、汚いところを好み、しかし一方で汚染された水や土壤、どんなゴミでも食べてしまうため、汚い場所を逆に綺麗にする一面もあるとか。

そして成長するとベトベトンという更に大きな体になり、そうなると毒性が一気に上がり、触るのも危険なのだそうだ。

もつともそれは野生の場合らしい。

なぜ野生に限つての話なのかというと、シエスターの曾祖父が飼つていたベトベターとベトベトンが、汚染されて作物も育たなかつたタルブ村の土壤や水を浄化したという逸話が残つており、お年寄りの一部は、近隣の廃墟に希に現れるベトベターやベトベトンを神聖視しているらしい。

曾祖父にまつわる話だと、躊ければ悪臭は抑えられるようになるらしいので、根気です！つと励まされた。

その話を聞くと、なんだか急にベトベターに興味が湧いてきたルーンは、

まずは、悪臭のコントロールだ！つと、やる気を出して躊けたところ、一日、二日ほどで匂いは抑えられた。おかげで学院内で悪臭の苦情はなくなつた。

悪臭さえなんとかなれば、大人しくて、学院で出るあらゆるゴミ

を食べて学院を綺麗にし、プルプルブルルンっとした感触も楽しい。

しかし、ギーシュのワルキユーレを一撃で溶かすような溶解液を放つたときは、さすがにビビったし、土くれのフーケのゴーレムを腐らせてついでに毒で死ぬ寸前に追い詰め、更に裏切った婚約者のワルドを進化してベトベトンになり、その猛毒でもって制裁した、なんともたくましく、頼りになる使い魔となつたのだつた。

なお……、ベトベターは、自分が歩いた後、つまり自己分裂をして増えるというのを後で聞いたときには、同じルーンが刻まれたベトベターとベトベトンが大量発生していて、ゲルマニアに嫁ぐ予定だったアンリエッタが、くつさいトリステインは勘弁と言われて結婚が破棄されたとか？

## 『ルイズが召喚したのが、モンジャラだつたら?』

それは、一言で言うならツルのような…、しかしツルにしてはすぎる青緑色の太い触手の塊だった。

しかし赤い小さな靴のような足があり、真ん中に目が二つ。モジヤモジヤと絶えず触手のような太いツルが蠢いている。しかし、目はあれど、顔というか、体全体の全容は黒くて分からぬ。

なにこれ? つとルイズもコルベールも、そして見ていた生徒達も思つた。

やがてモジヤモジヤしたそれが、オロオロと周りを見回し始めた。そこでハツと我に返つたコルベールがルイズにコントラクトサーヴァントを促す。

ルイズは、仕方なくそのモジヤモジヤの塊に近づく、モジヤモジヤしたそれが、ピタツと止まりルイズを見上げた。

ルイズは、あら? 大人しいのねつと思いつつ、コントラクトサーヴァントの儀式に入つた。

呪文を唱えながら、杖をモジヤモジヤした塊の上に掲げると…、急にツルが伸びてきて、杖を絡み取つた。

何するのよ! つと怒ったルイズが杖を奪い返そうと手を伸ばすと、手と腕をツルで絡み取られ、そのまま伸びてきたツルによつて首を絞められた。

うぐっ! つと苦しんでいると、モジヤモジヤがキッと睨んできて、体から粉を吹き出した。

粉を吸い込むとたちまち眠くなり、ルイズは倒れ込む、モジヤモジヤした塊の上に、その際に口がモジヤモジヤのそれに当たつた。

コルベールが魔法を使い、ツルを切り裂いて解放すると眠り粉で眠らされたルイズが地面に倒れ、モジヤモジヤした塊は、ルーンが刻まれる痛みにジタバタ暴れた。

次にルイズが目をさましたのは、保健室だつた。

コルベールがだいじょうぶかと声をかけてきたので、だいじょうぶだと返事をする。するとベッドの傍らに、あのモジヤモジヤした塊

がいた。

ツルの隙間にルーンが光つており、コントラクトサーヴァントが成功したようだとコルベールが言つてくれた。

しかし、なんの生き物か？ つという問題が浮上。

コルベールが切れたツルを調べたそうだが、匂いからすると完全に植物であつたらしく、自立性型の植物の一種ではないかと言つていた。

ツルを切られたはずの部位は、もう元通りの長さになつておらず、すごい勢いでツルは再生する構造らしい。

モジヤモジヤした塊がジーッとルイズを見つめている。点みたいな小さな瞳に大きくて丸い白目。絶えず動いているツル。

こちらに危害を加えてこないところからすると、ルーンの従属性が働いているようである。

ルイズが保健室から出て行く際も、後ろをトコトコとついてくる。立ち止まれば止まる。ちょっと可愛かつた。

すると、モンジャラだ！ つという驚いている声が聞こえた。

見ると、そこには一人のメイド。

捕まえて話を聞くと、この生き物のことを見つけていたらしかった。

このモジヤモジヤした塊の名前は、モンジャラ。

シエスターというメイドの故郷であるタルブ村の付近の森に住む、植物の生物であるらしく、こちらが危害を加えなければとくに危険性はないが、下手に近づくとツルで絡みついてくるらしい。しかしツルは、生涯伸び続け、千切れても痛くは無く、すぐに生え替わるそうだ。しかし、植物であるためか、毒性のある粉や、眠りの効果がある粉を出してきたと攻撃能力は多彩らしい。

時たま、ある条件を積むことで、モンジャラの親玉みたいな回りも大きなモジヤンボという個体に進化することがあるそうだ。

ルイズは、ゾッとした。あの時捕まつた際に吸い込んだのが眠りの効果がある粉だったからよかつたものの、毒だつたら死んでたかもしないからだ。

しかし、懐いてくれている今ならその心配もないだろうと思いつつ、少し警戒する。それはモンジャラにも伝わっているのか、悲しそうな目をするので罪悪感を感じた。

そんなある日、親切にモンジャラのことを教えてくれたシエスターが、ギーシュに難癖付けられていたため、ルイズが彼女を庇つた。

それに腹を立てたギーシュがルイズを馬鹿にすると、モンジャラがいつの間にやつてきていて、ツルでギーシュを捕まると1メートルしかない体からは想像も出来ない力で締め付けた。

ルイズが慌てて止めると、モンジャラはギーシュを解放した。ゲホゲホッと咳をこんだギーシュは、怒つて杖をモンジャラに向けた。

ルイズがギョツとして止めようとすると、モンジャラはピヨンピヨンと跳ねて、目を鋭くさせてギーシュを睨む。どう見ても喧嘩を買う！ つと言わんばかりだ。

そしてあれよあれよという間に、決闘騒ぎになってしまった。

ギーシュとしては、小突くぐらいで止めるつもりだったが、モンジャラはやる気満々だ。

ワルキユーレを鍛成して向かわせると、モンジャラはツルを絡ませる。だが相手は青銅で出来ていて締め付けても壊れない。たちまち接近され、殴られる直後、シユンツと見えない速度で振られたツルの一本が一瞬にしてワルキユーレの頭部を弾くように千切り飛ばした。

それに驚いたギーシュは、数体のワルキユーレを鍛成し武器まで持たせていた。

モンジャラは、四方から迫るワルキユーレをすべてツルで絡み取り、グルンツ！と体を回転させ、ツルを振り回し、ワルキユーレをジャイアンツスイングするよう振り回して振り回して、ギーシュの方へ投げ飛ばした。

ギーシュは、飛んでくるワルキユーレに悲鳴を上げ、逃げ回り、最後のワルキユーレがギリギリでギーシュに当たらず地面に落ちたところで気づいた。

モンジャラの体が光っている。みるみるうちに光が集まるように輝きを増していき……、そして、光の光線がギーシュに向かつて放たれた。

ソーラービーム。

太陽が強い昼間だからこそできる、必殺の攻撃だった。

白い光を前に、ギーシュは悟った。

自分が戦っている相手は、とんでもない強者だったと……。

そしてギーシュは白い光に飲まれた……。

後日、ボロボロになつたギーシュは体のあちこち包帯やら絆創膏だらけで、ルイズとシエスタに謝り、モンジャラに敬意を表したのだった。

ルイズは、予想以上のモンジャラの強さに、驚き、そんな強い生き物が使い魔になつたことが嬉しくてモンジャラを抱きしめた。

その直後、モンジャラが光り、一回り以上巨大化してしまつて、ルイズは潰された。

シエスタが、モジヤンボ！ と声を上げているのが聞こえたのを

最後に、ルイズは気絶したのだった。

## 『ルイズが召喚したのが、ベロリンガだつたら？』

ベロ～つと、ソレは鳴いた。

いや…鳴き声通りの外見なのだ。

自身の体ほどもある長くて幅広い舌が口から出ている。体は全体的にピンク色で、目はつぶらで可愛い方で、顔つきはちょっと間抜けっぽい。後ろの尻尾も幅広く分厚く半分に折れている。

見たこともない生き物が召喚されたことに、ルイズを揶揄していた声は、ザワザワヒソヒソに変わった。

ルイズもさすがに、何コレ？って思つていると、コルベールがコントラクトサーヴァントの儀式を促した。

ルイズは、気乗りしないが、進級のためだと我慢してその生き物に近づく。

近づいてみると、結構大きい。1・2メートルぐらいだ。

ルイズが近づくと、その生き物は首をゆつくりと傾げた。その様子はちょっと可愛いつと思つた。

大人しい気性らしいその生き物にルイズは、杖を掲げて呪文を唱える。

呪文が終わつた直後、あとはキスだけとなつた時、その生き物の幅広く長い舌がルイズを下から上へと舐め上げた。

たまらずルイズは、んぎやあああ！つと悲鳴を上げ、ベトベトの唾液まみれになつた。

すると顔まで舐めたことでこの生き物の舌がルイズの唇に触れた結果、その生き物の体にルーンが刻まれ始めた。

しかしルーンが刻まれる痛みと熱さを感じながら、なんとも間抜けに、ベロ～つと声を出すその生き物。

やがてルーンが刻まれる工程が終わり、コルベールが唾液まみれになつて騒いでいるルイズを心配しつつ、ルーンを確認し、ルイズにコントラクトサーヴァントの成功を伝えた。

ハンカチで必死に顔に付いた唾液を拭つていると、ベロ～と鳴くその生き物が近づいてきて、また舌で舐めてきた。しかも連続で。

ルイズの悲鳴などお構いなく、全身ベツタベタになるまで舐め回し、その舌から逃げるために後ずさつたルイズがこけると、トコトコと接近し、ルイズに乗つかるように抱きついてきた。

ルイズは、とうとう泣き出す。得体の知れない生き物に散々舐め回され、全身ベツトベトにされて…。

他の生徒達とコルベールがフライで飛んで学校に帰る中、体中ベトベトにされたルイズは、トボトボと歩く、その後ろをのんびりした足取りで舌の長い生き物がついてくる。

学院に帰つてからすぐにルイズは、井戸に行つて水を被つた、冷たいのも気にせず。

すると通りがかりのメイドが心配して声をかけてきた。

そこへ、ベロリと、追いついたあの生き物。

あつ、ベロリンガだ！ つとそのメイドは言つた。

ビックリしたルイズが聞くと、シエスタというメイドは、知つている限りのこと教えてくれた。

この生き物。名をベロリンガという。

とてもマイペースで鈍感だが、それに反して舌がよく発達しており、自由自在に操ることで生活している生き物らしい。つまり、舌を攻撃にも使うので獲物を麻痺させることもあるそうだ。

舌を自在に操るということ以外は、大きな特徴は無いらしい。しかし、その鈍感さ故に魔法が効きにくいという説もあるとか？

ああ、だから手に指がないのかとルイズは納得したが、同時にガツカリもした。

舌以外に大きな能力が無いこのベロリンガという生き物に。

しかし、そのガツカリした気持ちは、後日打ち砕かれることになる。

何度躊けてもついてくるので、仕方なく食堂まで連れて來た際に、ギーシュが持っていたモンモランシーの香水をベロリンガが拾い、キヨロキヨロと周りを見回して匂いでギーシュを探し当てて渡そうとしたがギーシュは青ざめて受け取らず、そうしてたら二股をしていたことが明らかになり、ギーシュが八つ当たりでベロリンガに決闘

をふつかけた。

ルイズが止める間もなく、ギーシュの友人達にレビテーションで浮かされ、ベロリンガは広場まで連れて行かれてしまった。

ゼロのルイズが召喚した、間抜けな使い魔というレツテルを貼られたいたベロリンガは、たちまち野次馬達に馬鹿にされていた。

ギーシュとしては、頭が冷えてきた今、そこまで酷いことをする気はなかつたようだが、一体のワルキユーレで小突くつもりで向かわせた途端、フツとワルキユーレが消えた。

はつ？という空気が場を支配する。直後、天空から吹つ飛ばされたワルキユーレが落ちてきて、地面に激突してグシャグシャになつた。

ベロリンガは、ベロ／＼と舌を振り回す。どうやら舌の力だけで吹つ飛ばしたらしい。その速度たるや…残像が見える。

これにはさすがにベロリンガを馬鹿にしていた者達は青ざめた。そしてギーシュは焦り、数体のワルキユーレを鍊成して向かわせた。

たちまち向かってきたワルキユーレは、順番にベロリンガの舌でバシーン、ベシーンつと吹つ飛ばされ野次馬にぶつけられる。ワルキユーレを舌でなぎ払いながら、ベロリンガは、ゆつくりとギーシュに接近した。

ギーシュは、焦り、最後の力を振り絞つて最後のワルキユーレを鍊成して壁にした。

するとベロリンガは、舌を使わず、指のない手で…コツンつとワルキユーレを殴る。

その瞬間、爆発するようにワルキユーレが碎け散つた。

それは、岩碎きという、秘伝マシンという機械で覚えられる技だつたのだが、この世界の住人達が知るはずがない。

ワルキユーレがたいした力もかけずに破壊されたのを見て、目の前に迫つてきていたベロリンガに、ギーシュは、杖を落として降参だと必死に土下座したのだつた。

ベロリンガの武勇に、我を忘れていたルイズは、慌てて間に入り、ベロリンガを止めた。

ベロリンガは、ベロ～っと間抜けな鳴き声を変わらず出し、ルイズに抱きついた。

まるで褒めてくれと言わんばかりだ。

ルイズは、それを理解し、ベロリンガの頭を撫でてやった。喜んだベロリンガは、舌と尻尾をブンブンと振ったのだつた。

ルイズは、ヤレヤレと思いつつ、今までベロリンガを舌しか使えない無能だと馬鹿にしていた自分を恥じたのだつた。

『ルイズが召喚したのが、タマタマだつたら?』

フーケは、混乱した。

自身の自慢の魔法である巨大な土のゴーレムが押されている。  
それも小さな存在に。

40センチちょっとくらいの大きさの、卵の集合体のような生き物にだ。

主人であるルイズを踏み潰そうと足を振り上げれば、バリアードの光の壁が遮り、拳を振ろうものなら、見えない力で拳と腕をあり得ない方向に曲げられる。

ちっぽけな生き物に、翻弄され、土のゴーレムを保つフーケの精神力はガリゴリと削られていった。

ルイズがその生き物を召喚した。

そしてシエスターというメイドから、タマタマという生き物だとルイズに説明しているのをたまたま立ち聞きした。

ギーシュという貴族の婢を倒した時点で、なぜ頭に置いておかなかつたんだと…、フーケは己の過去を嘆いた。

しかし過ぎた過去は戻せない。

だが、フーケは知らない。タマタマは、植物性の生き物で、火に弱く、逆に土に強いということを。それゆえに土のゴーレムを操るほど土の属性を操ることに長けた彼女には、分の悪い相手であつた。

ふいにブツ!とタマタマが何かを土のゴーレムの足に吹きかけた。

そして、瞬く間に土のゴーレムの足を始まりに、メキメキつと植物が生えてきて、足から胴へ、そして頭部まで根を張り、土のゴーレムの動きを完全に封じてしまった。

それとともに、土のゴーレムと繋がっていたフーケの精神力が吸い取られていく、慌てたフーケは、土のゴーレムを捨てて、なおかつ盗んだ宝を残して力を振り絞つてフライを使って逃げようとした。

しかし、その頭に、タマタマの一部である卵のようなブツが投げつけられ、フーケは精神力が尽きると同時に、落下したのだつた。

なお、タマタマの武勇はこれで終わらない。

本来は鳥系ポケモンの飛行属性などを嫌う草タイプであるタマタマ。それゆえに風属性とはあまり相性が良くなかった。

アルビオンで、ワルドがその本性をむき出し、タマタマはウエールズをリフレクターという技で守つたものの、自分自身の防御が疎かになつたため、エアハンマーを受けてダメージを受けた。

瀕死寸前で転がるタマタマを、ワルドが踏み潰そうとしたため、ルイズが割つて入つて庇い自分が踏みつけられた。

その時、フーケから奪い返した宝である、葉っぱのような石がルイズの懷から落ち、タマタマに触れた。

その瞬間、光り輝くタマタマ。そしてルイズの体をのかして、現れたのは、ヤシの木に似た二本足で立つ植物の生き物、ナツシードつた。

ワルドは、一瞬驚くものの、すぐに冷静になり弱点である風の魔法を放つ。

進化したことで大幅にステータスが上がつたナツシーは、主人を傷つけられた怒りもあり、強力無比のリフレクターを自身に張り、なつかつ強力なサイコキネシスで風の軌道そのものを狂わせて防いだ。

そこでワルドは、奥の手である風の偏在を使つて分身を作るが、次の瞬間、ナツシーと目が合つた。途端に強烈な眠気に襲われ、偏在が消えた。

あまりの眠気に倒れそうになるのを、杖の先で足を刺して眠気を吹き飛ばしたが、ふと見た時、ナツシーが光を集めてソーラービームを放とうと構えているのを見て避けようとしたが、足の傷があり、さらに、ルイズが爆発の魔法を、そしてウェールズが風の魔法で妨害したため逃げることが出来ず、もろにソーラービームが命中することになつた。

ここが建物の中であつたため、光の量が少なかつたこともあります。ギリでワルドは生きていて、レコン・キスタに帰還したのだつた。

その後、ナツシーは、シエスタの故郷であるタルブ村付近で生息するナツシーと番を結び、たくさんの卵をルイズにもたらして、たくさんの方々を仲間にして、上陸してきたレコン・キスタ軍に対して、強力なサイコキネシスを持つて空飛ぶ軍艦をも撃墜してタルブ村を守りきつたのだつた。

余談であるが、この一連のことから、その後トリステインでは、ヤシの木が神聖視されることになるのはずつと先の未来のことである。

## 『ルイズが召喚したのが、スリープだつたら?』

その生き物は、なんともいやらしいような目をしていると、ルイズは最初の頃思っていた。

しかし、その生き物を使い魔にしてからというもの、悪夢にうなされることがなくなつた。

しかし一方で目が覚めたときに、どんな夢も思い出せなくなつた。

スツキリと眠れるよくなつたおかげか、顔色が良くなつたと言われるようになつた。

ある日、使い魔を連れて歩いていると、スリープだ！つという驚いている声が聞こえた。

その声の主は、シエスタというメイドだった。

知つてゐるのかと聞くと、タルブ村の近隣で希に見られる生物で、夢を食べると言われているそうだ。

それを聞いて、ギヨツとしたルイズがスリープを見ると、スリープがちよつとニヤツと笑つた気がした。

なるほど……、最近目覚めても夢を覚えてないのは、コイツに食べられていたからか……と納得できた。

シエスタは、スリープの夢喰いが貴族メイジにとって、ダメージがデカいだろうから気をつけた方が良いと忠告してくれた。

ルイズの知らぬところで、ある変化が起つていた。

ロングビルという名で、学院の秘書として潜入していた土くれのフーケだが、ルイズがスリープを召喚してからを境に、自分が土くれのフーケで、そして宝を盗みに入つたことを忘れて、ロングビルのまま過ごしていた。

その後、アルビオンでのクーデターの最中、ルイズがアンリエツ

タの命を受けて手紙を送り、そしてウェールズに送った手紙を敵に知られないよう取り戻すことになった際に同行したワルドだったが、港町での一夜にて、自分がレコン・キスタと繋がつていて、そして手紙を奪つてくるという任務とウェールズの命を奪うことを忘れた。

そしてそのまま、普通にトリステインの騎士として任務を全うしたのだつた。

あと、ウェールズは玉碎覚悟だつたらしいが、なぜか一夜して、急に心変わりしてトリステインへの亡命を表明したのだつた。おかげでウェールズ、並びに彼に従つていたわずかな部下達は生き延びた。

レコン・キスタ軍がトリステインに宣戦布告し、ワルドが先陣を切つて戦おうとした際、レコン・キスタ軍がワルドにびっくりして、裏切つたのか!? つと言われていて、戦線でパニックが起つたりもした。

ルイズが従軍をしようと親を説得しようとしていた時、スリープが姿を消した。

探し回っているとき、タルブ村へ上陸しようとしたレコン・キスタ軍の軍勢に、タルブ村付近に住むスリープ達と進化後のスリーパー達が潜入し、軍勢を内部崩壊させたという報が入ることになつた。スリープとスリーパーを率いていたのは、ルイズのスリープだつた。

その後、神聖アルビオン共和国の皇帝クロムウエルが、自分がガリア王の使い魔が仕立て上げた偽の虚無の使い手であることを白したり、芋づる式で、ガリア、そして沈黙を守つていた口マリアがその思惑を自白して、世界は軽くパニック。

そんな中でも、ルイズのスリープはにやけていた。

口マリアが何かに操られたように、大隆起のデータを提示。その事実調査が行われ、事実であることが明らかになると、ルイズは久しぶりに見た夢で、聖地にある大いなる意志と呼ばれる巨大な精霊石

を、虚無の力で破壊せよと言われた。

まるでその夢が現実になるかのように、アンリエッタから始祖の祈祷書を渡され、エクスプロージョン使えるようになり、ルイズは虚無に目覚めた。そんなルイズをスリープは嬉しそうに見ていた。ルイズはなんとなく、一連のことがすべて自分のスリープによって引き起こされていると察した。

なぜこうも次々に先読みしたようにスリープが行動を起こすのか。

それは、シエスタの家にあつた曾祖父の日記で明らかになった。スリープやスリーパーには、予知夢という能力があるのだということを。

## 『ルイズが召喚したのが、ナゾノクサだつたら？』

ルイズは、うくんつと、呻いた。

彼女の周りには、ワサワサと大きな葉っぱ達が揺れている。

葉っぱ達：つというのは言葉がおかしいが、事実なのだ。

その葉っぱには、小さな足が二本生えているのだ。そして球根と思われる同じ色の黒い部位には、目と口らしきものもある。どうやらそこが胴体であり、頭部らしい。

ルイズがこの草のような生き物を召喚したのは、三日前。

その時は一匹だつた。

最初は土に葉っぱだけ出した状態で埋もれていたため、ただの草を召喚してしまつたのかとガツカリしたが、コントラクトサーヴァントをしたら、急に飛び出してきたのだ。

ルイズが歩けば、後ろをトコトコと一生懸命ついてくるのは、ちよつと可愛い。

シエスターというメイドが、ナゾノクサだあ！つと驚いていたので聞くと、タルブ村の近隣の森に生息する、不思議な植物性の生き物なのだとか。

普段は土に埋まつてゐるが、月が出ると出てきて種を蒔いて歩くという習性があるらしい。と聞いた。

それを聞いたのは、召喚から二日目。

時すでに遅く、学院の広場の地面や花壇に、無数のナゾノクサがすでに自生していた。

そして全てのナゾノクサには同じルーンが刻まれていて、ルイズに懷いた。

あつという間に学院がナゾノクサだらけになり、ルイズは困つていた。

ルイズのためにいつたん故郷に帰つて、曾祖父の日記やらなどの資料を持ち帰つてきたシエスターが教えてくれた。

ナゾノクサは成長することで、クサイハナという悪臭を放つ花になり、そこから分岐して、ラフレシアという大きな花、あるいはキレ

イハナという美しい花になるのだそうだ。

曾祖父の日記によると、クサイハナがもう一段階成長するには、リーフの石か、太陽の石というものが必要らしい。

日記に描かれている絵を見ると、どこかで見た覚えがある形状だった。

そうだ！つとルイズは思い出す。トリステインの城下町の小物売りが、とつても安い値段で売っている小さな鉱物の置物だつたじゃないかと。てつきり掘つたものだと思っていたが、違つたようだ。

そこでルイズは、早速城下町に行つて、その石をたくさん買つてきた。

学院に帰ると、なんか騒ぎになつてゐるので様子を見に行くと……、そこには、口から涎を垂らし、悪臭を放つ醜い花の生き物がいた。

どうやら、これがクサイハナらしい。

リーフの石と、太陽の石を抱えているルイズを見つけると、クサイハナ達が集まってきた。どうやら、ナゾノクサの何割かが進化したらしい。

ルイズは、クサイハナの匂いに吐き気をもよおしながら、リーフの石と太陽の石を使つてやつた。

すると赤い大きな花のラフレシアと、花飾りを思わせるように頭に花を咲かせ、葉っぱの腰みのの下半身を持つキレイハナになつた。

あとで分かつたことだが……、ラフレシアは、その大きな花から毒花粉を撒き散らし、そしてキレイハナは日光を好むために、太陽を呼ぶ儀式と呼ばれる踊りをして日差しを呼び寄せる。結果、トリステインは歴史的水不足と炎天下のために、日射病と熱中症患者を続出させたのだった。

ルイズは必死に花たちを駆け、やつとの思いでこの問題を解決。

その間にも、ナゾノクサは益々数を増やし、タルブ村近隣の生物から、トリステイン名物の生き物になつた。

その後、ロマリアの策謀により、浮上した聖地と地下にある大いなる意志と呼ばれる精霊石を、凄まじい数のナゾノクサとクサイハ

ナ、そしてラフレシアとキレイhanaが総力を挙げて太陽の力を集め、  
極大のソーラービームを放つことで破壊し、彼らが栄養として吸い上  
げて地下の巨大な風石の地脈を消すのは、そう遠くない未来の話であ  
る……。

## 『ルイズが召喚したのが、プリンだつたら?』

あつ！ 可愛い！と、その生き物を見て、ルイズはまずそう思つた。

薄ピンク色の丸い体に、大きな青い瞳のある目。短い手足と、猫のように尖つた耳がぬいぐるみを彷彿とさせた。

クラスの女子達が羨ましがる中、ルイズは、コントラクトサークulantの儀式に入つた。

あとは、キスだけとなつた時、プー！と怒つたその生き物が何かをした。その瞬間、ルイズの中で何かが封じられた感覚があつた。  
？つと思いつつ、丸い体を持ち上げ、ジタバタ暴れるのも構わずキスをした。

だが……、コントラクトサーヴァントは、一向に成功しなかつた。失敗？ と思つたルイズは、その生き物を降ろして再び杖を手にして呪文唱える。

そして再びキスをしようと持ち上げようとすると、その生き物の小さな手が、バシンツとルイズの手を弾いた。その小ささからは想像も出来ない力だ。

ムカツとしたルイズだが、落ち着けと自分に言い聞かせてコントラクトサーヴァントの儀式を行う。だが成功しない。

やがて授業が始まる時間になつてしまい、コルベールが他の生徒達に先に帰るよう指示した。

ルイズは、焦つて何度もコントラクトサーヴァントの儀式を行う。その都度、不思議なその生き物の小さな手で叩かれ、空気を吸つて倍以上に膨らむということもされて、捕まえられず苦労もしていた。

コルベールは直感で何かを感じて、ルイズの状態を調べる魔法を使つた。

すると……、ルイズの魔法が封じられた状態であることが分かつた。

驚いたコルベールは、ルイズに何かされなかつたかと尋ねた。ルイズは、自分の中の何かが封じられた感覚があつたと答えた。

コルベールは、ルイズの魔法をここにいるぬいぐるみののような生き物が封じたのだと直感した。

このままでは、いくらやつてもコントラクトサーヴァントの儀式は成立しない。問題を解決させるまで保留を言い渡そうとしたが、ルイズは最後だと言つてコントラクトサーヴァントの儀式を行つた。その時には、一時的な封じでしかなかつたかなしばりという技が解けていて、ルイズの魔法の力が解放され、コントラクトサーヴァントの儀式が成功した。

「一、二、三！」とルーンが刻まれる痛みにのたうつその生き物。

散々叩かれてきたルイズは、ちょっとぞまあつと思つた。

やがてルーンが刻まれ終わり、涙目のその生き物がぷうつと膨れて、キツとルイズを見る。

コルベールはその様子を見て、これは：懐かせるのに時間がかかりそうだと思いつつも、ルイズにコントラクトサーヴァントの儀式の成功を言つた。

その後もその生き物は、触ろうとするルイズの手を小さな手で叩くのだった。

まともに触らせてくれたのは約1週間後ぐらいで、膨らみやすいその体はフワフワしていて、とても触り心地が良い。ぬいぐるみなんて目じやない。

その生き物の名は、プリン。

シエスタというメイドが教えてくれた。

歌うこと得意とし。その歌声は聞くモノを眠らせるそうだ。

それを聞いてから一度、プリンに歌を聴かせてくれと言つて聴いたら、丸一日、どれだけ揺すられても叩かれても起きないほどの深い眠りに落ちたという事態となつた。なので、それ以降は聞いてない。

プリンの生態を知つてゐるため、好みの食べ物をくれるせいにシエスタにも懷き、シエスタがギーシュに難癖付けられていた時には、果敢にもギーシュに喧嘩を売り、決闘騒ぎになつた。

そしてプリンが、大きく膨らんで歌声を披露。結果、ギーシュどころか、野次馬達さえ全員を眠らせてしまい、騒ぎになつた。

土くれのフーケが盗みに入つた際には、月の石と呼ばれる宝を取り返しに行つたとき、土くれのフーケが作った土のゴーレムに、かなしばりをかけて土に戻してしまつた。そして焦つたロングビルこと、フーケが何度も土のゴーレムを作ろうと必死になつていたところを、歌声で眠らせて捕まえた。

月の石に触れたプリンは、進化した。

シエスタに聞くと、プクリンという形態で……、その毛皮は非常に珍しくてそのあまりの素晴らしい肌触りから超々高級品として希に売り出される、という話が出てしまつた。

その話がどこからか漏れて、学院の貧乏貴族がプクリンの毛皮を狙うようになり、ルイズの爆発の魔法の精度がメチャクチヤ上がつた。

アルビオンでは、本性を現わしたワルドがプクリンの毛皮の相場を調べたらしく、レコン・キスター軍への資金になるとプクリンまで殺そうとしたので、怒りを爆発させたルイズが渾身の爆発魔法を使い、さらにプクリンがかなしばりを使ってワルドの魔法を封じたため、ワルドは為す術もなく撃退されたのだつた。

ウェールズは死ぬわ、婚約者には裏切られるわで、散々なルイズを、プクリンがその素晴らしい毛皮でフワフワさせて慰めた。

ルイズは、その毛皮に癒やされ、涙拭いたのだつた。

## 『ルイズが召喚したのが、ラツキーだつたら？』

その生き物は、癒やし系な愛らしい見た目をしていて、お腹のポケットに大事そうに大きな白い卵を抱えていた。

おそらくは、この生き物の卵だろうと思ったが、ついつい出来心で触ろうとしたら、外見からは想像も出来ない力で手を弾かれた。

生き物の名前は、ラツキーというらしい。  
シエスタというメイドが、キャー、ラツキーだー！と見て喜んでいたので話を聞いたら、かつて彼女の曾祖父が飼っていたとされ、その後近隣の森に生息地を移した幻のように少ない希少生物なのだとか。

卵を割らないようにゆっくりと歩くが、敵が来れば逆に逃げ足が速くなるという特徴があり、自分を大切にしてくれる飼い主には幸運をもたらすとされるそうだ。

曾祖父の話によると、懐いた相手に産んだ卵をくれるそうで、その卵はすごい美味なのだとか……。

その話を聞いた後日、ラツキーがルイズに卵をくれた。

おいおい！つとルイズは、焦り、突き返そうとしたが、ラツキーは、イヤイヤつと首を振つてルイズに渡そうとしてくるので、仕方なく受け取つた。

大きな卵を抱えて途方に暮れていると、シエスタが通りがかり、卵をくれたんですね！つと言つた。

そしてコック長のマルトーさんに早速料理して貰いましょう！つとルイズを引っ張つて行き、あれよあれよといふ間に、夕飯に美味しそうな大きな目玉焼きが皿に盛られて運ばれてきた……。

ルイズは、自分の愛らしいラツキーを思い浮かべてしまい、涙目になりながら目玉焼きを食べた。

そしてその超絶美味な味に、天国に行くかと思つてしまつた。

その後、定期的にラツキーは、卵をルイズに渡すようになつた。ルイズがラツキーの卵の料理を食べるうちに、ルイズの小柄で凹凸のなかつた体は、徐々に凹凸ができていき、背も少し伸びてきて、な

んかスタイルがよくなつた？つとキュルケに言われ始めた。

ブラウスとブラジャードがキツイ！つと感じた時、ルイズはラツキーにありがとう！と抱きついて感謝したのだつた。

噂は噂を呼び、私もちょうだい！つという女子生徒達が続出。だがラツキーは、卵をルイズにしかあげない。なので無理矢理奪おうとする強行派まで現れる始末で、体の成長とともに魔法の威力や精度も上がつてきたルイズの爆発魔法で撃退されていた。

そんな日々の中、アルビオンへの密命を受けたルイズは、そこでウエールズがルイズの婚約者であつたワルドの裏切りで瀕死にされる事態に巻き込まれた。

ラツキーの歌うという技と、ルイズの爆発魔法でワルドは撃退できたが、ウエールズは虫の息だつた。

するとラツキーが目をつむり、突然体が光り輝いた。

そしてラツキーがパタリツと力尽きたように倒れ、ウエールズが息を吹き返し、起き上がつた。

ウエールズが助かつたことより、ラツキーが倒れたことにルイズは取り乱した。

瀕死のラツキーは、その後治療を受けて回復した。

あとで聞いたら、それはいやしの願いという技で、自分が瀕死になる代わりに相手を全快させる捨て身の技だつたらしい。

ルイズは、身を挺してまでウエールズを救う道を選んだラツキーに怒つた。泣きながら。

なお、ウエールズは、命を捨てるほどの行動で救われた命を無駄にはできんとして、トリステインに亡命して生き延びる道を選んだのだつた。

余談だが、その後アンリエッタとウエールズが婚約を発表した際には、ルイズがラツキーに代わつて絶品の卵を二人に贈つた。その後、子宝にも恵まれたが、それがラツキーの卵のおかげなのかは……分からぬ。

## 『ルイズが召喚したのが、ガーディだつたら?』

その犬は、よく吠えた。

炎を彷彿とさせる、赤っぽい毛皮に黒い模様。フワフワとした黄色っぽい胸毛と頭と尻尾の毛。

いや、実際にこの犬はただの犬ではなかつた。炎を吐くのだ。

ルイズがコントラクトサーヴァントの儀式を行おうとした際に、思いつきり顔面に炎を浴びせられたものだ。ルイズは、炎を操ることが得意なコルベールの助力も得て、なんとかコントラクトサーヴァントの儀式を成功させたが、せつかくの美しいピンクの髪の毛が焼けてチリチリになつた。

70センチと、大きすぎず小さすぎない体であるが、タバサの風竜を前にして勇敢に立ち向かおうとする。勇気があるのか、無謀な性格なのか……。

コントラクトサーヴァントの儀式の時のみ抵抗されたものの、コントラクトサーヴァントの儀式が成功してからは、すっかりとルイズに忠実になつた。

そこいらの犬より圧倒的に頭も良いらしく、教えればすぐ実行できるようになる。秘薬の材料となるモノを拾つてくるとかは、教えればできるだろうが、生憎とルイズには、秘薬の調合ができないため、まだしていない。

しかしながら、その忠実さ故に、ルイズをゼロと蔑む目や、言葉に敏感で、そうした相手によく吠えた。その吠える声に、たいがいの使い魔達は臆して逃げていく。例え大きな体の竜でさえも。

怒つてくれるのは嬉しいが、あまりうるさくされても困るので、そう教えると、しょんぼりと項垂れる。その姿に、ルイズは、ゼロでごめんね：つと涙ぐんだ。

ある日、ガーディだ！と言つたメイドがいた。

シエスタというメイドが教えてくれたが、この犬は、ガーディという種類で、炎を操ることが出来る珍しい犬だそうだ。

彼女の曾祖父が飼っていたのが、曾祖父亡き後、野生化してその

まま近隣の森に住み着いているらしく、一度主人と認めさせれば、実際に忠実で心強い犬なのだそうだ。

ある特殊な石を使うことで、ワインデイという大型の犬にも成長できるそうだが、その石については分からないと言われた。

別に今までも十分すぎるほど可愛くて心強い使い魔なので、ルイズは別に気にしなかつた。

ギーシュのワルキューレを一瞬で蒸発させるほどの火力や、土くれのフーケの大きなゴーレムを丸焼きにした大の字の炎を見た時は、さすがにビビったが……。

ある日、ルイズは、トリステインの城下町で鉱物の小物を買い、部屋に飾つた。

炎の形が模された石であるが、すごく安くて珍しくはないらしい。なので深く考えていなかつた。

ルイズが目を離した隙に、ギャインツ！という鳴き声が聞こえ、見ると、そこにはガーデイではなく、ガーデイを倍にしたようなモフモフの大型の犬がいた。

たてがみのようにモフモフになつた黄色っぽい頭の毛が、なんとなく獅子を彷彿させるほど大きく、2メートル近くある。急に成長したため、ワインデイはひつくり返り周りを壊し、落としたりもしていた。

ワインデイを部屋の外に出して、片付けていると、あの炎を模したような石だけが無くなつていた。どうやら、あの石がガーデイを進化させるための石だつたらしい。

大人ぐらい乗つても問題ないぐらい大きくなつたワインデイは、ルイズを乗せて走れるようにもなつた。

最初こそ急に大きくなられてしまつて困つていたルイズだつたが、モフモフ感が増したことや、自分が乗つて走られるようになつたことが嬉しくて、広場をよくワインデイに乗つて走り回つた。城下町に用があるときも馬の代わりに乗つて回つた。

ところがある日、ワインデイが姿を消した。懸命に探したが見つからず、泣いていると、やがてワインデイが卵を背中に乗せて帰つて

きた。

シエスタは、たぶん、繁殖期だつたから、タルブ村近隣まで番を見つけに行つたのではないかと推測していた。

ウインディは、メスだつたらしく、ルイズと共に卵を大事に育て、やがてガーデイが生まれた。そのガーデイにも同じルーンが刻まれていた。

つていうか：犬つて、卵から生まれるつけ？というツツコミは野暮だつたかもしない。

## 『ルイズが召喚したのが、デイグダだつたら?』

何度目かの爆発。

いい加減にしろよ! つという声が聞こえる中、ルイズは、ヘトヘトになつて膝を突いた。

やはり自分はゼロなのか? このままヴァリエール家の汚名となつてしまふのか? つと絶望していたときだつた。

爆破で空いた穴の方から、モコモコと地面が盛り上がり上去つていき、ルイズの前で、ポコッと何かが飛び出してきた。

それは……、なんかの生き物の顔だつた。

体の方は地面に埋まつてゐるので分からぬ。

つぶらな黒い目と鼻らしき丸い部位があるが、それ以外はない、丸い感じで、耳もなく、シンプルな見た目である。

ルイズがキヨトーンとしているところ、コルベールがコントラクトサーヴァントの儀式を促した。ハツとしたルイズは、自分が召喚した(?)らしき、変な生き物にコントラクトサーヴァントの儀式を施した。

コルベールは、たぶんモグラの一種じゃないかと推測していたが、こんなモグラ聞いたことも見たこともない。

モグラと言えば、ギーシュのジャイアントモールなんかが良い例だが、アレに比べると、ずいぶんと見劣りするようと思える。

常に地面の中にいて、ルイズが歩くと、地面を掘つてついてくる。さすがに建物の中までは掘れないのについてこない。

その代わり、ルイズが建物から出でてくるとすぐに顔を出す。

図鑑で調べたり、生物に詳しい教員に話を聞いたのだが、やはりこのモグラらしき生き物について分からなかつた。

ところが、あるとき、デイグダだ! つと驚いた声をあげたメイドがいた。

シエスタというメイドに知つてゐるのかと聞くと、モグラの一種で、タルブでは一部で神聖視されている生き物なのだとか。

なぜなのかといふと、デイグダが掘つた後の地面は、非常に優れ

た畑の土になるのだという。

もともと瘦せた土地だつたタルブだつたが、シエスタの曾祖父が飼つていたデイグダと、ダグトリオというデイグダの生長後の姿の生き物が来てから劇的に土地が豊かになつたらしい。

その後、曾祖父亡き後、野生化してからは、元々無かつた森をデイグダ達が育て上げ、たまに瘦せてしまつた村の畑に現れるようにもなつたらしい。

なんだそれは！ もはや伝説の粹じやないか！ つとルイズは驚いた。穴を掘つて移動するしか能が無いなんて思つた自分が恥ずかしくなつた。

その後、ギーシュが自分のジャイアントモールこと、ヴエルダンデと比べて能が無いと馬鹿にしてきたのだが、ルイズが怒るよりも早く、デイグダが穴を掘つて、ギーシュを即席の落とし穴に落としたのだった。

さらにその後、ヴァリエール領の作物の取れ高が下がつていると聞き、エレオノールが畑の地面を調べたそしだが、土地が痩せ始めているということが分かつた。

ルイズは、デイグダに、なんとかできないか？ つと頼んだところ、デイグダは、穴を掘つてタルブまで行つた。しばらくして、タルブ村近隣に住む、仲間やダグトリオなどを連れてきて、ヴァリエール領の畑を耕してくれた。

結果、作物の取れ高は、前以上に上がつた。

その話は、瞬く間に広まり、どうか自分達の土地を救つてくれないかという依頼が来るほどだつた。そんなこんなで、全国あちこち、時に余所の国にも出張して畑を耕して、時に森を育て上げたりもした

り。

ルイズは、知らぬ事だが、こうしてハルケギニア中の土地をデイグダとダグトリオ達と共に回つてゐるうちに、土地の底に眠る、風石の地脈が碎かれ、土地の肥料としてデイグダ達が密かに利用していたのだつた。

余談だが、大隆起を危惧して様々な策を考えていたロマリアが大

隆起の原因となる風石の地脈の存在を明らかにしようとして各国に調査を求めるが、地脈が見つからず恥をかくことになるのは、そう遠くない未来である。

## 『ルイズが召喚したのが、パウワウだつたら?』

真っ白。

それがルイズの最初の印象だつた。

学院に設けられた、水系の生物の使い魔を飼育するための場所にルイズが近づくと、その白い生き物がすぐに顔を出してくれる。

とびつきり美味しいお魚があるわよと言つて、魚が入ったバケツを見せると、縁に上がつたその生き物が、尻尾で立つてパンパンヒレのような手を叩いた。

真っ白なその生き物の名は、パウワウ。

学院に勤めているメイドのシエスタが教えてくれた。タルブ村に隣接する海の岩場でたまに見かけられる水棲の生き物らしい。

本来は、冷たい海の方にいるそうだが、元々はシエスタの曾祖父がどこからか連れてきた不思議な動物で、曾祖父が亡くなる前に海に放し、そのまま繁殖。しかし思い出したように、たまに子孫達が帰つてきては姿を見せると言われているそうだ。

成長するとジユゴンという、氷さえも操る強力な生き物になるそ  
うだ。

あなたも、シエスタの曾祖父が懐かしい？　と聞いても、パウワ  
ウは答えられないし、魚に夢中で全然聞いてない。

愛らしい見た目も相まって、ルイズは、ついついパウワウを甘や  
かした。

結果、通常の個体より、ふくふくに太つてしまつた。住まわせて  
いる環境が狭いせいで、運動不足も祟つていた。

太つちよのマリコルヌに馬鹿にされた時は、さすがにルイズも焦  
り、ダイエットさせる！と決めた。

陸に引っ張り上げて、芸をさせるなどして躊躇するが、面倒くさそ  
うにコロコロと転がるばかりで言うことを聞かない。

かといって、餌をあげなかつたら、他人の魚の使い魔を食べてしま  
うのだ。

ルイズがどうしたものかと考え込んでいると、シエスタが一計を

を案じ、タルブの海へ連れて行きませんか？と提案した。

嫌がるおデブなパウワウを馬に荷物のように乗せて、シエスタを借りるという書類を提出して、タルブの海へ向かつた。

意外にも力持ちなシエスタに運ばれて、おデブなパウワウは、久しぶりの海へと連れて行かれて驚いていた。

そして近くの岩場に、仲間のパウワウがいると気づき、パウワウと鳴いた。しかし、相手のパウワウは、ジトツとこちらを見ると、すぐに海へと逃げていった。

おデブなパウワウは、落ち込んだ。どうやら、人間には分からぬが、おデブなことを指摘されたっぽい。なんとなく雰囲気で分かった。

ルイズがパウワウに目線を合わせて、分かつたでしょ？ おデブなパウワウは、コクリッと涙目で頷いた。

それからは、毎日ダイエットのための運動を欠かさなかつた。学院のプールを借りて泳がせたり、ついでに芸も仕込んだ。

そのおかげか、パウワウが美しく成長した。

シエスタが、ジュゴンだ！ と言つたので、いつの間にやら進化したらしい。

シユツとなつた体は、美しい曲線を描き、真つ白だつた体はより白くなつて、可愛らしさに美しさが兼ね備えられたようだ。

これなら、使い魔品評会でも絶賛だろうつとルイズは、自信を持つた。

ところが品評会では、ジュゴンは氷のビームを放ち、忽ちルイズ型の氷の像を作り上げて見せた。

結果、品評会はジュゴンの優勝だつたが……、ルイズは、会場の裏でジュゴンをペシーン！ と叩いた。赤面して。

なぜかというと、ルイズの氷の像は、裸だつたからだ……。

どうやらこのパウワウことジュゴンは、エロ思考持ちのオスだつたらしい。

勝手にメスだと判断していたルイズは、ジュゴンと一緒に裸で泳ぐんじやなかつた： つと顔を覆つたのだつた。

## 『ルイズが召喚したのが、ワンリキーだつたら?』

ルイズは、自分の使い魔を食堂で見つけて、何をやつてるの?と思わず聞いた。

お盆に重たそうな皿の束を乗せつつ片手で支え、もう片手で食事を乗せたワゴンを押しているのだ。

薄い青緑っぽい肌に、髪の毛を思わせる頭部の突起、80センチしかない小柄ながら、しかし体は力にあふれているらしく、毎日特訓をしている姿が見られる。

召喚した後日に、シエスタというメイドが、ワンリキー!と言つてビックリしてたので、話を聞くと、この生き物はワンリキーという生き物なんだとか。

この見た目で体力が有り余つており、特訓を欠かさない向上心にあふれた不思議な生き物なのだとか。

胸の脇辺りに肋骨のような縞模様があるので触つてみたら、筋肉だつた。

シエスタの話によると、元々は曾祖父がどこからか連れてきた生き物で、成長することでゴーリキーや、カイリキーという形態にもなり、自分にとつて良いトレーニングになるのならば人間にも協力する頭の良さを兼ね備えており、当時タルブの畠を広げるために大岩をどうかして回っていたそうだ。

曾祖父亡き後は、野生化し、近隣の森でたまに姿が見られ、時々タルブ村を襲おうとする盗賊の類を倒しているとか?

ワンリキーの生態を一部知っているシエスタは、手伝つて貰う度に、そのお駄賀にワンリキーが好きな木の実をあげるなどしていて、そのためルイズの次に懐かれていた。

そんなある日、ギーシュがシエスタに難癖付けてきた。

原困は彼女が香水を捨い、それが原困で二股が発覚して、二人共に振られたことへの八つ当たりだつた。

ルイズも周囲も呆れ返る中、ワンリキーがギーシュのマントを掴

み、引きずり倒すと、ビシツと食堂の外を指差した。怒った顔で。

ルイズは、なんとなくだが、ワンリキーは、難癖付けている暇があつたら、二人に謝りに行け！と言っている気がした。人間の色恋沙汰の良し悪しも分かるなんて、なんて頭の良い子なんだろうとルイズは感心した。

しかしギーシュは、言葉が喋れないワンリキーのその行動を、決闘と受け取つたらしく、マントを払うとワンリキーに杖を向けたのだ。

ルイズが止めるよりも早く、あれよあれよという間に決闘騒ぎ。

ワンリキーは、青銅で出来たワルキユーレを、持ち前の怪力で破壊したり、ぶん投げたりして、圧倒的にギーシュに勝つた。

精神力が尽きて、降参だと白旗を振るギーシュを掴み、持ち上げて、野次馬に紛れていたモンモランシーの前に連れて行き、頭を無理矢理下げさせられて、ギーシュは、やつとワンリキーが謝れ！という意味で行動していたことを理解したのだつた。それがきつかけだつたかは分からぬが、ギーシュは、ワンリキーに敬意を示し、たまに一緒に特訓している姿が見られるようになつた。

その後、土くれのフーケの盜難事件では、フーケの巨大な土のゴーレムを、ゴーリキーに進化したワンリキーが、地球投げなる技で一撃で星の彼方にゴーレムを放り投げて撃退し、ルイズを裏切つた上にウエルズを暗殺したワルドも、苦手な風属性をものともせず、教会内にあつたブリミルの像をバット代わりにして、ワルドを彼方へ打つて飛ばした。

タルブがレコン・キスタ軍に襲われた際には、近隣に住む仲間達を先導して、大岩を下からぶん投げ、空中戦艦さえ破壊し、ルイズがエクスピロージョンを唱えるまでの時間を稼いでくれた。

レコン・キスタとの戦いが終わつた後、アンリエッタからの密命を受けて、城下町の情報収集をすることになつた際は、なぜかスカラに気に入られ、どこで用意したのかゴーリキーに合う制服を着せられて給仕をさせられていた……。

その影響かは不明だが、情報収集の任務の後、なぜかカイリキー

に進化した。

なんだかんだあつたが、ルイズは、頼もしい怪力の使い魔に大満足していた。

## 『ルイズが召喚したのが、ミニリュウだつたら？』

卵！

それがルイズの第一印象だった。

何度目かの爆発の後、煙が晴れたら、そこには何かの卵があつた。大きさは、鶏の卵なんて目じやないほど大きい。ルイズでも両腕を使わないと持ち上げられないほど大きい。

ルイズは、ガツカリした。美しくて強い使い魔を所望していたのに、来たのは得体の知れない卵。

たちまちルイズを馬鹿にする声と笑い声があがる。

コルベールに促されて渋々、卵にコントラクトサーヴァントの儀式を施すため、呪文を唱え、どこでもいいからキスをしてみる。

すると、殻が内側からコツンコツンと音を鳴らしているのに気づいた。

そしてルーンが吸い込まれるように殻の表面に刻まれたかと思うと、卵が割れた。

そして中から、1・8メートルはある、蛇のような生き物が飛び出してきた。その胴体には卵の殻に吸い込まれたルーンが刻まれている。

ただの蛇じゃない。薄い青色の胴体だが、鼻らしき丸い部位があり、そこから下、腹にかけてさらに色が薄くなつていて白っぽい。目は黒くてつぶらで可愛らしく、眉間に中心に点のような白い部位があり、魚のヒレを思わせる耳（？）が両側にある。どこから見ても手足はなく、その蛇のような生き物は、ジーッとルイズを見つめていた。コルベールがルーンを調べて、ルイズにおめでとうと賞賛の言葉を使つた。

ルイズは、呆気にとられた。明らかに卵より大きいからだ。

ルイズが謎の蛇（？）を召喚したことで、使い魔召喚の儀式は終わり、コルベールが生徒達に学院に帰るよう言つた。

フライが使えないルイズを、フライで飛んでいく生徒達が馬鹿に

してくる。ルイズは、悔しくて唇を噛んだ。

すると、謎の蛇（？）が、キッとその馬鹿にしてきた生徒を睨み。リュー！と鳴く。

すると、突如として小型の竜巻が発生し、フライで飛んでいた生徒達が吸い込まれて洗濯物みたいに回された。ついでにコルベールまで巻き込まれていた。

ルイズは、ギョッとして謎の蛇（？）を見る、謎の蛇（？）は、リュー！リュー！と鳴いてペチペチと地面を尻尾の先で叩いている。

ギヤー、キヤー！と竜巻でもみくちやにされている生徒達の悲鳴を聞いて、ルイズは、慌てて、止めて！と謎の蛇（？）に訴えた。謎の蛇（？）は、ルイズをジツと見て、納得いかないような顔をしてから、竜巻を消した。

低空だったため、奇跡的に怪我人はいなかつた。  
タバサが目を回しながら、自身が持つ大きな杖を支えにして言った。

たぶん…、ソレ（蛇のような生き物）…、竜…つと。

その後、竜に関する伝承を調べたところ、遠い異国の中では、竜は天地を操り、雨風すらも自由自在に操れるというものがわかつた。

もしかしたら、自分が召喚した得体の知れない竜は、その類かもしれないと思った。生まれたてだというのに、あれだけ風を操れるのだ、潜在能力は凄まじいのだろう。

で…、その問題の竜は、ルイズの部屋を作られた使い魔のための藁の上で体を丸めて寝ている。

恐らく生まれたての上に、急に大きな力を使つたから疲れているのだろう。

ルイズは、図書館から借りてきた本を閉じ、自分も疲れたので、早めに就寝することにした。

その夜から朝まで、ルイズはうなされた。重たいものが体の上に乗つて来る夢を見て…。

そして目を覚ますと、藁の上にいたはずの謎の竜が、ベッドの、ルイズが被っている布団の上に乗つかつて寝ていた。

大きさの割にすごく軽いようだが、それでも乗つかられると辛い（※3・3キロ）。ルイズは、布団を剥いで、ベッドの横に竜を落とした。

目を覚ました竜が、抗議するように鳴く。ルイズは、寝起きも合わさり、竜を叱った。

パンスカ怒りながら着替えていると、ふとルイズは、この竜の餌について思った。

口は見えない。鼻で隠れているのか？ そもそも草食？ 肉食？ 雑食？

しょんぼりと体を丸めている竜に聞いても仕方ないので、朝ごはん食べさせてあげるから来なさいと命令して、食堂に向かった。

生の食材を見せれば食いついたのを選べるので、食堂の調理場から持ってきてくれないかとメイドに頼むと、そのメイドは、ミニリュウだあ！と驚いていた。

どういうことかと聞くと、シエスタというメイドの故郷でごく希に見られる、珍しい竜の一種だという。

あと、一段階ほど成長するそうだが、これで、ミニ・ルイズは、ミニリュウを見た（※1・8メートル）。

シエスタは、かつて曾祖父が飼っていたハクリューが、天候を操り、水不足や日照り不足だったタルブを何度も救つたという逸話を熱く語った。

聞いていると、ハクリューは、一段階目の形態で、次の形態は力イリューという四肢を持つ竜らしい。

餌は何が良いのかと聞くと、たぶん雑食と言われたので、肉と魚、あと野菜の切れ端などをたくさん持ってきてくれて、それをミニリュウは全部食べた。生まれたてから何も食べていなかつたので相当お腹を減らしていたらしい。

食べ終わって、ケプツとゲップをすると、ミニリュウの体が脱皮した。

シエスタが、皮を貰つて良いですか!? と聞いてきたので、圧されたルイズは、勢いで承諾した。シエスタは、喜々とお財布にミニ

リュウの皮を入れていた。

あつ、脱皮し続けて大きくなるらしいですよ！とシエスタが言った。

あと、ついでに、成長も遅いらしいので注意が必要です、とも言われた。

その後、毎日何度も脱皮を繰り返したが、ほとんど成長しているように見えず、やきもきした。

ルイズは、毎日メジャーを使ってミニリュウの成長を記録した。計つてみると、びみょーーーにちょっとびりづつ成長しているのは分かつた。

その後、ギーシュの二股発覚事件での決闘から、土くれのフーケの盗難事件を経ても、まだハクリューにはならなかつた。

そして、アルビオンへの密命にて、ルイズの婚約者であつたワルドが裏切つた時、その時が来た。

白く光り輝いたミニリュウの体が伸び、そして4メートルはある大きさに成長すると、恐ろしいスピードで、ウエールズに迫つたワルドの攻撃を防ぎ、キツとワルドを睨んで、水を纏つた尻尾の先端でワルドの腹を突いて倒した。

ギリギリで風でガードしていたワルドは、逃げながら捨て台詞でレコン・キスタ軍が迫つてきていることを告げると、ハクリューが天井に空いた穴から翼もないのに空を飛び、迫り来る大軍に向かつて、竜の怒りなる技を放つた。

天候は荒れ狂い、空中戦艦は空中で衝突し合い、竜騎士は、雷に打たれて焼かれて焦げ、陸上の兵達は、迫り来る竜巻と増水して生き物のように襲いかかつてくる水に逃げ惑つた。

それが大量の経験値となり、ハクリューをさらに成長させる糧となる。

天空でカイリューへと進化を遂げたことで、放たれた破壊光線がトドメとばかりにレコン・キスタ軍の中心を破壊した。

たつた一匹の竜によつて、アルビオンの反乱の戦は、終息させられてしまつた。

ワルドの攻撃を受けてしまって氣を失っていたルイズが目を覚ました時には、すべてが終わった後だった……。

カイリューによる破壊の余波で壊れてしまつた教会で、ぼう然とするルイズの傍に、カイリューが舞い降りてきて、ルイズを抱き上げて、もう用はないと言わんばかりに学院へと帰つていつた。

この出来事は、生き残つたウエールズによつて立ち直つたアルビオンやトリステインで、『竜の怒りの日』と呼ばれ伝説になるまで語り継がれていくことになる。

## 『ルイズが召喚したのが、ゴースだつたら?』

何度も目の爆発の後、煙が風に乗つてルイズの方に流れた。

ルイズは、へたり込む、もう限界だつた。

コルベールが見かねて、明日にしようと言おうとしたときだつた。

揺れていた煙が、紫色に変色し、目と口が現れた。

ルイズがそれを見て驚いていると、ガスのような体のそれがルイズを包み込む。肺に入り込んできて、ルイズは激しく咳き込んだ。

コルベールが杖を構えるが、炎を放とうとして躊躇した。なぜならルイズを包み込むようにガスの生き物がまとわりついているからだ。

ルイズの体力がゴリゴリ削られながら、切れ切れにルイズは、呪文を唱える。

そして、呪文を唱え終え、酸欠で息が切れてついに倒れるとき、当然だがルイズを包み込むガスの体に唇が触れる。その瞬間、金切り声のような鳴き声を上げ、ガスの生き物がルイズから離れて宙でもがいた。

黒紫色の球体に紫のガスをまとつたような姿。球体には、鋭い目と、牙の生えた口がある。球体部分が顔であり胴体なのか、そこにルーンが刻まれていた。

ルイズは、氣絶しておりそれを確認することはできなかつた。確認が取れたのは、保健室で目を覚ましてからだつた。

起き上がるとコルベールがいて、背筋がゾワゾワとなる感触があつたので振り返ると、あのガスのような生き物がニヤツと笑つた。幽霊にでも出会つたかのようにルイズは悲鳴を上げて逃げたがコルベールが、それは君の使い魔だと言つたので一旦止まつた。

宙をフワフワ浮いているソレは、ルイズの反応にニヤニヤ笑つているようだつた。

幻獣の一種か?つと、コルベールは呟いていた。

ルイズが移動すると、後ろをついてくるが、不意にすぐ背後に

くつついで背筋をゾワゾワさせてくるので、うつとうしくムチを振つてもまつたく手応えがない。なにせガス状なのだ。

ルイズがイライラしていると、ゴースだ！つという悲鳴が聞こえた。

見ると洗濯籠を落としたメイドが逃げようとしてたので、捕まえて知つてゐるのかと聞いた。

このガスの生き物の名前は、ゴース。

シエスタというメイドの曾祖父の話によると、悪霊の一種だとされており、獲物を包み込んで息の根を止めるそうだ……。

つまり召喚の儀式の場で、危うく殺されかけたということだ。それを理解したルイズは、戦慄した。

二段階も成長する特性があり、どれもこれも相手の息の根を止めるタイプばかりらしい。そのため、ゴース、ゴースト、ゲンガーがたまに現れるとされるシエスタの故郷の近隣では、夜には決して外へ出ないという決まりがあるという。うつかり夜中に近隣の森へ行つて、帰つてこなかつた者が最近いるそうだ。

そんな怖い話を聞いて、ルイズは、恐る恐るゴースの方を振り向く。ゴースは、ルイズの反応を見てニヤニヤしているだけだつた。

ゴースを召喚してからというもの、死んだ祖父母がこつちに来るな！ と川の向こうから必死に手を振つてゐる悪夢を何度も見た。

ああ…、いつか使い魔にとり殺されるんだと…、遺書のような日記を書くほどルイズは、鬱になつた。

ある日、宝物庫付近でオールド・オスマンの秘書であつたロングビルが、遺体となつて見つかつた。遺体には胸と首を搔き篋つたような形跡があり、呼吸器系をやられた可能性が高いとみられ、シエスタからゴースの説明を聞いていたコルベールが、ゴースの犯行じやないかと意見した。

結果、ゴースはルイズから引き離されたものの、ガス状の体故に隙間さえあればいかなる結界をもすり抜け、学院をさまようよくなつた。

やがてゴースは、ゴーストへと姿を変えた。

アルビオンへの密命を受けたルイズは、婚約者のワルドと共にアルビオンへ向かつたが、その道中の港町で、ワルドが変死した。

起きてこないので様子を見に行つたルイズが見たのは、全身を震え上がらせながら、寒い…寒い…と布団を被つて真っ青な顔で転げ回るワルドと、そんなワルドを見おろして、ニヤニヤ笑つて、ゴーストだつた。ルイズは、悲鳴を上げ、ゴーストに爆発魔法を使つて追い払い、医者を呼んだものの意味を成さず、ガタガタと震えながらワルドはやがて死んでいつた。

ルイズは、たつた一人で果敢にもアルビオンへと向かい、奇跡的にウエールズと接触でき、手紙を受け取つた。

まるで何かに守られているように、何事も無くルイズは、帰路についた。

学院までの道中、馬を止め、ルイズは、聞いた。

そこに…、いるの？ つと。

するとルイズと馬の影から、ゴーストからゲンガーへと姿を変えた悪霊の使い魔が現れ、歯を見せてニヤ~つと笑つて見せたのだった。

その後…、アルビオンを制圧したレコン・キスタ軍だつたが、トップのクロムウエルを始め、幹部達が次々に怪死したため、統率が取れなくなり、自己崩壊したという噂を、実家に引きこもつたルイズは、偶然耳にしたのだつた……。

ルイズの影から、ひよっこりとたまに顔を出すゲンガーは、ルイズと視線が合うと、変わらずニヤツと笑うのであつた。

## 『ルイズが召喚したのが、ドードーだつたら?』

何度目かの爆発の爆風が、春風によつて晴れると、そこには、一匹の見たこともない生き物がいた。

細くて長い二本足。茶色い羽毛に包まれた丸みのある胴体。そこから生えているのは、黒くて長い首を持つ二つの頭。目はクリツとして可愛いく、体を支える足の形と長いくちばしが鳥であることを示していた。だが翼はない。しかも、1・4メートルと結構でかい。なにこれ?と、まずその場にいた者達全員が思った。

やがてその謎の鳥(?)は、二つの頭をキヨロキヨロと器用に動かし周りを見回し始めた。二つの頭だけに、意識が独立しているらしい。

コルベールが、ルイズにコントラクトサーヴァントの儀式を促し、ハツとしたルイズが歩を進めると、ビクツとなつた謎の鳥(?)は、次の瞬間背中を向けてすごいスピードで走つて逃げていった。

一見骨のような細い足は、翼の代わりに走ることに特化していたらしく、なんて素早いこと。

その後、コルベールも手伝つて逃げ回るその謎の鳥を捕まえようとした。しかしその速さたるや、そんじよそこの馬より圧倒的に速い。

見かねたキルケがタバサに頼み、自分の風竜に乗つて宙から魔法を撃つて倒れたところをルイズがコントラクトサーヴァントの儀式をした。

キスしようとした際、最後の悪あがきと鋭いくちばしでつつかれまくつたが、つつかれた際に偶然くちばしの先がルイズの唇に触れ、結果ルーンが刻まれた。

謎の鳥(?)は、ルーンが刻まれる痛みに耐えきれず、力尽きて氣絶した。

コルベールに運んでもらい、大型使い魔を飼育するための舎にひとまず入れた。

目を覚ますまで様子を見ていると、やがて謎の鳥（？）は、目を覚ました。

だいじょうぶ？ と声をかけると、ルイズの額を、ゴツと片方の頭がくちばしでつついた。

ルイズは、額を抑えて悶絶。その様子を、謎の鳥（？）は、ケタケタ笑うように二つの頭で鳴いた。

キツと睨んだルイズが、ムチを取り出して振り上げるが、その手のムチを立ち上がった謎の鳥（？）が蹴り上げて飛ばした。そしてまたケタケタと笑われた。

手を押さえて、くー！と悔しがるルイズ。

すると、ドードーだ！ という声が聞こえた。

舎の餌置き場の隙間から、一人のメイドが中を見ていた。

シエスターというメイドに話を聞くと、ドードーという鳥の一種らしい。羽の無い鳥なんてあり得ないとルイズが言うと、シエスターの曾祖父がかつて飼っていたそうで、飛ぶ代わりに足がよく発達していって、とても足が速い特別な鳥なのだという。

さらにドードリオという、もう一段階成長する特性もあるそうで、そうなると、もつと速いそうだ。

しかもそこまで成長すると、頭が三つになるそうだ。

げつ、トルイズは思った。ただでさえ、足癖が悪いし、主人を馬鹿にしたように鳴くのに、それ以上にうざつたくなるのかと。

全然懷いていないらしいドードーに手を焼いていると知ったシエスターは、かつて曾祖父は、ドードリオに乗つて走つていたという話があるから、頑張ればきっと背中に乗せてくれると励ました。

この日から、ドードーとの攻防が始まった。

毎日のように声をかけるが、つつかれる。手を出せばつつかかる。

餌をあげると、手ごとつつかかる。

血は出ないので加減はしてくれているらしいが、痛いのは変わりない。

そんなある日、国を挙げて大型使い魔を使ったレースを開催する

という知らせが入った。

ルイズもちよつと出場を考えたが、まだドードーの形態なので、諦めようとした。その時、舎の方がなんか騒がしかつたので、行つてみると、そこには、1・8メートル以上はありそうな、頭が三つになつたドードー…否、ドードリオがいた。

おそらくだが、馬鹿にされたので怒つてゐるのか、生徒の何人かを追い回してつづいていた。

ルイズが、爆発魔法を使つてビックリさせて止め、目つきがものすごく悪くなつたドードリオに、レースに参加するわよ！と言つた。するとプレイッと素つ氣なくそつぶを向くドードリオに、アイツらを見返したくない？と、先ほどドードリオが追い回していた生徒達を指差して聞いた。すると、ドードリオは何か考えるように、三つの頭で顔を合せ、それからルイズを見た。

ドードリオは、背中を向け、しゃがんだ。それは、まるで乗れと言つてゐるようで…、ルイズは、恐る恐るドードリオの背中に乗つた。そしてルイズが乗ると、ドードリオが立ち上がつた。高くなる視界、慌ててルイズがドードリオの首を掴んでしまうと、ドードリオが苦しみ、暴れた。

結果落とされ、ドードリオが抗議するように鳴いた。ルイズは、尻をさすりながら、ごめん…と謝つた。

そして、レース当日。ルイズは、ちゃんと手綱を付けて出場した。陸地系の使い魔の出場枠で、ドードリオの存在はかなり目立つた。

変な鳥！という出場者貴族のヤジに、ドードリオが、ギツと睨むので、背中に乗つてゐるルイズが落ち着くよう首をさすつた。

レースのスタート位置に着き、スタートの合図と共に、一斉に使ひ魔達が主人を乗せた状態で走り出す。

ルイズのドードリオは、圧倒的なスピードで他を圧倒し、一位をもぎ取つた。

あまりの速さに、ズルしたんだろ！と同じく出場してゐた、あの時の貴族が抗議してきたが、魔法を使つてゐるかどうか調べて貰い、

使い魔の実力だと証明すると、せつかく二位だったのに順位を剥奪されたのだつた。

ルイズが苦笑しながら、ドードリオを見ると、ドードリオは、フンツと鼻息をもらし、ざまあみろつと言わんばかりに立つていた。まつたく…もう…と、ルイズは苦笑しつつ、ドードリオを撫でた。

『ルイズが召喚したのが、コイルだつたら?』

何度目かの爆発。

爆風がモクモクと上がる大穴を前に、ルイズはついに力尽きて両膝をついた。

コルベールが見かねて、明日にしようと言おうとしたときだつた。

チーーつというような、長い音が聞こえ、徐々に薄れていく爆風の中に何かが浮いていた。

それは、30センチぐらいの浮遊物だつた。

浮遊物? だがこれ以外に例えようが無いのだ。この得体の知れなさは。

それは、U字型の磁石という金属を吸い付ける鉱物が左右にあり、金属で出来た丸い胴体には、目と思しき白い丸いものがあり、その中心に点のような瞳らしきものがある。金属で出来たネジという代物が頭部にひとつ、そして足と思しき下の部位に二本。

目と思しき部分が、ジロジロと周りを見回すように動いている。それでこれが生き物だと分かつた。

何あれ? 何あれ? つとさつきまでルイズを馬鹿にしていた生徒達が困惑しだす。

コルベールが、これがルイズが召喚した使い魔候補だと認識し、コントラクトサーヴァントの儀式を促した。

ルイズは、顔をしかめたが、サモンサーヴァントによる爆発の跡の上に浮いているので、おそらく自分が召喚したのだろうと思い直し、儀式を施そうとその謎の金属物に近づいた。

せわしなく動いていた目が、ルイズを見る。

ルイズが杖を構えた瞬間だつた。

チーーつと金属音を鳴らしたソレが、電撃を放つた。

アアバババババ! つとルイズは、感電して倒れた。

ギヨツとしたコルベールと、他の生徒達。コルベールは、謎の金属物を大人しくさせようと杖を構えたら、コルベールを見たソレが、

凄まじい嫌な音を出した。あまりの嫌な音に、コルベールも、生徒達も使い魔達も耳を押された。

フヨフヨと宙を浮いていたソレが向きを変えて移動しようとした時だつた。倒れた状態でコントラクトサーヴァントの儀式の呪文を唱えたルイズが、下からソレの磁石部分を掴み、口はどこかは分からぬがとにかく勢いでキスをした。そして鉄の味を感じつつ、ルイズは今度こそ意識を失つた。

ルイズが気がついたのは、保健室のベッドの上だつた。

コルベールが目が覚めたかい？と聞き、ルイズが起き上がりると、チーという音が聞こえてそちらを見ると、ルーンが磁石部分に刻まれた金属物のような生き物（？）がいた。

警戒するルイズに、コルベールがコントラクトサーヴァントの儀式は成功だと言つた。

フヨフヨと宙を浮いているソレは、何をするわけじゃなく、歩けばルイズの後ろについてきた。それだけだ。

コルベールがこの鋼の生き物がどういう原理で浮いているのか、それともそもそも生き物の一種なのかと興味津々な様子であつたが、ソレは、まつたくコルベールに興味ない様子であつた。

得体の知れなさと、最初に電撃を受けたので警戒するルイズに、思わず救世主が現れる。

コイル！つというビッククリした声が聞こえた。シエスタというメイドだつた。

話を聞くと、この生き物（？）は、コイルといい、鋼で出来た体をしており、敵が来ると金属音や電撃を放つてくるそうだ。

また電気に惹かれる性質があるらしく、シエスタの故郷では、雷が鳴る雨の日にはコイルが避雷針になつてしまふので、雷が鳴る日は絶対外には出ないのでそうだ。

あと、成長する際に磁力が強まり、仲間と連結し合うことでコイルという集合体にもなるそうだ。

インテリジエンスソードの一種だろうか？つと思つたが、喋るわけでもないし、調べたところ魔力で動いているわけでもないことが分

かり、ますますわけが分からぬ生き物（？）として学院で知られることになった。

ある日、ルイズが香水を拾つたことでギーシュの二股が発覚して、二人に振られた原因をギーシュがルイズに追及してきた際に、今まで何もしなかつたコイルが動いた。

ルイズに難癖付けてくるギーシュをジトツと見ると、ルイズとの間に入り、その小さな体からは想像も出来ない速度で体当たりしてギーシュをノックアウトさせた。

友人達に介抱されて気がついたギーシュが怒つてコイルに喧嘩を売つたら、今度はどこからともなく、無数のコイル達が窓を割つて入ってきて、合体技のような電撃の嵐を浴びせて焦がした。

いつの間にこんなに仲間を連れて来たんだ!?と聞いても、コイルは何食わぬ顔をして浮いているだけだった。

フヨフヨと浮いているコイルは、ますます数を増やし、学院中に生息地を作つてしまつた。最初こそ、学院側は対策を立てようとしたが、ルイズのコイルに命令すれば別に何もしてこないと分かると、ほぼ放置となつた。というか放置せざるを得なかつたのだ。果敢にもギトーがコイル達を駆除しようとしたものの、呆氣なく返り討ちに遭つていたのだから。

授業を邪魔するわけでもなく、その辺を浮遊しているだけなので、そのうち生徒達も慣れて放つておくよになつた。

そしてある日、アンリエッタからアルビオンへの密命を受けたルイズは、婚約者のワルドと共にアルビオンへ向かつた。もちろんルイズの使い魔であるコイルもついてくる。

国の終わりを前にして、ワルドから結婚しないかと言われたルイズは、相談できる相手もいないため、流されるまま教会で結婚式を挙げようとしたが、突然入つて来た数少ないウエルズの部下の兵が大慌てで……。

謎の金属生物の群れが、そこまで迫つて來たレコン・キスタ軍を全滅させたという報告をした。

途端にワルドは、顔色を悪くしたため、ルイズが心配すると、い

つの間にかワルドの真横にいたコイルが、ジトゥつとワルドを睨んでいた。

ワルドは、瞬時にコイルが自身の正体も何もかもを知った上で、何もしてないように見せかけて裏で動いていたことに気づき、憤怒の表情を浮かべてコイルに風魔法を纏わせた杖を振るった。

ガキンッと凄まじく硬いコイルの体に弾かれ、教会のあちこちに潜んでいたコイルやレアコイル達が現れ、ワルドを包囲した。

ワルドの豹変に驚いているルイズを、他のコイル達がウエールズも一緒に磁石の手で摘まんで安全な位置へ運んだ。

ワルドは、愚かしくも風魔法の最大級の技であるライトニング・クラウドを放つてしまつた。電気と鋼を司るコイルに向かつて……。

放たれた凄まじい電撃は、コイルの眼前で吸い込まれるように周囲に散りながらコイルは、他の仲間のコイルと連結してレアコイルとなつた。

そしてライトニング・クラウドを吸收して上乗させた最大の必殺技である、でんじほうをワルドに向かつて放つた。

あまりの凄まじい電撃の攻撃によつて爆発する教会。ルイズとウエールズとその部下の兵は、コイルとレアコイル達に守られて難を逃れたのだつた。

生き残つたウエールズは、コイル達にやられて降伏してきたレコン・キスタ軍の、敵対していたアルビオンの貴族達をまとめ、国民を守るためにトリステインに併合させる形を取つた。

余談であるが、コルベールが作つたU字型の磁石が、アルビオンやトリステインで、玩具として大流行することになるのであつた。

磁石という言葉が浸透すると、今度は、レコン・キスタ軍がコイル達に倒される劇が公開され、『磁石の乱』などという題名で流行つたのだつた。

## 『ルイズが召喚したのが、ニドラン（♂&♀）だつたら ？』

ルイズが目を覚ますと、保健室の天井がまず見えた。

額がズキズキする。指先が痺れている。あと体全体が熱っぽい。ボーッとしていると、コルベールが保健室に入つて来て、声をかけた。だいじょうぶかと。

ルイズは、ボーッとしながら何があつたのか聞こうとしたとき、高い声の鳴き声が聞こえた。声は、ベッドの下から聞こえたらしい。ハテナつと思っていると、ベッドの下から、小型の薄紫色の動物と、薄青色の動物が出てきた。

熱に浮かされた状態でよく見ると、その二匹の動物には、同じルーンが刻まれていた。

コルベールが君の使い魔だよ、と言つた。

それを聞いてルイズは思い出す。

春の使い魔召喚の儀式で、何度も目の爆発の跡に、二匹のこの動物たちが倒れていて、生きていることを確認してからコントラクトサーヴァントの儀式を行つたのだ。

ルーンが刻まれる痛みと熱さによつて飛び起きた薄青色の方がちようどルイズの額に頭部の短い角を刺してきたのだ。そこで意識がなくなつた。

コルベールは、この二匹の動物の角には猛毒があり、その毒にやられたのだと説明してくれた。ギリッギリで解毒が間に合つたものの、あとちょっと遅かつたら死んでたそうだ。それを聞いてルイズは、ゾツとした。今、体に起こっている不調は、毒の後遺症なのだろう。一見40センチから、50センチ程度の小型で、目つきがちよつとだけ鋭く感じるが、そこまで強力な毒の持ち主だとは思えなかつた。しかしよく見れば、身体のあちこちにトゲがあるじゃないか。おそらくすべて毒針なんだろう。

ルイズが保健室から出られたのは、翌日だつた。

ルイズが歩けば、二匹の毒の動物たちはついてくる。

毒に気をつけなければ…とルイズが、思っていると…、ニドランだ！というビックリした声が聞こえた。

シエスタというメイドが、持っていた洗濯籠を落として壁の端に逃げているので捕まえて話を聞くと、この二匹の毒の動物たちの名は、ニドラン。

タルブ村の近隣の森に住んでおり、総称してニドランというらしい。額に大きな角と、耳の大きな薄紫色の方がオスで。角が小さくて薄青色の方がメスなのだそうだ。

オスは、大きな耳で敵の接近を感じると素早く攻撃を仕掛けてくるらしく、一方でメスの方は比較的大人しい方であるものの、毒性はオスより強いらしい。

また、二段階成長する特性もあるらしく、成長すると、オスがニドリーノ、メスがニドリーナになる。だが三段階目になるための条件には、何か特殊な石が必要らしいが、シエスタは、その石のことは知らないと言った。

コルベールが、ニドラン達の毒の強さに注意するよう呼びかけたらしく、ニドラン達を連れて歩くルイズを見ると、皆、道を開けるようになつた。

ルイズは、不満だつた。使い魔が立派で強くて美しいから皆が道を開けるなら良いが、毒が怖いからという理由だけで道を開けられるのはどうも気に入らなかつたのだ。

ニドラン達は、すっかり番として仲良くなつてゐるのか、毛繕いし合つてゐる姿がよく見られた。そんな仲睦まじい姿も、色恋沙汰に縁の無いルイズには、ため息ものだつた。

ある日、ルイズが食堂で香水を拾つたことで、ギーシュの二股が発覚し、二人の娘に振られた原因をギーシュはルイズに追及して決闘沙汰になつた。

完全にアウエイな状況の中、ニドラン達が乱入し、フーッ！キーッ！とルイズを守るように勇敢にもギーシュを威嚇する。

ギーシュは、毒さえ喰らわなければ大丈夫だと高をくくつて、ワ

ルキユーレを鍊成して向かわせた。

ワルキユーレの足がニドランのオスを蹴り上げようとしたとき、その小柄な体からは想像も出来ないスピードと跳躍と、そして脚力で二度蹴りという技を繰り出したニドランのオス。たちまちワルキユーレは、破壊された。

思わず攻撃力に焦ったギーシュは、自分に向かつてくるニドラン達を倒すべく複数のワルキユーレを鍊成するが、今度は足下をちょこまかとすり抜けられ、あつという間に二匹のニドランに飛びかかられた。二匹に押し倒され、毒の角を突きつけられて、ギーシュは、泣きわめきながら降参だと叫んだ。

えつぐえぐと情けなく泣くギーシュの上で、二匹のニドランは、ピヨンピヨン跳ねて勝利を喜んでいた。合計、16キロの体重が飛びはねるものだから、下敷きにされているギーシュはたまつたものじゃなく、あつという間にギーシュは泡を吹いて気絶した。

その後日、朝起きると、ルイズの部屋が狭かつた。

いや、部屋は変わらないのだが、問題は床。そこには、大きくなつたニドラン達…、否、ニドリーノと、ニドリーナがいた。

さすがに部屋ではもう飼育できないと判断し、大型使い魔を飼育するための舎に移した。すると、後日、シエスタが卵がある！つと知らせに来た。

行つてみると確かに、卵があつた。どうやらニドリーナが産んだらしい。二個も。

卵が産まれたことで、ただでさえ気性が荒い二匹はますます気性を荒くし、同じ舎にいる使い魔達を隅に追いやり、ルイズ以外の近く人間全てを威嚇し、下手すると攻撃までしてきた。

そんな最中、土くれのフーケによる盗難事件が起こつた。未遂で。

つというのも、何をしたのかは分からぬが、ニドリーノの逆鱗に触れてしまつたらしく、オスマンの秘書・ロングビルとして潜入していたフーケが軽く毒を打ち込まれて倒れたのを踏まれている現場が見つかつたのだ。いかにも不審者な格好で、そして彼女の手に宝物

庫の宝がなければ、ニドリーノは咎めを受けていただろう。運が良かった。

その数日後、卵が孵り、ニドランのオスとメスが産まれた。卵が無事に孵つて安心したのか、二匹の凶暴性は少し治まった。

だが、さらに後日、二匹がニドラン系の最終形態である、ニドキングと、ニドクインに突然成長した。

二匹が住まわされている舎に、フーケが盗もうとした宝物庫の宝である石のかけらが落ちているのが見つかり、月の石という石がニドラン達の最後の進化に必要な物であることが分かった。

毒に加えて、肉体的にも圧倒的に強くなつた二匹に、逆らえる者はいなかつた。主人であるルイズを除いては。

そのキングとクインの夫婦は、さらに卵を産みまくり、大所帯になつてしまつたため、ルイズは、ニドラン達をヴァリエール領の森に住まわせることにしたのだつた。

強力な毒を持つ彼らは、その後起ころるレコン・キスタ軍との戦争において、トリステイン軍に加勢した。

先陣を切つて戦う彼らを従えるのは、まさに王（キング）と、女王（クイーン）のごとく君臨する、ルイズのニドキングとニドクインだつた。

## 『ルイズが召喚したのが、オニスズメだつたら?』

寮の部屋のベッドで寝ているルイズの上に、その鳥がピヨンピヨンと飛び乗った。

大きさは、30センチぐらい。重さ、約2キロの鳥。

くちばしは短めで、羽も大きくはなく、目つきは悪い。その身には、使い魔のルーンが刻まれていた。

チユンチユン！つとルイズの上で飛びはね、ルイズを起こす。重い／＼とルイズが寝ぼけた声で言い、布団を払って鳥ごと落とした。

大きくない羽でバタバタと羽ばたきながら床に降りた鳥は、再びベッドの上に飛び乗つて今度は直接ルイズの上に乗つて、短いくちばしで起きないルイズの頭を軽くつついた。

痛い！つとルイズが、叫びマクラの端に置いていたムチを掴んで鳥に向かつて振るつたが、鳥は飛び退いて避けた。

このバカ鳥！つと怒つたルイズが床に飛び降りた鳥を睨む。しかし、鳥は、チユンチユン！と鳴いて、お前が起きないからだと言わんばかりだ。

ルイズがこの珍しい鳥を召喚したのは、3日前のことだ。

春の使い魔召喚の儀式で、何度もかの爆発の跡に現れたのがこの鳥であった。

30センチもある大きさながら、鋭い目つきが表わすように凶暴らしく、コントラクトサーヴァントの儀式までに散々つつかれたものだ。網で捕まえ、顔をつつかれまくつた際に唇にくちばしが当たつて儀式が成功したというなんとも情けない流れであつた。

大型の鳥や、幻獣を召喚した者は、その背中に乗るなどして遊んでいる姿が見られ、ルイズは、自分の小さな鳥（※30センチ）を見比べてため息を吐くのであつた。

ゼロのルイズが召喚した、鶏サイズの変な鳥。というのが、ルイズが召喚した鳥の通り名になつていた。

そんなある日、オニスズメ！つというビックリしている声が聞こ

えた。

シェスタというメイドに聞くと、この鳥の名は、オニスズメ。タルブ村の近隣の森などで見かけられる珍しい鳥だとか。

成長すると、オニドリルという大形の鳥になるそうだが、とても凶暴で危険なのだそうだ。

それを聞いたルイズは、せめて成長すれば……つと思い、オニスズメとオニドリルについて調べることにした。だがタルブ近隣にしか住んでないため、図鑑にすら載っていない。頼りのシェスタも、詳しい話は知らないそうだ。

そんなある日、オニスズメが香水を拾ってきた。その香水は、モンモランシーが特別に調合する香水だったので、彼女が落としたのかと思つていたら、そこへギーシュが怒った顔で走ってきて、ルイズにたいして泥棒！ つと難癖付けてきた。

ルイズは、自分の使い魔が拾つてきただけだと弁解しても聞かず、あつという間に決闘沙汰に。

ギーシュが鍊金したワルキユーレに、オニスズメが果敢にも挑んだが、青銅で出来たワルキユーレにくちばしが弾かれる。忽ちオニスズメは捕まり、いたぶられた。

ルイズは、やめて！ つと制止したが、完全にアウェイな状況、ギーシュは、ルイズに泥棒してすみませんでしたと土下座したら助けると言つてきた。ルイズは、泥棒の冤罪を受けた状態で謝るわけにはいかないとプライドが働き、応じなかつた。

ボロボロのオニスズメが、逆さに足を掴まれた状態で、チュン：つと鳴き、最後の力を振り絞つて体を高速で回転させ、回転したくちばしでワルキユーレの頭を突いた。その攻撃でワルキユーレの頭がもげた。

すると、オニスズメが光り輝き、ワルキユーレの手から逃れ、1.2メートル以上はある大形の鳥…、否、オニドリルに進化した。

大きな鳴き声を上げ、大きな翼を広げたオニドリルは、瞬く間に天空へと飛び、高速回転しながらギーシュに向かつて落下してきた。

ぼう然としていたギーシュを、モンモランシーが突き飛ばし、ギ

リギリでオニドリルの必殺技・ドリルくちばしが命中せず地面を大きく抉つただけで終わつた。

その後、ルイズのオニスズメが落ちてた香水を咥えてピヨンピヨンと移動していたという目撃証言が出て、ギーシュは、自分の早とちりだったことを理解して、ルイズに謝りまくつた。

そんなギーシュの額を、オニドリルが、ゴスツと長いくちばしで軽く（？）ついた。

額を抑えて転がるギーシュを見おろし、オニドリルは、フンッ！と鼻を鳴らしたのだつた。

その後もオニドリル（オニスズメ）の怒りが治まらないのか、ギーシュを見つけるたびに頭をつつくのであつた。もちろん軽くである。それでも十分痛い。

ルイズもルイズで、冤罪をかけられた恨みから止めなかつた。

## 『ルイズが召喚したのが、イシツブテだつたら?』

ふああ…つとあくびをしながら、朝起きたルイズがベッドから降りて歩こうとしたとき、硬い何かにつまずいた。

寝起きでトロくなっていたため、思いつきり顔面からこけた。

ルイズがつまずいたソレは、40センチくらいある岩の塊だ。

否、ソレは、生き物だつた。昨日ルイズが召喚した使い魔だ。ルイズがこけた後、岩の塊だつた体から二本の腕を出して、ルイズを介抱した。その体は、まさに岩の塊と言つていい作りで、胴体であり、顔がある丸めの体には足はない。たくましい腕と手で移動する。

その日から朝はルイズがこけない位置で寝るようになつた。見かけのゴツさに似合わず頭は良いらしい。

ルイズが歩けば、後ろをついてくる。コントラクトサーヴァントの儀式の成功による、ルーンの従属性が十分働いているらしい。

召喚した当初は、ただの岩の塊が召喚されたと思つてガツカリしあし、他の生徒達には馬鹿にされるしで散々だつたが、コントラクトサーヴァントの儀式を行つた際にその正体を現わし、ルイズだけじゃなく他の者達を驚かせた。

従順なのはいいが、食堂の中には使い魔は入っちゃいけないので外で待たせていた。そして食事が終わつてから外に出ると、石の生き物を持ち上げているメイドがいた。

何してるので？ つと聞くと、メイドは慌てた様子で、つい懐かしくて！ つと言つた。

懐かしい？ つまり知つてゐるということだ。ルイズの使い魔だと知らずに申し訳ありませんと謝り倒してくるので、許し、その代わり知つてることを教えてくれと聞いてみると、この石の生き物の名は、イシツブテ。

シエスタというこのメイドの故郷では珍しくないそこら中にある生き物で、石に擬態しているそつだが、丸くて持ちやすいため、故郷のタルブ村ではイシツブテ合戦なる投げ合いの祭りをしているそ

うだ。

そんなことしていいのか？っと聞くと、イシツブテは、その頑丈さを売りにしており、仲間と互いにぶつかり合って頑丈さを確かめ合うという習性もあるそうなので、そんなことされても受け入れてくれているそうだ。

ただ、タルブの外では全然いないので、当初はビックリしたとシエスタは話した。

他に詳しく聞いてみると、イシツブテは、成長する特性があり、ゴローン、そしてゴローニャという形態になるそうだ。だがゴローンは希に見られても、ゴローニャは中々いないという。

あと、長生きしているイシツブテほど、角が取れて丸くなるそうなので、ルイズのイシツブテは、まだまだ若いつとシエスタは見ていた。

ずいぶんと詳しいのねつと聞くと、亡くなつた曾祖父の知恵だと言つた。

そういうえば、曾祖父がタルブに住んでからイシツブテがタルブ近隣に住み着き始めたと、思い出したように言つた。

彼女の曾祖父がどこからか連れてきたという説もあるっぽいが、ルイズは別に問題視しなかつた。

その後、イシツブテに少々詳しいため、好きな木の実をあげるなどしてシエスタにもイシツブテは、懐き、シエスタがギーシュに難癖付けられていた際には助けに入り、決闘沙汰に。

そしてギーシュの自慢のワルキユーレをその石で出来た腕で掴んでギーシュに向かつて投げつけて撃退していた。

土くれのフーケの盗難事件では、巨大な土のゴーレムを、その小ささからは想像もできない腕力で地面をたたき割り、地割れを作つて落としたりして大活躍。

アルビオンでは、ウェールズを殺して本性を現わしたワルドに怒り、ゴローンに進化した。その体質ゆえに、風の系統魔法最強のライトニング・クラウドが効かず、一瞬焦つたワルドを捕まえ、たこ殴りにして撃破。それでは怒りが治まらないのか、アルビオンにも大量生

息していたイシツブテや、ゴローン達に呼びかけ、レコン・キスタ軍の大軍相手に戦い、なんと勝利してしまつたりした。

アルビオンでの活躍は、すぐに知られ、一旦ルイズの手を離れてトリステインを盛り上げるために祭り上げられるなどしてあちこち引っ張りだこになつたりした。

その後、ルイズの下へ帰ってきたゴローンは、ゴローニャに進化したのだつた。

硬くて、ゴツくて、ちつとも美しくなんかない。けれど、誰よりも頼りになる強い使い魔に、ルイズは満足していた。

## 『ルイズが召喚したのが、キヤタピーだつたら?』

でつかい、緑の芋虫。

それがルイズや、コルベールや他の生徒達の印象だつた。

ルイズがコントラクトサーヴァントの儀式を行おうとすると、赤色の角のような物を顔の正面から出し、すぐ嫌なにおいを出してきたが、それ以外は何も出来ないみたいだつた。

なにかの幼虫なのはたしかなようだが、こんなでつかい芋虫は聞いたことも見たこともない。

餌に葉っぱを持つてくると、ムシャムシャと一生懸命食べる。食べ足りないのか、部屋の窓から外の草木を食べたりと食欲がとてつもなく旺盛だ。

だが、他の生徒の大型使い魔に食べられそうになつたことが数回あつた。毎回毎回、ギリツギリで助けられたが、いつか食べられちゃうんじやないかと心配だつた。

せめて成長すればなんとかなるのでは? つと思い調べても、この芋虫の情報は無かつた。

ところが、ある日。キヤタピーだ! つという、驚いた声をあげたメイドがいた。

シエスタというメイドが、知つていた。彼女の故郷の近隣の森で見られる虫の幼虫だそうだが、攻撃手段が少ないとためよく大型の鳥などに食べられてしまうそうだ。

成長するとサナギから、バタフリーリーというチョウウチョになるそうだ。

敵に狙われやすいせいか、早く成長するためによく食べるそうだ。

狙われやすいし、このままでは弱いままなので早く成長させた方が良いということで、シエスタも、食堂のキッチンから野菜屑を貰つてくるなどして協力し、キヤタピーをルイズと育てる事になつた。

そしてその甲斐あつてキヤタピーは、脱皮した後、糸を吐いてサナギになつた。

あとは、羽化するのを待つだけとなつた時、サナギを残して授業に出た後、部屋に帰るとサナギが消えていた。跡形も無く。

大慌てで探し回り、見かねたキュルケが魔法で扉の鍵を魔法で調べたところ、鍵のロックを魔法で解除した痕跡があつたことが分かり、学校内の何者かがサナギを盗んだことが分かつた。

その後、タバサが大型使い魔の舎で、サナギを食べさせようとしていた上級生を見つけ阻止してくれていた。

ルイズは、怒るよりも先に取り返したサナギを抱きしめて大泣きした。もちろん、サナギを盗んだ上級生はしつかりと罰を受けた。

それからルイズは、赤ん坊みたいにサナギを背負つて行動するようになつた。事情が事情なので、周りは理解を示した。

ある日、ルイズからサナギを奪つたことで停学処分を受けた上級生が逆恨みで喧嘩を売つてきた。

その時、サナギが割れ、その中から大きなチョウチョが現れた。甲高い鳴き声を上げながら、大きな羽を羽ばたかせ、鱗粉のような粉を上級生に向かつて撒き散らす。途端、上級生は泡を吹いて倒れた。

麻痺毒で倒れた上級生は搬送され、バタフリーやルイズと一緒にシエスタにお礼を言うように周りをパタパタと舞つた。

その後、バタフリーハウスにまで成長させるお手伝いをしてくれたお礼もかねて、シエスタの故郷へバタフリーやルイズと共に行つた際に、バタフリーやルイズは、近隣の森で番を見つけてきて、卵を産んだ。

たくさん産まれたキヤタピー達にも同じルーンが刻まれていてルイズに懐き、ルイズは、シエスタと共に一生懸命育て、バタフリーやルイズの群れができた。

バタフリーやルイズは、毒のある鱗粉だけじゃなく、念力という技も持つていて、そのためそこいらのメイジじやまづ倒せるような存在ではなかつた。そのためルイズに意地悪をして来た者達はいなくなつた。たくさんの中の子孫達を残し、先代のバタフリーは、やがて寿命を迎えた。ルイズは、泣いた、たくさん泣いた。

その後は、子孫のバタフリーハウスがルイズを守り、使い魔として仕

えた。

バタフリーグループは、さらに数を増やし、レコン・キスタとの戦争の際に、先陣を切つてトリステインを守った。

ルイズ亡き後も、バタフリー達は、トリステインを守り続けたと言われる。

その後、バタフリーを模した紋章がトリステインの国旗に刻まれるのは、そう遠くない未来の話である。

## 『ルイズが召喚したのが、カラカラだつたら?』

その生き物は、頭蓋骨を被っていた。

コントラクトサーヴァントの儀式で口づけをしないといけなかつたのだが、骨が邪魔で骨を外そうとしたら、ものすごい抵抗された。

暴れた拍子に骨の上から口が当たり、それでルーンが刻まれた。これでも使い魔の契約は成立するらしい。なんか雑。

この生き物が持っている骨で散々殴られたので、ルーンが刻まれる痛みに悶え泣いているその生き物に、ちよつとぞまあつと思つたりした。

ルーンが刻まれ終わつても、その生き物はずつと泣いていた。そこまで来るときすがに不憫になつた。

その生き物は頑なに頭に被つている骨を外そうとしない。こちらの言葉は理解しているようだが、外してみてと言つても頭を抑えて首を振るだけだつた。

ある日、カラカラだあ！ つと、驚いている声が聞こえた。

声を上げたのは、シエスタというメイドで、この生き物のことを知つてているようだつた。

知つていることを教えて欲しいと頼むと、この生き物の名は、カラカラ。

頭に被つているのは、死に別れた母親の骨で、成長するとガラガラという形態になるそうだが、その骨らしい。

ああ、なるほどと、ルイズは納得した。頑なに頭に被つている骨を外したくないのは、母親の形見だつたからかと。

常に手にしてる骨に反応してか、左手のルーンが常に光つて見えるが、母親を想つて泣くことを抜けば頼もしい使い魔であつた。

というのも、後日シエスタが香水を拾つたせいで、二股がバレてしまつたギーシュがシエスタに難癖付けていたのをルイズが仲裁したら、決闘沙汰になり、カラカラが前に出てその小柄(※40センチ)な体からは想像もできない速度とパワーで、手にしている骨でワル

キューレを破壊し、ギーシュのおスネちゃんをゴーンと殴つて悶絶させて倒したのだつた。幸い骨折はしなかつた。加減はしたらしい。しかし、下手に骨折するよりトラウマレベルの痛みは味わつただろう。

その後、ルイズは、夢を見た。狩人と思しき人間達にカラカラの母親が殺される夢を。目を覚ませば、カラカラが泣いていた。思わず抱きしめると、安心したようにルイズに身を委ねてくれる。ルイズは、よしよしと撫でてやりながら、一緒に寝るようになつた。気分はもはや母親だつた。

土くれのフーケの盜難事件では、オスマンの秘書をフーケと見破り、骨を投げつけて倒した。

アルビオンでルイズの婚約者のワルドが本性を現わし、ウエールズを殺し、ルイズをも殺そうとした。

凄まじい風の魔法に煽られ、その小さな体を吹き飛ばされながらもカラカラは立ち向かい続け、ワルドが放つたライトニング・クラウドを掲げた骨を避雷針にして受け止めると……、カラカラの体が輝いた。

輝きが消えたとき、そこには、ルイズが夢に見たカラカラの母親とそつくりの姿……、ガラガラがいた。

ワルドは、風の偏在を使い分身を作る。ガラガラは、自らに刻まれたルーン：ガンダールヴで強化された身体能力によつて、すべての偏在の攻撃に対応し、本体を見破つて、またスネを狙つて殴つた。思わぬ攻撃によつて偏在が消え、膝を突きかけたワルドの横つ面を、骨で思いつきり殴打して教会の端っこに吹つ飛ばした。

トドメだ！つとばかりに飛びかかったガラガラを、ワルドが最後の力を振り絞つて風の魔法で吹つ飛ばすと、ワルドは逃げていつた。すぐそこまで迫つたレコン・キスタ軍のことを言い残して。

駆けつけたキルケ達によつてアルビオンから脱出したルイズとガラガラ。ルイズは婚約者に裏切られ、そして目の前でウエールズを殺されたショックから泣いていた。

そんなルイズを、ガラガラが抱きしめて頭を撫でてきた。

母親のつもり？

とルイズは、苦笑した。

## 『ルイズが召喚したのが、メタモンだつたら?』

レコン・キスタとの戦争。アルビオンでの本土決戦で、トリステイン軍、そしてゲルマニア軍の連合軍は敗走した。

そして敗走して撤退する軍は、ルイズにある命令を下す。

そしてルイズは、逃げていく者達とは反対の方向に向かい、馬に乘ろうとした時だった。

背後から掴まれ、口に何かを入れられた。

急激な眠気に倒れ込みながら、後ろを見たとき、そこには、ルイズそつくりに変身した、自分の使い魔が優しく微笑んでいた……。

その使い魔を召喚したのは、春風が心地よい学院近隣の草原でのことだつた。

何度目かの爆発、そして爆発の跡地に現れたのは、薄紫色の軟体生物だつた。だが、小さな目と、微笑んでいるような口がある。顔だけならちよつと間抜けっぽい。

ルイズがコントラクトサーヴァントの儀式を行おうとすると、ウニユーンとその軟体生物が姿を変え、ルイズそつくりの姿に変わつた。細部までそつくりで杖まで手にしていた。

それに驚いていると、ルイズに変身した軟体生物が擬態で作つた杖を向けてきて、エクスプロージョン!と聞いたことも無い呪文を唱え、ルイズにとつて忌まわしい爆発の魔法を使つてきた。

制御できていないルイズと違い、精度は明らかに上で、その場が騒然となつた。

だが長くは続かなかつた。やがてエクスプロージョン!と唱えても、杖の先からポツ…と小さな煙が出るだけで、どうやら力尽きたらしい。

コルベールが、いまだ!つと叫び、尻餅をついて頭を抱えていたルイズは、ハツとしてコントラクトサーヴァントの呪文を素早く唱え、慌てている偽のルイズを掴んでキスをした。ローンが刻まれる痛みによつて、ルイズの形が崩れ、軟体生物に戻つていつた。

他人に変身する魔法は存在するが、人そつくりに変身できる生物

は発見されていないので、コルベールは、世紀の発見か、未開拓の土地の生物かもしないと言つた。

何の生き物なのか分からぬまま、使い魔として連れて歩いていると、メタモンだ！つという驚いた声が聞こえた。

シエスターというメイドがどうやら知っていたらしく、話を聞いた。

この生き物の名は、メタモン。

どんな物にでも変身できる不思議な生き物で、彼女の曾祖父がどこからか連れてきたと言われており、曾祖父亡き後は、近隣の森で独自繁殖をしてたまに訪れる人を驚かせるそうだ。

変身したら、その人物の魔法まで使うのかと聞くと、タルブ村には貴族の人はいないのでそんな話は聞いたことがないと言つた。

メタモンは、見かけによらず賢かつた。いや、変身能力を持つからこそ賢いのか…、朝になればルイズに変身して着替えを手伝い、ルイズの姿で給仕をしたりと、ルイズに尽くしてくれた。なぜルイズの姿なのかは分からぬが、近場にいる人間じやないといけないのかもしない。

ルイズに、ルイズの姿で接してくるのは、ルイズ的には微妙だったが、すぐ慣れた。

ルイズに変身したメタモンは、いつだつて優しく微笑む。話すことはできないらしいが、日頃溜まつていたストレスから愚痴を言うルイズの言葉を時折頷いたりしながら、聞いてくれる。ルイズの好物のクックベリーパイと一緒に食べるときも、相変わらずルイズの姿だったが、メタモンは、ルイズと違つて子供みたいに喜んで食べている姿が微笑ましく見えて、ルイズにとつては、徐々に大切な存在になつていつた。

そんな中始まつた、戦争。

虚無の力に目覚めたルイズは、アンリエッタの命を受けてメタモンと共に戦場に向かつた。

そして連合軍の敗走。

そして指揮官達から命じられたのは……、味方が撤退するまで魔

法を使えという内容。つまり、ルイズに死ねと言っているのだ。

ルイズに変身したメタモンが、戦地にたつた一人で向かおうとするルイズを眠り薬で昏倒させて自分が馬に乗るのを、ルイズは、ダメ…！っと手を伸ばして止めようとするが、メタモンは聞かず、馬を走らせていく。ルイズは、意識が遠のく中、それを見送ることしかできなかつた。

次にルイズが目を覚ましたのは、船の船室だつた。

メタモンは、どこ!? と探し回つたが、どこにもいなかつた。

共に戦地に赴いた級友達から、メタモンが残した手紙を渡され、そこには、汚い字で……『さよなら。ありがとう。大好きなルイズ』つと書かれていて、ルイズは、大声を上げて泣いた。

戦争が終わつた後、ルイズは、引きこもり気味になり、シエスタが、貴族に変身できるほどのメタモンならきつと敵兵にも化けて生き延びている可能性が高いと言い、キュルケもタバサも協力してくれ、メタモンを探すためにアルビオンの地に再び足を踏み込んだ。

そしてアルビオンの森の中。

子供達の笑い声が聞こえ、その声を辿つていくと、そこには、子供達と遊んでいるメタモンがいた。

メタモンが、ルイズの存在に気づくと、ユニユーンと変身し、ルイズの姿になつた。

ルイズは、涙を浮かべ、ルイズの姿になつたメタモンに抱きついて大泣きした。

メタモンは、変わらず優しく微笑みを浮かべ、ヨシヨシとルイズの頭を撫でたのだつた。

## 『ルイズが召喚したのが、口コンだつたら？』

ねえ、その子、私にちようだい！っと、キュルケが今日も言う。

ルイズは、狐のような、けれどたくさん尻尾がある生き物を抱きしめて、首を振った。

その生き物は、ルイズの使い魔だ。春の使い魔召喚の儀式で召喚した生き物で、炎操ることができる。

最初は、可愛い！って思つただけで油断していく、思いつきり火を浴びせられてしまった。

狐によく似ているが、六つに分かれた巻き毛の尻尾、赤茶色の毛並み。抱きしめると、とても温かい。

召喚した後日、口コンだあ！っと言つて驚いてるメイドがいた。知つているのかと話を聞くと、口コンという生き物なのだそうだ。

メイド・シエスタの故郷タルブの近隣の森に住む珍しい狐のような生き物だが、炎操るもの、気性は臆病で敵が現れると傷ついたフリをするなど好戦的ではないらしい。

亡き曾祖父が飼っていた口コンは、ある石を使うことで、キュウコンという美しい狐になつたそうだが、その石がなんなのかは分からないと答えられた。

曾祖父がキュウコンの美しさに目がくらんだ貴族に狙われるのを危惧して、石のことを秘密にしたそうだ。

それだけ言うのだから相当な美しさなのだろう。いや、今でも十分可愛いからルイズ的には別に良いのだが。

キュルケが口コンを欲しいと言い出したのは、食堂での一件で起こつた決闘沙汰がきっかけだつた。

アウエイな状況で、ルイズの前に駆け出してきた口コンが果敢にも前に出て、大の字の炎を放つて、ワルキユーレとギーシュをもろとも焼いて倒したのだ。

立派なサラマンダーだけに飽き足らず、炎操る口コンに魅せられたキルケが、欲しい欲しい！つと言つて来たのだ。

口コンは、嫌がつてルイズの後ろに隠れるし、こっちおいでうつと猫なで声で誘つてくるキュルケに、口から火を吹いて威嚇する始末だ。

うつかり目を離した隙にキュルケに抱きしめられていたりしたが、キューンキューン！とルイズに助けを求めてきたため、すぐに奪い返した。その時のキュルケの、ガツカリした顔と言つたら……。

ある日、キュルケが火の形を石を見せてきた。城下町の露店で売つていたと言つていたが、あなた（口コン）にあげると言つて差し出してきた。そんなので口コンの気を引く氣かと怒つたが、石を見た口コンは、何を思ったのか石に自ら触れに行つた。

すると口コンが光り輝き、そして一回り以上大きくなり、そこには金色に近い黄色の毛並みが美しい狐の姿…、キュウコンへと姿を変えた口コンがいた。

どうやらシエスタが言つっていたキュウコンへの進化条件の石とは、あの火の形をした石だつたらしい。

突然のことにポツカーンとなつた二人だが、やがてキュルケがウルウルと感動してキュウコンに近づこうとすると、キュウコンは尻尾の一本でペシッ！とキュルケの手を叩き、ルイズの方へ行つた。

その日から、キュルケは、キュウコンになつたのは私のおかげなんだから私にも所有權あるわよね！？と言い出す始末で、ルイズと毎日のように喧嘩になつた。

喧嘩の原因になつてゐるキュウコンは、成長したことで余裕も出来たのか一々怯えなくなり、喧嘩している二人の横でのんびり欠伸などしているのだつた。

その後、キュウコンが主人のルイズを舐め腐つてゐることが露顕するまで、そう時間はかかるない……。

## 『ルイズが召喚したのが、コンパンだつたら?』

その生き物に、コントラクトサーヴァントの儀式を行つた直後、ルイズは、倒れた。毒で。

ずんぐりもつふりした紫色の体に、虫の触角と短い手足。目は大きく、複眼になっている。どうやら虫の一種らしいと、コルベールは分析していた。

しかもどうやら全身に毒を纏つていたらしく、それでルイズはやられて倒れたのだった。そういうえば、唇がヒリヒリ腫れている。もしかしたら全身の毛は、毛虫のように毒針の塊だったのかもしれない。一見可愛い感じの見た目で、なんて恐ろしい……。

そんなんだから、短い足でピヨンピヨンと跳ねるように移動してきて懐いてきてもルイズは、逃げた。ルイズに避けられると、その生き物はシュンツと落ち込む。その姿にルイズは、罪悪感を感じた。

ある日、コンパンだ！つという驚いた声をあげたメイドがいた。シエスタとメイドで、知つてることを教えて欲しいと頼むと話してくれた。

この生き物の名は、コンパン。

タルブ村の近隣の森に住む、珍しい虫の一種なのだそうだ。

目がとてもよく、小さな虫を食べて生活しているらしい。そして、成長すると、モルフオンという美しいが、強力な毒を持つチョウのような蛾になるそうだ。

どうあつても毒なのか……つとルイズは、がつくりと項垂れた。

そんなルイズに、シエスタが、曾祖父が飼っていたモルフオンやコンパンは、毒を与えないようにしてくれてたらしいからだいじようぶだつて励ましてくれた。

そう言われて、ルイズは、コンパンを見る。コンパンは、ジーツと大きな目でこちらを見ている。

しゃがんでから、……おいでつと声をかけると、見るからに喜んで飛びついてきた。すると、毛が硬いことが分かつた。フワフワしてるのがと思ったが、細かくて硬い毛で覆われていることが分かつた。

毒は貰わなかつた。

毒にやられないと分かれば、自分を慕ってくれるのは、素直に嬉しい。ピヨンピヨン跳ねるように移動する仕草も可愛い。

意外なのは、念力という技を使って、手を使わず物を浮かばせて動かせることだつた。その力を使い、洗濯物を率先して運んで行く。なんて賢い子なんだと、ルイズは、ますますコンパンが好きになつた。

そんなある日、土くれのフーケによる事件が発生し、学院の本塔近くに現れた巨大な土のゴーレムを、コンパンが目からビームを放つて破壊した。ところが、ビームは強力すぎて土のゴーレムを貫通して、本塔の壁を破壊してしまつた。それにより本塔内の宝物庫の宝が盗まれ、責任を感じたルイズは、使い魔の責任は主人の責任だからと、宝を取り返すと言つて杖を掲げた。

キユルケとタバサも協力してくれ、オスマンの秘書のロングビルの案内で土くれのフーケが潜伏していると思われる山小屋に來た。

山小屋の中には、確かに宝があつた。すると、コンパンがそれを頭に被り、スイッチを押した。マジックアイテムが輝き、やがて光が消える。そして、外から地響きが来て、土くれのフーケの土のゴーレムが現れた。

コンパンが振り下ろされる土のゴーレムの腕を念力で折り曲げて防ぐ。このとき、ルイズがもうゼロだと言われるのがイヤで無謀にも土のゴーレムに挑んでしまい、振り下ろされる足からコンパンがルイズを突き飛ばして踏まれる事態になつた。

ルイズが悲鳴を上げた。すると、凄まじい光が足の下にいたコンパンから放たれ、土のゴーレムの足が破壊されて、コンパンは脱出した。

すると、コンパンの体が輝きだし、脱皮した。そして、チヨウのような蛾へとなり、宙へ舞い上がつた。

再生した土のゴーレムに向かい、カツと全身を輝かせて、めざめるパワーという技マシンで覚えた技を放つて、土のゴーレムを破壊した。

ルイズ達がそれを見てぼう然としていると、ルイズが背後から口

ングビルに捕まつた。ロングビルは、自らこそが土くれのフーケだと名乗り、山小屋に残してきた宝物庫から奪つてきたコンパンが使つたマジックアイテムである技マシンを持つてこいと脅迫してきた。

宙を舞つていたモルフォンが、バサツと羽を羽ばたかせた。すると風に乗つて薄い鱗粉がフーケの顔にかかる。途端、フーケは、喉を押さえ、痙攣して倒れた。

あとで聞いたが、モルフォンの鱗粉は、薄いと麻痺、濃いと毒なのだそうだ。麻痺させられたフーケは、そのまま逮捕となつた。

なお、コンパンが使つた技マシンなるマジックアイテムは、使い捨てだつたことが判明し、使い物にならないことが分かつて、使い方を知ろうとしていたフーケは色んな意味で損をしたのだつた。

## 『ルイズが召喚したのが、ストライクだつたら？』

その使い魔は、とにかく危なかつた。

というのも、両手が鋭い大きな刃物のようになつていたからだ。背中には、虫のような羽を持つが、顔はトカゲのようなは虫類っぽく、目は鋭い。あとは腹部が虫っぽいぐらいでそれ以外の造形はかなりカッコいい。1・5メートルと大きさも十分だ。

コントラクトサーヴァントの儀式をするときも、刃の腕を振り回してきて非常に危なかつたが、タバサの協力もあつてなんとかできた。

しかし、ルーンの従属性で懷いてくれるのはいいが、刃の腕で抱きつこうとしてくるのはどうにかならないものか。危ない。非常に危ない。

だが、そんなルイズの反応すら楽しいのか、その使い魔は、笑顔で嫌がるルイズに迫る。ルイズは、逃げる。その繰り返しだつた。すると、ストライク！ つという驚いた声が聞こえた。

見ると、そこには一人のメイド。

シエスタというこのメイドに話を聞くと、この生き物の名は、ストライクというらしい。

タルブの近隣の森にたまに見られる珍しいカマキリの一種だと言つた。

体が大きいせいかあまり羽を使わないそうで、移動するときは邪魔な草木をその腕の刃で切つていてるそうだ。また、両手の刃は大振りながら器用で、獲物を捌いて食べるそうだ。ルイズは、それを聞いて、まさか自分を食べようと!? つとストライクを見ると、ストライクは察したのかブンブンと首を横に振つた。こちらの心情を理解しているので、意外と頭も良いらしい。

話を聞いたところで問題は解決せず、変わらずストライクは、嫌がるルイズに抱きつこうとしてくる。刃が怖いのでルイズは逃げる。その繰り返しだ。

男子生徒達は、ストライクの見た目がカッコいいから、羨まし

がつっていた。

意地悪をしてくる男子生徒が自分に譲れと言つてくると、ストライクが見えぬ速度で腕の刃を振るつて、相手の服だけを見るも無惨に切り裂く。机身は一切傷つけない。

目の前にいた男子生徒をいきなり全裸にされて、ルイズがキャー！つと悲鳴を上げるのも楽しいのか、ストライクは笑う。

見た目力ツコいいのに、中身は残念。ルイズのストライクにたいして、そんなレツテルが貼られるのに時間はかからなかつた。

幸いなのは、ルイズ以外の女子には危害を加えないことだけだろうか。

この変態力マキリ！つと罵つても、ストライクは、ケラケラ笑うだけだつた。そしてあるとき、とうとう、うつ：と泣きだすルイズ。さすがのストライクもやり過ぎたつと思つたのか慌てる。しかし、ルイズに触ろうにも自分の手が刃だと気づいて、ますますオロオロとした。

そして、通りがかつたキルケがルイズを慰め、ストライクに説教した。それ以降、ストライクは、ルイズに抱きつこうとはしなかつた。

なぜだか、ルイズは、それが寂しく感じた。

ストライクは、ウズウズ、チラチラとルイズを見ていたりするが、グツと我慢してゐようだつた。

なんだか、ムツとしたルイズは、ストライクに、両腕を万歳しろつと命令した。

ハテナつと思いつつ両腕を上げたストライクの胴体に、ルイズが抱きついた。

ビックリしている、ストライク。

ルイズは、これならだいじょうぶでしょ？つと頬を染めて呟いたのだつた。

外殻が硬いし、冷たいし、ちつとも抱き心地はよくなかったが、なぜかそれでも十分だと思つたルイズだつた。

それ以降、ストライクは、ルイズがストライクを見るたびに両腕

を上げるようになった。笑い顔で。声に出さずとも、抱きついてくつと言つてるみたいで、それはそれで、ムカついた。

『ルイズが召喚したのが、ニヨロモだつたら？』

ルイズは、青ざめた。

目の前に現れた、その生き物を見て、ダクツと汗をかいだ。

嫌いだから分かる。といふか嫌いだからこそその生態を知つたのだ。避けるために。

ツルツとした表面の丸みのある身体は、首はなく、けれど小さな足があり、腹の部分には渦巻き模様、そしてヒレのような尻尾がある。何の生き物か例えるなら……、オタマジャクシ。カエルの幼体。の、デカいやつだ。

ルイズは、言われども聞かずとも悟つた。これは、自分が大つ嫌いなカエルの幼体だと。

足が自然と震えるルイズに、気づいてないコルベールがコントラクトサーヴァントの儀式を促した。

ビクツとなつたルイズは、速攻でイヤです！と叫んだ。

しかしこの儀式を成功させないと留年だぞと言われ、ルイズの中で天秤が浮かんだ。

進級を取るか、大つ嫌いなカエルの幼体（？）を使い魔にするか。チラリツと、でつかいオタマジャクシ（？）を見ると、その場で動かず、ジーツと可愛い目でルイズを見つめていた。

ルイズの脳内で、凄まじ勢いで走馬灯のように様々なことが駆け巡る。

そしてルイズは……、進級を選んだのだつた。

その後、ルイズは、死んだように部屋のベッドに倒れ込み、水棲使い魔を飼育するための池に、でつかいオタマジャクシ（？）を置いておいてそのまま寝たのだつた。

それからというもの、ルイズは、一向に使い魔に会いに行かず、教師からも指摘されても黙つていた。

あんまりにも放つておいてるので、見かねたシユヴルーズが使い魔の飼育もメイジの務めですと怒り、水棲使い魔を飼育するための池に行かせた。

沢々池に来たルイズが見たのは、あの大きなオタマジャクシ(?)みたいな使い魔に餌を与えている一人のメイドだつた。

ルイズの存在に気づくと、メイドは慌てて頭を下げてきた。

話を聞くと、死にかけていたので勝手に世話をしていたのだそうだ。

世話を出来るということは、知つているということだ。このオタマジャクシ(?)みたいな生き物のことを。

この生き物の名は、ニヨロモ。

タルブ近隣の森の中の水辺でたまに見られる珍しい水棲生物だという。

二段階成長する特性があり、ニヨロゾ、ニヨロボンと形態が変わるそうだ。

やはり、カエルなのがと聞くと、はい、二本足で歩くカエルです。よつと、答えられてしまい、ルイズは、フウッと意識を飛ばした。

それからルイズは、ニヨロモの世話をメイドのシエスタに任せっきりにした。

そんなある日、シエスタがギーシュに難癖付けられていた。

そんな彼女の仲裁に入ろうとするとき、紺色の見覚えがある色が飛び出し来てシエスタの前に勇敢に立つた。

それは、ニヨロゾへと進化したルイズのニヨロモだつた。カエルと言つても、ルイズが知つてゐるカエルとはほど遠いフォルムだつた。

そして決闘沙汰になると、新たに生えた両腕でギーシュのワルキユーレを倒し、ギーシュを降参させた。

ニヨロゾは、様子を見ていたルイズではなく、祈るように手を組んでいたシエスタの方へ駆け寄つて行つた。シエスタは、わんわん泣き、ニヨロゾが慰めていた。

ルイズは、それが不満だつたが、後ろからキルケにポンツと頭を叩かれ。

あんたが、ちゃんと接しないからよ。つと言われ、がつくりしたのだつた。

この一件で、学院の平民達から称えられたニヨロゾに、コツク長のマルトーが、これが似合いそうだなつと言つて、水滴の形をした石をニヨロゾにプレゼントした。

その瞬間、ニヨロゾが光り輝き、ニヨロボンへと進化を遂げた。確かに言われば力エルだが、二本足で仁王立ちし、たくましい腕を持つ姿は、ルイズが嫌悪していた力エルとは違う。

なので、ルイズは、ニヨロボンに接近したが、ニヨロボンがそれに気づくと、シエスタの方へ行つてしまつた。それに怒つてムチを出され、ペシンッ！と手でたたき落とされた。

キーキー怒るルイズに、キュルケがやつてきて襟首を掴んで引っ張つて行き、あんたの自業自得よつと説教したのだつた。

使い魔に見放されたメイジ。つというレツテルを張られ、せつかく進級できたのに、ルイズは、肩身が狭い思いを味わうこととなつたのだつた。

## 『ルイズが召喚したのが、ズバットだつたら?』

最初は、何も召喚できないのかと思つてガツカリした。だがよく見たら爆発で空いた穴の中心に、紺色の何かがペチャリとうつ伏せになつているのが見えた。

耳と、細い二本の足らしき棒の部分を含めると、大きさは、80センチぐらいだろうか。結構大きい。

翼の膜からして、コウモリだと分かつた。

オーソドックスなのが喚べたかなつと思って、生きていることを確認してからルイズは、コントラクトサーヴァントの儀式を行つた。くたゝつとしていて動かない、目のないコウモリ(?)にキスをした瞬間、ガブリツ。

上下に生えた犬歯が思いつきルイズの顔に食い込む。

ルイズは、遅れて悲鳴を上げ引き剥がそうとすると、コウモリ(?)は、ルーンが刻まれる痛みから自ら離れた。

コルベールが駆け寄り、水の魔法が使える生徒に呼びかけた。ルイズは、顔から四箇所、血をダラ々と垂らしていた。

見たこともない種類のコウモリで、目が無いことから、やはり夜行性のようだつた。

ルイズは、困つた。というのも、餌がなんなかつたからだ。

他の生徒にもコウモリを召喚した者はいたが、そのコウモリはフルーツを食べるタイプだつた。なので試しにフルーツをあげてみたが、食べなかつた。

まさか、血を…? つという想像ができた。

机の上でぐつたりしているので、なんとかしなければと思い、抱き上げて生物に詳しい先生に教えを請いに行つた時だつた。

ズバットだ! つという驚いた声が聞こえた。そこには、メイドが一人。こちらを見てびっくりした顔をしていた。

シェスターというメイドが知つていた。

このコウモリの名は、ズバット。

タルブの近隣の森で夜になると現れる、吸血性のコウモリなのだそうだ。

やはり血か！つと青ざめ、自分の血を与えないといけないのかと思つたら、それを察したシエスタが、食堂に走り、血が滴る新鮮な牛の肉を持つてきた。

それをぐつたりしていいるズバットに近づけると、ピクッと反応したズバットが、大口を開けて肉にかぶり付いてチューチューと血をすすつた。

タルブ村の家畜がよくやられるんですよ、つと、そんな話をするシエスタ。

あつという間に牛肉は、カラカラになり、ズバットは少し元気になつたようだつた。

ホツとしたルイズがありがとうと言ふと、シエスタは、萎縮しながら、成長するともつと大変ですよ？つと言つた。

どういうこと？つと聞くと、ズバットは、成長するとゴルバットというより2倍近いほど大きな形態になるそうだが、その形態はよりも多くの血を吸うと言われているそうだ。そのせいか、ズバットが生息するタルブ村の近隣の森では、希に盗賊と思われる人間がカラカラのミイラになつてゐる死体が見つかることがあるらしい。

ルイズは、思案した。なんとかして血を手に入れられないかと。そこで畜産農家から、捌いた家畜の新鮮な血だけを持ってこれないかと依頼した。訝しまれたが、依頼は通り、皮袋に新鮮な血が詰まつた状態ですぐに送られてきた。

ズバットに見せると、一生懸命血をすすつた。

やつと元気になつたズバットは、パタパタと翼を広げて飛び回る。ルイズは、元気なつてくれてよかつたと、ホツとした。

そんなある日、食堂での一件でギーシュと決闘となつてしまつた。

アウエイな状況の中、ルイズは、必死に爆発魔法を使うが、狙いが定まらず、ギーシュのワルキユーレにボロボロにされた。

降参だと言いかけた時、ズバットが飛んできてワルキューレの首をその翼で切断した。

しかし、それが限界だつたのか夜行性のズバットは、フラフラと宙を舞う。

ギーシュがそれを見て笑い、新たにワルキューレを鍊成してフラフラしているズバットの足を掴んだ。

その時だつた。ズバットが光り輝き、巨大化した。

それは、まさに顔に翼が生えた姿。巨大な口ばかりが目立ち、そこに生えた大きな翼と、小さな足、目つきが悪い目と、小さな耳がある。

ズバットからゴルバットへと変化を遂げたのだ。ゴルバットは、巨大な翼で自分を掴んでいるワルキューレの首を弾き飛ばし、破壊した。

そして、ギロツとギーシュを睨む。ビクツとなつたギーシュが慌ててワルキューレを新たに鍊成しようとすると、ゴルバットがその巨体からは想像もできない速度で接近し、ガブリ。ギーシュに噛みついた。

血を吸つちゃダメ！ つと慌てつつ言えたルイズは、偉い。  
すぐ口を離したものの、あつという間に青ざめて倒れるギーシュは、すぐに搬送され、解毒された。

血を吸う量は増えたものの、あまり吸い過ぎると飛べなくなるらしく、それに一回吸えれば数日は平気っぽかつた。なので思つたよりも出費はかさまなかつた。

ある日、ゴルバットが窓を突き破つてどこかへ飛んで行つてしまつた。数日戻らず、やがて夜に帰つてきて卵を抱えていた。

どうやらこのゴルバット（ズバット）、メスだつたらしい。繁殖期のため、タルブまで行つて卵をもうけてきたらしい。

生まれてきたズバットには、ゴルバットと同じルーンが刻まれていた。やがてゴルバットは、タルブで見つけてきた番まで連れてきて、卵を産みまくつてズバットの群れが学院に生息することになつたのだった。

そして学院に窃盗に来た、土くれのフーケが、噛み跡だらけで、貧血でぶつ倒れているのが見つかるのであつた。

『ルイズが召喚したのが、アーボだつたら?』

ヘビ。

一言で言えば、それだけだ。

紫色の体に、尻尾の先端が黄色っぽく、数珠が繋がっているような感じの形になつてゐる。目も黄色っぽく、縦筋のような瞳部分がある。

大きさは、2メートルとかなり大きく、ルイズがコントラクトサーヴァントの儀式のために近寄ると瞬時に反応して巻き付いてきて締め上げられた。コルベールの助けもあり、なんとかコントラクトサーヴァントの儀式を終えた。しかし、肋骨が折れた。

肋骨を折られた痛みに耐えながら、ルイズは怒りから、ルーンを刻まれる痛みにのたうつヘビを睨み、持つていたムチを振り上げたが……。

ガブリ。

今度は、噛まれた。そして駆け巡る毒。ルイズは、ついに倒れた。次に目を覚ましたら、保健室だつた。

コルベールがだいじょうぶかね? つと聞いてきたので、毒の後遺症で熱に浮かされているルイズは、力無く返事をした。

ふと見ると、ベッドの端に、あのヘビが頭を乗せてこちらを見ていた。

コルベールがおめでとうと言い、コントラクトサーヴァントの儀式が無事終わつたことを告げた。

ルイズが歩けば、後ろをニヨロニヨロとついてくる。ルーンの従属性は、十分に働いているようだ。

肋骨を折られたのと、毒を貰つた恨みから、ルイズは、ヘビに今日はご飯抜き! つと命じた。

ルイズが授業に出たとき、悲鳴が聞こえた。キュルケだつた。

見ると、あのヘビがキュルケの使い魔であるサラマンダーを、頭から体の半分くらいまで飲み込んでいた。

授業は中断。大慌てで吐き出すよう命じて、吐き出された胃液ま

みれのサラマンダーがピクピクと痙攣していた。ルイズ達は知らないことだが、虎サイズのサラマンダーが抵抗できず食われかけたのは、ヘビ睨みという麻痺の技によるものだつた。

餌はちゃんとあげてよね！つとキュルケや、授業の先生にも怒られ、ルイズは、ひとまず肉食の使い魔用の餌である生き餌のネズミをあげた。そのおかげで、他の使い魔を襲うことはなくなつた。とんだ迷惑使い魔だわ：つと、ルイズは頭を抱えた。

そんな時、アーボ！つという驚いた声が聞こえたので見ると、一人のメイドがルイズの使い魔を見て洗濯籠を落としていた。

捕まえて聞くと、シエスタというメイドの故郷の近隣の森の草むらなどに生息する、毒蛇だそうだ。

成長する特性があり、アーボックという倍以上の大きなヘビになるそうだ。

アーボも噛んでくるから危険だが、アーボックはそれ以上に危険だという。

理由を聞くと、非常に執念深くて、一度狙つた獲物をどこまでも追つて来ると言われているそうだ。曾祖父時代に遡るが、それくらい昔に、タルブ村に来た遠い国から来たとある貴族がうつかりアーボックの尻尾を踏んでしまい、遠い国に帰つてからも追われ続け、最後に食べられたという話があるそうだ。

いやいや、それはさすがに言い過ぎだとルイズは冗談だと思つて笑つた。

その後、ギーシュとの決闘、土くれのフーケの盗難事件を経て、アーボは、アーボックへと進化した。

そして、アルビオンと共に密命を受けて護衛として來ていたワルドが実は裏切り者であり、ウエールズを殺し、従わなかつたルイズをも殺そうとした。

アーボックのヘビ睨みからの、噛みつきを受けて毒を受け、ワルドは命からがら逃げていつたが、アーボックは倒れているルイズを残してワルドを追つていつてしまつた。

タルブ村での上陸戦で再び相まみえることになつたワルドは、風

竜に乗っていたが、別の風竜から飛び降りてきたアーボックがワルドの後ろに飛び乗つてワルドの首に噛みつき、今度こそ息の根を止めたのだつた。

その執念深さは、タルブ村だけにとどまらず、トリステイン中に広まり、アーボックに睨まれたら絶対逃げられないという教訓が語り継がれることになる。

## 『ルイズが召喚したのが、ドガースだつたら？』

ドガース。つと、その物体は、間抜けな声で鳴いた。

宙に浮いており、体中のイボのような穴から時折色の付いたガスを吐き出している。手足はなく、体は紫色の球体で、間抜けっぽい顔があり、腹部と思われる部位には、バッテンの白模様の上にドクロっぽい形の白い模様がある。

もう…、いかにも毒ありますよって、主張しているみたいだ。

不意に、強い春風。風下には、すでに使い魔を召喚し終えた生徒達。宙に浮いている物体（？）が放出しているガスが思いつきりそつちへ流れた。

途端、生徒達と使い魔達が咳き込み、涙が止まらなくなり騒ぎになつた。

コルベールが慌てつつ、ルイズに急いでコントラクトサーヴァントの儀式をするよう言つた。

ドガースと声を漏らしているソレは、フヨフヨと浮いている。

ルイズは、急いでその物体（？）に近寄り、コントラクトサーヴァントの儀式を行つた。

あとはキスだけつとなつた時、その物体（？）がブシュウ！とガスを大量に吐いた。ルイズも涙と咳が止まらなくなつたが構わず、捕まえ、間抜けに空いている口に無理矢理口づけた。途端に、体中を駆け巡る毒。ルイズは、その場で倒れた。

次に目を覚ましたら、そこは保健室だつた。

ポワーンと色の付いたガスが漂ってきてギョツとして起き上がり、ベッドの横にあの浮遊物（？）が浮いていた。ルーンが刻まれており、コルベールがコントラクトサーヴァントの儀式が成功したことを伝えてきた。

コルベールの調べだと、もうどう調べても毒を持つ生物（？）の一種だと分かり、体内にガスをため込んでいるため風船のように浮遊していると言つた。

ルーンを刻んでからガスの効果を変えたらしく、吸い込んでも咳

き込んだり涙が止まなくなったりはしなくなつたそうだ。おそらく自分の意思でガスの性質を変えられると、コルベールは熱弁した。ルイズは、そんなコルベールに若干引いた。

その時、ドガースだ！つという驚いた声が聞こえた。見ると一人のメイドが保健室の出入り口で驚いた顔をしていた。

逃げようとするので捕まえて話を聞くと、この生き物の名は、ドガース。

タルブの近隣の森の中にひつそりとある廃墟内で、たまに現れる毒性の強い謎の生物らしい。

また、成長するとマタドガスという形態になるそうだが、こちらの方は、体内のガスをギリギリまで薄めると、超高級品の香水になるとか。

その香水名を聞いて、ルイズはびっくりした。公爵家クラスや王家でも中々手に入らない希少な香水だつたからだ。身体にも良いとかで、手に入つたら身体が弱い姉のカトレアに与えられることがあつたはずだ。まさか、元を辿れば毒ガスだつたとは……。

なぜその原材料を知つてゐるのかと思い至り、まさか：つと聞くと、シエスタは、恐縮し、タルブ村にいる自分の家族、とりわけ亡くなつた曾祖父がかつてマタドガスを飼つていたそうで、その影響か、曾祖父から受け継いだ黒髪を持つシエスタの親族のところにたまにマタドガスがやつてくるので、その時だけガスを調達できるそうだ。ただし、ガスの濃度の調整が難しそうなため、香水にまでできるのは僅かになつてしまふそうだ。毒ガスから香水になつてゐるかどうかは、身体を張つて嗅いでみてるそうだ。

その香水にそんな怖い一面があつたなんて……つと、ルイズは、香水を与えられているカトレアを心配した。

コルベールが、良薬は口に苦しつと呟いた。いや、毒ですよつとルイズはツッコんだ。

ルイズがドガースを使い魔にしたのはいいが、連れて歩いてるとメツチヤ周りから避けられた。というのも、春の使い魔召喚の儀式の時の、ガス事件だ。あの時酷い目に遭わされたのだから、避けるのも

仕方ない。だが、今は害が無いと分かるとそれはなくなつた。

間抜けな顔と鳴き声をだすが、見かけによらず賢かつたドガースは、ある日、香水の瓶を拾つた。口にくわえて持ち主を探してフヨフヨしていると、ギーシュがドロボー！ つと難癖付けてきたため、決闘沙汰に。しかし、毒ガスで一撃でノックアウトされていた。その後、倒れているギーシュにドガースはすぐに香水の瓶を返し、誤解だつたことが分かつてギーシュから謝られていた。

土くれのフーケの事件では、土くれのフーケのみに効くよう調整したガスでロングビルとして潜入していたフーケをノックアウトさせる武勇を見せた。

それらの経験を積んだおかげか、ドガースは、マタドガスに進化した。

ルイズは、公爵家お抱えの香水師にマタドガスのガスから香水を作つて貰おうとしたが、まずガスの段階でノックアウトしてしまうため何人もぶつ倒れた。

どこから聞きつけたのか、モンモランシーがぜひ私にやらせて！ つと言つてきた。

水の魔法で身体に入る毒を中和しつつ、香水の二つ名を持つモンモランシーは、苦労の末にマタドガスのガスから香水を作り上げた。貧乏貴族であるモンモランシーは、どうかマタドガスの香水の生産権利を自分に譲ってくれないかとシエスタに土下座。困惑するシエスタは、親族に聞かないと… つと言つた。

ルイズは、それについて待つたをかけた。そもそもマタドガスは自分の使い魔なんだからつと。それを聞いてモンモランシーは、根本的な問題だつたと、ガクーンと頃垂れた。

その後、様々な交渉の末に、マタドガスのガスの共有と売り上げの何割かをマタドガスの主人であるルイズに収めることなどが決まり、マタドガスの香水自体もモンモランシーのオリジナル性を加えてタルブ村から発送される物とは別物として売り出されることになつたのだつた。

一方で、問題のマタドガスは、マタドガスつと、今日ものん

びりと浮いていた。

## 『ルイズが召喚したのが、ガルーラだつたら?』 悲しい版

その生き物は、腹の袋の中に、自身の子供を入れていた。

2メートル以上と大きく、コントラクトサーヴァントの儀式でキスをするのが大変だつた。

子供を育てているだけに、恐ろしく力強く、大型使い魔を飼育するための舎の出入り口を破壊して、学院の隣にある森に勝手に行くこともあつた。

ガルーラだあ！つと驚いたメイドがおり、知つているのかと聞いた。

シエスターというメイドが言うには、この生き物名はガルーラといい、子供をお腹の袋で育てる生き物だそうだ。

子供を守るためならどれほど傷ついても戦いを辞めないと言われており、子供にさえ危害を加えなければそれほど凶暴ではないそうだ。

森に行くのは、きっと子供を遊ばせるためだらうと言つていた。いくら躊けても舎を破壊するため、ガルーラ用に森の近くに小屋が作られるに至つた。

数日後だらうか。ルイズを警戒して子供に一切触らせなかつたガルーラが、ルイズに子供を触らせた。ルイズは、それが素直に嬉しかつた。

しかし……、悲劇は、突然起ころ。

ルイズは、無事に進級できて油断していた。失念していた。自身がこの学び舎でどういう立場に置かれているのかを。

ある日の夜、寝ていたルイズの部屋の戸が激しく叩かれた。

泣々起きて開けると、教師が大変だ！つと焦つて、ルイズの手を掴んで引っ張つていつた。

外に出るまでの間に聞こえていた。悲しく、大声で鳴く、ガルー

ラの……叫び声が。

ルイズが駆けつけた時、夜風に乗つて血なまぐさい匂いがし、教師達に包囲されている状態で暴れ話回る傷だらけのガルーラ。

しかし……、その腹のポケットは無残にも引き裂かれたようつていて、……子供はいなかつた。

何があつたの？ つと、震えながら聞くと、コルベールが首を振り、それから語り出した。

ルイズをよく思わない学院の生徒が、ガルーラの小屋に来て、ガルーラの子を殺したのだ。犯人達は、一人を残して怒り狂つたガルーラに叩き潰され、死亡したという。

唯一生き残つた共謀者の生徒が教員に取り押さえられて、喚いていた。

やれ、なぜゼロの使い魔を殺したぐらいでこんな目にあわなきやいけないんだとか、そんなことを喚いていた。

それを聞き、そしてガルーラの泣き叫ぶような鳴き声を耳にしながら、ルイズは、その場で意識を失つた。

……夢を見た。ヨチヨチ歩きでルイズに向かつて歩いてくる、ガルーラの子供。ガルーラは、それを微笑ましそうに見つめている、そして自分はヨチヨチ歩いてきたガルーラの子を抱き上げた。そんな……幸せなだつた夢。

ルイズが目を覚ますと、傍にシエスタがいた。

お悔やみ申し上げます……つと泣き顔で言われた。それでハツとしたルイズは、ガルーラは!? つと聞くと、シエスタは首を横に振つた。着替えもせずガルーラの小屋に行くと、小屋はすでに取り壊されていた。

それが意味することを理解したルイズは、力無くペタリとその場に崩れ落ちて泣いた。ゼロでゴメンナサイ……つと何度も何度も懺悔した。

そして泣きはらした後、フラフラ状態で部屋に戻つた。その後教

師に呼び出され、使い魔の再召喚を言い渡された。

ルイズは、死人のように力無く再召喚を行つた。

そして召喚されたのは……、全身傷だらけ、火傷だらけの自分のガルーラだった。ローンは消えている。だが自分のガルーラだと分かつた。

ギヨツとするコルベールを置いて、ルイズは泣きながらガルーラに駆け寄つた。

しかし、ガルーラに抱きついたとき気づかなかつた。自分に向かつて振り下ろされようとしている拳も、怒りと喪失によつて正気という光を失つたガルーラの目にも……。

## 『ルイズが召喚したのが、ガルーラだつたら?』　ほのぼの版

その生き物は、腹の袋の中に、自身の子供を入れていた。

2メートル以上と大きく、コントラクトサーヴァントの儀式でキスをするのが大変だつた。

子供を育てているだけに、恐ろしく力強く、大型使い魔を飼育するための舎の出入り口を破壊して、学院の隣にある森に勝手に行くこともあつた。

ガルーラだあ！つと驚いたメイドがおり、知つているのかと聞いた。

シエスターというメイドが言うには、この生き物名はガルーラといい、子供をお腹の袋で育てる生き物だそうだ。

子供を守るためならどれほど傷ついても戦いを辞めないと言われており、子供にさえ危害を加えなければそれほど凶暴ではないそうだ。

森に行くのは、きっと子供を遊ばせるためだらうと言つていた。いくら躊けても舎を破壊するため、ガルーラ用に森の近くに小屋が作られるに至つた。

数日後だらうか。ルイズを警戒して子供に一切触らせなかつたガルーラが、ルイズに子供を触らせた。ルイズは、それが素直に嬉しかつた。

その日の夜、……夢を見た。

ガルーラの子供が、ルイズのことによく思わない生徒達に殺される夢。そして子供を失つたガルーラが暴走し、教員達に倒される夢……。

飛び起きたルイズは、ネグリジエのまま、ガルーラのいる小屋に走つていた。

朝靄の中、小屋はそこにあり、中を見ると、立つたまま寝ている

ガルーラがいた。

子供は!? 子供は無事!? つと慌てて小屋に入つて、ガルーラの袋の中を覗くと、ヒヨコリツと子供が顔を出し、フワ～つと小さなくびをした。

ハツと目を覚ましたガルーラが、思わずルイズを殴りかけるが、ルイズだと理解すると、どうした? つと言わんばかりに首を傾げていた。

ガルーラの腹、つまりポケット部分を子供ごと抱きしめて、ルイズは、悲しい夢を見たと話した。人語は喋れないが、理解は出来るガルーラは、ああ、そういうことか? と理解して、泣いているルイズの頭を撫でた。ガルーラのその優しい手に、ルイズは、ますますわんわん泣いた。

すぐに接近してきた相手に対応しなかつたのは、見知らぬ土地にいきなり召喚されたことで、ガルーラが肉体的にも精神的にも疲れしており、それで眠気に勝てなかつたためだつた。その後慣れてからは、それもなくなつた。

あの夢を見てからというもの、しばらくルイズが番人のようにガルーラの小屋に入り浸つたことがあり、授業に出ろ! つと怒られたりもした。

その3年後……、成長したガルーラの子の巣立ちの時となり、ヴァリエール領の森にガルーラが住み着くことになつたのだつた。

森に放し飼いにされているルイズのガルーラは、再び子供を身籠もり、お腹に子供を入れると、仲間と共にルイズに子供を見せに來るのであつた。

それは、ルイズが亡くなるときまで続いたと言われる。

## 『ルイズが召喚したのが、ヤドンだつたら?』

その生き物は、とつても…鈍感でとろくさかつた。

ヤーンだの、ふみ…だの、独特な間の抜けた鳴き声を出すが、顔は声と同じぐらい間抜け、身体の色はピンク。四本足で、太めの尻尾があること。それだけだ。

猫の囲炉裏座りのように、藁の上に座り込んでおり、時折尻尾をゆっくりと振るぐらいで、あまり動かない。うつかりルイズが尻尾を踏んでも、まったく動じない。

もしかして、ハズレを引いた? つとルイズは嫌な顔をした。

しかし召喚したものは仕方ない。進級試験を突破するので必死で、後先のことはまったく考えてなかつたルイズであつた。

だが、不思議な奴ではあつた。

例えば、授業に遅れそなつた時、あまりに足が遅いのでそのまま置いて走つたことがあるが、教室に行くと、なぜか先回りしていたり、躊躇のために餌を高い位置に置いておいたのに、ちょっと目を離すと、床に餌置きがあり、ムシャムシャと食べてたりした。

食い意地だけは無駄にあるらしく、餌が足りないと、足りないと…つと言わんばかりにジツと見つめてくる。そのせいか、大きさの割に重い。(36キロ)

ある日、ヤドンだー! つと驚きつつも喜んだ顔をしたメイドがいた。

知っているのかと聞くと、シエスタというメイドは、ド直球に…、尻尾が美味しいんですよ!! つと言つたのだつた。

えつ? 食用? つというルイズの疑問に、食べれるのは尻尾だけですよつとシエスタは慌てて言つた。

聞くところによると、この生き物の名は、ヤドン。彼女の故郷の水辺でのんびりしている姿が見られる珍しい生き物で、タルブ近隣にしか住んでいないらしいが、その尻尾は千切れやすく、けれど、煮込めば良い出汁が出て身の味も良く珍味として味わられるらしい。

なお、千切れやすい尻尾は、トカゲの尻尾のようにすぐに生える

そうだ。

ヤドンの尻尾の味を思い出したのか、シエスタは、タ～ラタラと涎を垂らした。

そ、そんなに欲しいなら…、あげなくはないわよ？つと恐る恐る言うと、本当ですか？つと詰め寄られた。

そしてシエスタは、許可が下りるなり、ヤドンの尻尾を掴んでちよいと引っ張り、根元から千切つた。

出血は無く、尻尾を奪われたというのにヤドンはボ～つとしていた。

痛くないの？つとルイズが聞いても、ヤドンは、ブミつ？と間抜け顔で返事をしただけだった。シエスタが、ヤドンは尻尾を千切られても痛くないらしいですよ！つと、先ほど千切つた尻尾を抱きしめるよう抱えて説明してくれた。

ぜひ、ご馳走しますよ！つと、シエスタがキラキラした目で、ヤドンの尻尾を持つて言うので、ルイズの中で葛藤が生まれた。興味本位から味が気になるのと、食べたらいけない気がするという気持ちなどで。が……興味が勝つた。

そしてメイド達の宿舎で調理。

グツグツ煮込まれ、出た出汁はスープ。煮込まれた尻尾本体は甘つ辛く味付け（シエスタの故郷の味）され、輪切りになつて皿に盛られた。

恐る恐る、黄金色のコンソメにも負けない素晴らしい色のスープをスプーンですくつて、口に運んだ。

後入れで入れられた調味料は塩のみだが、出汁は濃く、不思議な甘みがあり、いくらでも飲みたいという衝動に駆られそうになる。

そして甘つ辛く味付けされ、黒っぽく色づいた輪切りの尻尾は、根元部分は、ナイフとフォークを刺すとホロリと崩れるように切れ、口に入れるとしつこくなく、だが、上質な脂質やゼラチン質のような感触で調味料では無い素材そのものの甘みとコクが口の中どころけた。尻尾の先端に行くほど歯ごたえが増し、尻尾の先端はコリコリと歯ごたえが強かつた。噛めば噛むほど味が出る。

ルイズは、こんな美味を久しぶりに味わつたと、恍惚とした。ふと見ると、ヤドンの尻尾はすでに元通りの長さになつていた。

シエスタが、もつと食べますか!? つと、ヤドンの尻尾を掴もうしたので、ハツと我に返つたルイズが、もうダメ! つと止めた。

残念がるシエスタに、欲しきつたら…言いなさい…つと言い、今日は、お引き取り願つた。

まさかの食用（尻尾のみ）と分かつて、ルイズは、ヤドンのこと

をどう思えば良いのか分からず困つた。

しかし、後日、土くれのフーケによる盜難事件で、巨大な土のゴーレム相手に、サイコキネシスという技を使い、さらに鈍い動きをテレポートでカバーして土くれのフーケを倒し、食用になる以外に、どんな力も秘めていたことが分かるのであつた。

## 『ルイズが召喚したのが、マンキーだつたら？』

ルイズは、その猿のような生き物を前に、ムチを手にして構えていた。

相手の猿も細く長い両腕を上げて、爪を出し、鋭い目でこちらを見ている。

ルイズの身体はあちこちボロボロで、顔や手などにひつかき傷があつた。

ミス・ヴァリエール…。つと、心配する一人のメイドがいた。

シエスタというメイドだが、彼女は、もうマンキーを手懐けるのはやめた方がいいと言った。

しかしプライドの高いルイズは諦めない。目の前のマンキーの手にはルーンが刻まれていた。そう、このマンキーという生き物。ルイズの使い魔なのだ。

使い魔に出来たのは、爆発の中心地でぐつたり倒れていたからできたことで、ルーンを刻むときの痛みで飛び起きた際に一発顔を引っかかられたものだ。

ルーンを刻まれても、その生来の気性の荒さは、抑えられず、言うことを聞かせるためにこうして苦労しているのである。

シエスタが言うには、マンキーは非常に凶暴で、意味も無く怒ることから単体でも危険だが、群れをなして手頃な獲物を襲うこともあるそうで、そうなつたらどうあがいてもなぶり殺しになるしかないと言われているそうだ。

さらに、マンキーは、成長する特性があり、オコリザルという個体になると、目を合せただけで怒って迫つて来るほど危険らしい。

まあとにかく危ないので、マンキーが棲む森は完全に立ち入り禁止になつているそうだ。

マンキーは、ルイズだけにとどまらず、目に付いた人間やその使い魔にさえ牙を剥いた。そんなんだから、使い魔をなんとかしろ！つと苦情が来る。

そもそも含めて、ルイズは、必死だった。マンキーを御せるように

なろうとした。

身体能力ではまるで話にならず、やがて杖を手に、自分にとつて忌々しい爆発の魔法を使つて威嚇してみたこともあつたが、余計に怒らせただけで、全身引つかれた。

見える肌、そして引っかかれてボロボロになつた服を着ているルイズがフラフラと歩いている姿に、誰も何も言わなかつた。同情めいた目を向けられることにルイズは、ギリツと唇を噛んだ。

そんな日々が続き、たまりかねて、どうしてそんなに怒るの？私が何をしたの？つと問うた。しかしマンキーは、藁の上でふんぞり返るように座つてそっぽを向いた。

そんなある日、シエスタが見かねて故郷にある曾祖父の日記を見たら何か分かるのでは？つと言つてきた。

理由を聞くと、シエスタの曾祖父は、マンキーとオコリザルを飼育していたらしく、手懐けていたらしい。

もしかしたらヒントが得られるかもつと、ルイズは藁にも縋る思いでタルブへ行くことを決めた。

タルブ：つと聞いて、マンキーがピクリツと反応したのをルイズは見た。

まさか…つと思いつつ、タルブに行く準備をして馬に乗ると、なぜかマンキーが後ろの方に飛び乗つた。なんかえらく大人しい。

やはりか…つとルイズは、自分の予想が的中しそうだと思つた。シエスタは、不思議そうにしていた。

タルブ村は、ブドウ畠があるだけで他はさっぱりした小さな集落だつた。しかし、少し離れた場所にうつそうとした森がある。そこには、立ち入り禁止とデカデカと看板が立てられていた。

時々無視して入っちゃう盗賊とかがいるみたいですが、誰も帰つてこないらしいですよ？つとシエスタが怖いことを言つた。

タルブに来て森が見えるなり、ルイズの後ろにいたマンキーが飛び降りて森の方に行つてしまつた。

追いかけない方がいいですよ、つとシエスタが慌てたが、ルイズは落ち着いていて、いいわよ、好きにさせるわつと言つた。

宿もないのにシエスタの家にお邪魔し、泊めもらつたのだが、その夜、宛がわれた部屋の窓が外側からコンコンと叩かれた。起きたルイズは、窓を見ると、ルイズのマンキーがいた。

マンキーは、ルイズが顔を出すと、こつちだと言わんばかりに手招きした。ルイズは、着替えてシエスタの家族を起こさないよう外に出て追いかけた。

マンキーを追いかけていくと、やがて森の中に入る。

明かりが見え、草をかき分けて行くと、そこには、焚き火を中心

に踊っているマンキーの群れがいた。

ルイズが来ると、ルイズのマンキーが群れの仲間に紹介するよう

に鳴き声を上げた。

マンキー達は、ピヨンピヨン跳びはねて歓迎するといった様子でルイズにアピールしていた。

するとルイズのマンキーが、小柄なマンキーと、ルイズのマンキーと同じぐらい大きさのマンキーを連れてきた。

ルイズは、自分のマンキーの家族だと理解した。

だから、ルイズに怒っていたのだ。妻と子から引き離されて見知らぬ土地に連れてこられ使い魔の役目を強要されたことが許せなかつたのだ。自分だつてそんなことされたら、きっと怒るだろうし、許せないだろう。

マンキー達が用意した丸太を椅子代わりに座り、マンキー達が森で収穫したと思われる木の実を籠いいっぱいに出された。

ルイズは、マンキー達のもてなしを受けながら彼らの踊りを眺めていた。

夜が明ける頃、ルイズのマンキーに案内されて森を出ると、シエスタとシエスタの家族が大慌てで出迎えてきた。

だいじょうぶですか!? と聞かれて、だいじょうぶよつと答えておいた。

ルイズは、隣にいる自分のマンキーに目線を合わせ…、ここに残つても良いのよ? つと言つた。

マンキーは、少し考えるような仕草をし、やがて首を横に振つた。

もしかしたら、夜までの間に、マンキーなりに自分の決意を固めたのだろうか。家族に再会できてルイズへの反感のもとが無くなつたのもあるのだろうか？

ルイズは、たまにマンキーを連れてタルブに来るから、宿代は払うわつと言つた。最初は全力で拒否されたが、ルイズは、これから先お世話になるんだから受け取つてと言い、受け取つて貰つた。

それからというもの、多少は凶暴だが、これまでのことを考えれば嘘みたいにマンキーは大人しくなつたのだつた。

ルイズが学院に帰ると、ちょうど土くれのフーケによる盗難事件が発生していたところで、本塔に現れた土のゴーレムに、オコリザルへと進化したマンキーが、きついパンチなる技で一撃で腹に大穴を空けて倒したのだつた。

土くれのフーケを一撃で倒したとして、マンキー改め、オコリザルを飼つているルイズに喧嘩を売る馬鹿はいなくなつた……。

## 『ルイズが召喚したのが、パラスだつたら?』

キノコと、虫。それが第一印象。見たまんまだ。

大きさは、30センチぐらいだろうか、大きすぎず、だが虫にしては大きすぎる。

背中に生えた赤くて黄色い斑点があるキノコが二つ。本体の虫の方には、丸で大きな二つの目があり、目を合せるとジツと見つめられる。

背中のキノコのためか、湿気や陰を好むようで、あまり日当たりの良いところを好みよいようだ。

パラスだあ！つという驚いた声を上げたメイドがいた。

シエスタというメイドに話を聞くと、この生き物の名は、パラス。背中のキノコは、冬虫夏草というそうだ。

それを聞いて、ルイズがまず思ったのは、それは滋養強壮が高い秘薬の材料じゃなかつたかと。

しかし一般に売られているのは、小さな虫の幼虫にキノコが生えたものだが、パラスも言われてみればそれに該当するだろう。

全身にキノコの胞子を浴びてから生まれてくるそうで、シエスタの曾祖父が言つていたことによると、一説では虫の意識よりキノコの意識の方が強く、キノコのために生きている虫だと言われているそうだ。

成長すると、パラセクトという巨大なキノコに乗つ取られた形態に成長するそうだ。

パラスのキノコは毒らしいから、食べちゃダメですよつと言われ、食べないわよつとルイズは返答した。

しかし、今は可愛い目でこちらを見てくる。パラスも、いざれは、背中のキノコに意識を全て奪われてしまうのか：つと思うと切なかつた。

あなたは、そんな生き方でいいの？つと聞いても、言葉が喋れないパラスは答えられない。

ある日、食堂でシエスタがギーシュに難癖付けられていた。見て

いた生徒に聞くと、香水を拾つたことが原因でギーシュの二股が発覚し、二人に振られた原因をシエスタに押しつけているのだという。

ルイズは、それが貴族のすることか、あんたが悪いじゃないつと言うと、平常心じやないギーシュがカツとなり、あろうことかルイズに決闘を言い渡した。あまりのことに周りがどよめき、友人達は慌ててギーシュをなだめる。

すると、ギーシュの足をツンツンとつつく感触があり、見ると、パラスがいた。

ギーシュが、はつ？と思つた瞬間、ブシユツ！とパラスのキノコが一瞬しほみ、赤い胞子がギーシュの顔にかかつた。

途端、ギーシュは、ぶつ倒れた。慌てて友人達が介抱するとギーシュは、グースカ寝ていた。あまりに強烈な眠気のため、2，3日ほどギーシュは眠っていた。

目を覚ましたギーシュは、何があつたのか、そして自分が何をしたのか聞いて、慌ててルイズに謝りに行き、シエスタにも謝罪した。

シエスタに、どういうことなのか聞くと、パラスのキノコの胞子は、強烈な毒や麻痺、そして眠気を促す効果があるそうだ。ギーシュが吸つたのは眠気を促す効果の胞子だったが、もし毒だつたら命は無かつたかもしれないと…つと、説明した。それを聞いてルイズは、ゾツとした。

ところが、ある日を境に、パラスが狙われた。犯人はモンモランシーだった。

犯行理由は、パラスのキノコが欲しかつたからだそうだ。理由は、ギーシュに盛るための惚れ薬を作るのに高級な冬虫夏草がいるそうだが、そのキノコの正体が最近になつてパラスのものだと分かつたから、どうしても欲しかつたと告白した。

パラスのキノコは、パラスの身体に深く根付いている。取つてしまふと恐らく死んでしまうだろう。ルイズは、モンモランシーの訴えを却下した。

さらに、後日、土くれのフーケによる盗難事件が……未遂で起こつた。

つというのも、いかにも怪しい格好でパラスに乗つかられてグース力寝ているロングビルが見つかったのだ。

逮捕されたフーケは、どうやつてか脱獄し、逮捕された恨みからパラスを狙つてきた。

その時、パラスが光り輝き、光が失せると、背中にでつかいキノコが乗つかつた、白目のパラセクトがいた。

ブシュツ！とキノコから胞子が放たれ、土くれのフーケの土のゴーレムがあつという間にキノコだらけになり、行動不能に。

舌打ちしたフーケに、胞子が襲いかかるように降りかかり、吸うまいとフーケは、ロープで払うが、そこにヘドロのような物がかけられ、ロープが腕ごと溶けて焼けた。そして土くれのフーケは、腕を押さえて逃げていったのだった。

ルイズは、パラセクトの意識がいかにもないという白い目を見て、悲しくなつた。

## 『ルイズが召喚したのが、ピツピだつたら？』

ルイズが召喚したソレは、見る者達に、まず可愛い！つと思わせた。

ぬいぐるみを彷彿とさせる愛くるしい姿ではあったが、ルイズが興奮しながらコントラクトサーヴァントの儀式を行おうとしたとき、その生き物がただ可愛いだけの生き物じやなかつたことがすぐ分かる。

迫つてくるルイズに、その生き物が怯えながらチツチツと指を振つた途端、地震。大地震。

あまりのマグニチュードに誰も立つていられない状態になつたが、身軽なその生き物だけは、背中を向けて逃げだそうとした。だが、ルイズが飛びつくように捕まえ、コントラクトサーヴァントの儀式の最後であるキスをした。

ピーピー！つと泣きながらルーンが刻まれる痛みにのたうつその愛くるしい生き物。ルイズは、可哀想だと思った。

ルーンが刻み終わつた直後、キッとルイズを睨んだその生き物が再びその指を振つた。その瞬間、その短い手足からは想像も出来ない連続パンチが繰り出され、殴られまくつたルイズは、倒れた。

次に目を覚ましたら、保健室だつた。顔中が痛い。鏡を見たら、腫れていた。

やがてコルベールが入つて来て、だいじょうぶかと聞いてきた。

ルイズは、それよりあの可愛い生き物は？つと聞いた。

あの生き物は…つとコルベールが言いにくそうにし、ハテナつと思つたルイズをコルベールが案内した。

そこは、凶暴な使い魔を収容するための檻が並んでいるところで、そこのひとつにあの愛くるしい生き物が入れられていた。

その生き物は、ルイズの姿を見ると、ピイ！つと鳴き、ビクビクと怯えながら檻の端に逃げていった。

ルイズがどういうことかと聞くと、使い魔召喚の儀式を行つた場所だけに地震を起こしたり、ルイズをたこ殴りにしてノックアウトさ

せたり、ルイズが搬送された後も、コルベールを初めとした教員達を外見からは出せないはずの様々な技で撃退していったため、なんとか捕まえた後、こうして檻に閉じ込めて様子を見ることになつたのそうだ。

ルイズが出してあげてください！ つと言つても、コルベールは、危険だからしばらくは様子見だと言つて取り合わなかつた。

結局、その生き物が檻から出されたのは、1週間後だつた。

あまりにもビクビク震えて怯えるため、ルイズは、だいじょうぶよつて言うが、余計怯えるだけだつた。

ピッピだあ！ という驚いた声が聞こえた。ひとりのメイドがいたので、話を聞くとこの生き物のことを知つていてるようだつた。

シエスタというメイドが言うには、この生き物の名は、ピッピ。彼女の故郷の近隣にある山に棲むと言われている、非常に珍しい生き物で、月から来たと言われているらしい。

指を振ることで、様々な技を出せるため見かけによらずかなり強いそうだ。そのため、愛くるしい見た目と珍しさに釣られて捕獲しに行つた者が度々それつきり帰つてこなくなると言われているとか……。

なにそれ……、隠れ凶暴生物じゃない……つとルイズが言うと、ピッピ自体はとても臆病で大人しいけど身を守るために仕方ないですよつとシエスタが言つた。ルイズは、納得した。

好きな木の実を知つていて、あげてみたらどうですか？ つとシエスタが助言。シエスタが気を利かせて、食堂からいくつかのフルーツを持ってきたので怯えているピッピに差し出してみた。ピッピは、ジーツと差し出されたフルーツを見つめ、ルイズと見比べ、やがて、恐る恐るビクビクと近づき、フルーツを奪うようにとつて、それから走つて距離を取つてから食べ始めた。

シエスタが、ファイトです！ つと言うので、ルイズは、気長にくわよつと返答しといた。

その後、餌にフルーツや木の実を手からあげていくのを繰り返した。ピッピは、少しずつだがルイズに敵意がないと理解したのか、距

離を縮めていってくれた。

しかし、ルイズは、ウズウズしていた。どうしてもこの愛くるしいピッピを抱きしめたかったのだ。

そしてとうとう我慢できず近づいたところをギュ～っと抱きしめてしまった。ピー！ つと鳴かれ、顔にもろにビンタを受けて逃げられてしまった。

我に帰ったルイズは、慌ててピッピを探すが、学院中を探し回つても見つからなかつた。シエスタも協力してくれたが見つからず、するとタバサが、学院の裏山に逃げていったのを見たと言つてくれたので夕闇の中、裏山に走つて探しに行つた。

学院の裏山ではあるが、決して安全な場所では無かつた。時に別の山から下りてきたオオカミやオーク鬼などが現れるため、普段から原則として立ち入り禁止になつてゐる場所だ。そのことが余計にルイズの心配に繋がつた。

夕日の光も沈む頃、草木で手足を切りながらルイズは、ヘトヘトになつてその場にへばつた。

そこに、グルル…つという獣の鳴き声が聞こえた。ハツとして見ると、ルイズは、オオカミの群れに囮まれていた。

ルイズは、慌てて杖を握り攻撃魔法を唱える、だが命中精度が悪く、近くの木の枝を爆発させ、オオカミたちを一瞬ビックリさせただけに終わつた。それが刺激となつて、興奮したオオカミが襲つてきた。ルイズは、思わず身体を庇つて目をつむつた。

すると、ギャインツ！ というオオカミの悲痛な鳴き声が聞こえた。

恐る恐る目を開けると、そこには、ルイズを守るように立つピッピがいた。

ドロドロに汚れ、そしてブルブルと震えていて、けれど懸命にオオカミとにらみ合つてゐる。

オオカミの一匹がピッピに躍りかかつた、ルイズは、咄嗟にピッピを庇おうとしたとき、ピッピが指を振つていた。

そして手から放たれた破壊光線がオオカミを貫き、木々を抉るよ

うに破壊し、山中の地面で爆発した。

それを見て臆したオオカミ達は、一目散に逃げ出していった。

残されたルイズとピッピは、するとピッピがふらりと倒れた。ルイズは、慌てて抱き上げる。すると、タバサの風竜が飛んできて、ルイズのもとへ降りてきた。

キュルケがタバサと共に来ていてだいじょうぶ？ つと聞いてきたので、ルイズは、泣きながらピッピを助けて！ つと叫んでいた。

その後すぐに学院に戻り、ピッピの治療が行われた。怪我はなく、単に疲労によつて力尽きただけだろうということで命に別状は無かつた。ルイズは安心してまた泣いた。

目を覚ましたピッピを、ルイズは、喜びのあまり抱きしめようとしたが、寸前で思いとどまつた。だが、思いとどまつたルイズに、逆にピッピが抱きついてきた。それにルイズは、顔から出る物全部出して泣いて抱きしめた。

それからというもの、ルイズは、ピッピと仲良しになり、ピッピの可愛さに、周りの女子からは羨ましがられた。

ところが、ある日、ピッピが土くれのフーケに狙われた。ピッピがその見た目の可愛さと珍しく希少であるため、闇市で貴族に高く売られるからであつた。

学院の本塔近くで戦いになり、本塔の宝物庫の壁が壊れたがその際に、宝物庫に収められていた宝のひとつが落ちてきた。それは、月の形をした石で、ピッピは、それを見つけると、飛びつくように石に触つた。

途端、光り輝き、そこには、ピッピからピクシーへと進化した姿があつた。

指が振られ技が繰り出される。進化したことであらゆるステータスがアップし、攻撃力と精度が上がつたことで土くれのフーケを圧倒し、退散させるに至つた。

土くれのフーケを倒した強力な使い魔だということで、ピッピを欲しがつて陰で狙つっていた者達は、早々に諦めたのだつた。

## 『ルイズが召喚したのが、カイロスだつたら?』

その生き物は、クワガタ虫の親玉みたいな生き物だつた。

つというのも、頭に生えた二つの鉄のような角があつたからだ。さらに、1・5メートルとかなり大きい。

口は、上下では無く、左右に開いたようになつており、キスする時噛まれないか心配だつたが杞憂で終わつた。

クワガタ虫と言えば、幼かつた頃、男の子達が虫同士を戦わせている姿があつたような気がする。

そんなんだからか、大型の虫を召喚した男子生徒が、オレの方が強いだのなんだのと競い合つてゐる姿が見られた。

当然だが大きなクワガタ虫の親玉みたいなを召喚したルイズも、巻き込まれた。不本意ながら。

やれゼロのルイズの変な虫を倒せだと、土俵で自分の虫を向かわせるが、ルイズのクワガタ虫の親玉みたいなのは、その角ではさみ、軽々とぶん投げるなどして、全員倒した。

それで捨て台詞と共に、傷ついた自分達の使い魔を連れて帰つていく男子生徒達。

そこへ、カイロスだあ！つと言つたメイドがいた。

シエスタというメイドに話を聞くと、このクワガタ虫の親玉みたいな生物の名は、カイロス。

シエスタの故郷の森に棲んでいる、でつかいクワガタムシの一種だとか。

寒い時期には、地面に潜つて眠るそうだ。シエスタが知つてているのはそれぐらいの知識だった。

あと、凶暴で、角を振り回して襲つてくるため、出会わないようにならないといけないみたいに言われてゐるぐらいだつた。

その後、虫相撲大会なる、試合が行われるという話が舞い込み、大型の虫を使ひ魔に持つ生徒達に広まり、特訓まで始める生徒まで出る始末。

ルイズは、出るかどうか悩んだ。確かにカイロスは強い。強い

が、どうも眠たがりで、暇さえあれば寝ている。やる気があつたのは、最初の内だけだ。馴れてしまつたら気性は大人しいタイプだつたらしい。

特訓させようにも、興味も無いらしく、起こそうとしても起きてくれない。ムチで叩いても、硬い外殻が弾いて意味も無い。

なので、ルイズは、虫相撲大会なる試合は、諦めた。

ところが、そんな時にシエスタから土下座された。

何事？って聞いてみると、今度の虫相撲大会なる試合でカイロスを貸して貰えないかということだつた。

なんでも、タルブ村の存続がかかつており、虫相撲大会なる試合の賭けで勝てれば村を守れるというのだ。

タルブ村を危機的状況に陥らせた相手が、試合に参加するらしく、優勝の有力候補になつてゐるらしい。

ルイズは、悩んだ。シエスタは、カイロスのことを教えてくれた相手だ。蔑ろにはできない。

そしてルイズは、決心し、寝てゐるカイロスを必死になつて起こした。

そしてシエスタの故郷…、そしてカイロスの仲間が棲む森が危機的状況だということを言うが、カイロスは、面倒くさそうだ。

シエスタは、泣きながらお願ひします…お願いします…！つと併んでいる。

そんな二人を見ていたカイロスは、やがて、ヤレヤレつという風に重い腰を上げた。

そして、カイロスは、試合に参加することになった。

試合当日、トーナメント方式で行われた虫相撲大会なる試合を、カイロスは勝ち抜いていき、タルブ村を危機的状況に陥らせた相手も勝ち上がり、決勝戦で当たつた。

相手は、デカいカブトムシ。カイロスの倍はある。

だが、カイロスは、臆さない。

突撃してきた相手の角をはさみの角で挟んで、ギリギリとつん張りの末に、角をはさみで切つて折つた。

そして、一気に腹の下に入り込み、はさみで胴体を持ち上げると、ブンブンと勢いを付けて振り回し、遙か空の彼方へ投げ飛ばした。ちきゅうなげという技である。

こうして、シエスタの故郷…、タルブ村は救われた。

## 『ルイズが召喚したのが、ケンタロスだつたら？』

ルイズは、景色が逆さまになる光景を初めて見た。

自分が召喚した、尻尾が三本ある牛みたいな生き物に突撃され、ルイズの軽い体は宙を舞う。

コルベールが、レビテーションを咄嗟に唱え、ルイズは地面に激突するのだけは防がれた。しかし、突撃されたときの体の受けた痛みが激しい。肋骨の何本かは折れたかも…つと、ルイズは、思いながら地面に倒れる。

モー！ ウモー！ つと牛が暴れる音と鳴き声が聞こえる。

意識がもうろうとする中、キュルケがルイズを助け起こし、指差した。その先には、横に倒れているあの牛がいた。体中焼けていて、どうやらコルベールが動けなくさせたらしい。

今のうちにコントラクトサーヴァントの儀式をつと促され、ルイズは、痛みを押して牛にコントラクトサーヴァントの儀式を行つた。

全身火傷した牛は苦しげに息をしており、そこに追い打ちをかけてきたルーンが刻まれる痛みに慣れ、ルーンが刻まれ終わると気絶した。

その後、牛は水の魔法で治療され、大型使い魔を入れておく舎に移された。もちろんルイズも保健室で治療を受けた。

治療が終わり、保健室から出ようと思つた時、外が大騒ぎになつていた。

走つて行くと、広場での牛が生徒や教師達を追い回して無差別に突撃して吹つ飛ばしていた。

ルイズがやめなさい！ つと叫ぶと、牛は方向転換し、ルイズに向かつて突撃してきた。

横からキュルケに庇われ、一緒に転がつた後、牛がさつきまでルイズがいた場所を走り抜けた。しかし、キュッ！ クルンツ！ と急ブレーキかつ方向転換をして、再びルイズを狙う。

その牛の上から、タバサの風竜が飛びかかり、押さえつけた。

キユルケが、ルイズに、どうするの？と聞いた。

ルイズは、とんでもない使い魔を呼んでしまつたと、思つた。

タバサの風竜に押さえつけられながら、ルイズは、牛に言い聞かせた。自分が主人だと。だから暴れるのはやめろと。

しかし牛は、フンフン！ つと鼻息荒く、上に乗っている風竜を押しのけてでも暴れようとする。

すると、そこへ、ケンタロスだ！ つと驚いている声が聞こえたので、見ると、一人のメイドが驚いた顔をしていた。

捕まえて話を聞くと、どうやらこの牛のような生き物のことを知つているようだつたので聞いた。

この牛の名は、ケンタロス。

群れで生活し、三本の尻尾で闘志を高めることで、仲間同士で、あるいは大木に体当たりして強さを高める暴れん坊な珍しい牛なのだと思うだ。

性格は、非常に荒っぽく、狙つた獲物に激突できるまで突進していくのだそうだ。

躊躇られないのかと聞くと、シエスタというメイドは、自分の曾祖父が飼育していたことがあつたと話した。

前例があるなら：ルイズにだつて躊躇られるはずだと、ルイズは、ケンタロスを見た。ケンタロスは、いまだ暴れている。

キユルケが、容易なことじやないわよ？ つと言つてきただが、ルイズは、鼻息をふんつと漏らして、私が躊躇る！ つと意気込んだ。

その日から、ケンタロスとの戦いが始まり、体当たりされる日々。保健室の常連となつたが、ルイズは、諦めない。

その諦めない気持ちが通じたのか、ケンタロスは、徐々にだが、無差別に人を轢くようなことはしなくなつた。

しかし一方で、暴れたりないのか、学院内にある木々や壁に角を突き出して体当たりをするため、木は倒れ、壁に穴は空くなどの被害が出た。

そこで、ルイズは、闘牛の訓練用の大木をヴァリエール領から発注し、持つてこさせた。ケンタロスは、それがお気に召したらしく、

そればかりに体当たりをかまし、他に木や壁には興味を示さなくなつた。

そんなある日、闘牛の大会が行われることになり、牛と牛とを戦わせる試合の受付に各地の牛を持つ貴族が参加した。ルイズもケンタロスを出場させようと受付を済ませた。

試合当日、筋肉隆々の大柄の牛が並ぶ中、ケンタロスの存在は目立つた。なにせ尻尾は三本あるし、牛といつても種類が違う。

試合ルールは、戦意喪失か、息絶えるか…。

そして試合が開始されると、ケンタロスは、順当に勝ち上がった。そして最後に、ケンタロスよりも大きな牛が出てきた。ケンタロスより一回りは大きいだろうか。本当に牛のかつて言いたいぐらいいだ。

そして試合開始。相手の牛が鼻息荒くゅつくりとした歩で迫つてくると、ケンタロスは、小回りを利かせた走りで迫り、横へ回り込み、その角を相手の牛の脇腹に突き立て、大きさの差を感じさせないパワーで持ち上げ、そのまま試合会場の壁へと突撃し、相手の牛を壁にめり込ませた。

相手の牛は、血を吐き、息絶えた。

牛の持ち主である相手貴族がズルをしたと猛抗議してきたが、魔法で調べたが何のズルも見つからず、恥をかいただけに終わり、それどころか、試合に出場させた牛にこそ禁止されている禁薬によるドーピングを大量に行っていたことが明らかになり、逮捕されるという事件となつた。

ルイズは、ケンタロスと共に表彰台に上がり、見に来ていた両親に褒められ、自分のケンタロスを誇らしく思ったのだつた。

## 『ルイズが召喚したのが、ブーバーだつたら?』

その生き物とキスをした時、唇が…無くなつた。焼けて。

気がつけば保健室。超たつかい秘薬で治せたものの、危うく唇が無くなるところだつた。

コルベール調べでは、その炎の具現のような生き物の体温は、1200度もあるそうだ。そりや唇も無くなる。

目つきは悪く、2本足で、尻尾があり、口は今にも火を噴きそうなおちよぼ口。その体温の高さゆえに、周囲の空気が揺らめくほどである。召喚当初、一気に空気が暑くなつたのを覚えている。

コルベールが、あれは危険だ…と言つて傍から、外で騒ぎが行つてみると、あの炎の生き物が学院に火を付けていた。

全焼は逃れたものの、ちよつと一部燃えてしまい、あと避難体制がちゃんとできていないと教員達もお叱りを受けるなどてんやわんやだつた。

ブ〜つと低く鳴く、その生き物をルイズは叱つた。叱られると、その生き物はしょんぼりとする。こつちの言つていることは理解しているらしく、頭は意外と良いらしい。

ブーバーだ！つと驚いたメイドがひとりいた。

シエスタというメイドから話を聞くと、この生き物の名は、ブーバー。

火山火口を住処にしているそうだが、その昔、シエスタの曾祖父が飼っていたブーバーの影響かは不明だが、時々タルブ村近隣に現れることがあるそうで、その時は気温が上昇するので分かりやすいとか。ブーバーが現れると危険なので、その時は避難するそうだ。

あと、棲んでる環境を自分に合わせようとするうなので、今回の火事もブーバーが自分の体に合つた環境にしようとしただけだろうと言つた。

なるほど…、確かにこれだけの高温の体を維持しようと思つたら、同じ温度の環境が必要だろう。だが、はた迷惑だ。

ですけど、曾祖父が飼育していたことがあつたから、慣れれば環

境を変えなくても大丈夫になるはずです！つと、ルイズを励ました。

その後、ルイズに叱られたからか、ブーバーは、その後火事を起こすことは無くなつた。

しかし、目に見えて弱り、ルイズは心配した。

けれど、それも1週間もすれば治つた。環境適応能力は、高いらしく、最初の弱体化が嘘みたいに元気になつた。

ただその代わり、体の体温を維持するためのカロリーが必要らしく、食事量は倍になつた。ルイズは、弱つているよりはマシだと思つて大目に見て いる。

ブーバーは、強かつた。

ギーシュとトラブルになつた時に前に出て、ギーシュの青銅のゴーレムを蒸発させるほどの火炎を放つたり、土くれのフーケの盗難事件では巨大な土のゴーレムをあつという間に炭に変えるほどの炎を全身から出したり、アルビオンでルイズの婚約者・ワルドが裏切つた時は、その怒りの炎をもつてワルドを倒した。

しかしそんな風に連戦が続いたためか、ブーバーは、酷く疲れてしまつたらしい。

そこでシエスタが故郷に帰つて、曾祖父の日記を持つてきて、ブーバーに関する情報を持ち帰つてくれた。

日記によると、ブーバーは、疲れたときは灼熱の火山のマグマに浸かることで癒やされるそうだ。

ルイズは、こうしちゃいられないとブーバーを連れて、最寄りの火山を目指した。

活火山の灼熱で気温の高い地域にさしかかると、ぐつたりしていったブーバーは飛び起き、急いだ様子で火山に向かつて行つた。

そして、しばらくして、ホツカホカに、灼熱を纏つたブーバーが喜び顔で帰つてきた。

ルイズは、ブーバーの回復を喜んだが、熱すぎて抱きしめられないジレンマに襲われたのだつた。

微熱の二つ名を持つキユルケが、ブーバーに恋したとか言いだし、ルイズに、私にちよだい！つとか冗談じやないことを言い出し

たため、毎日のようにルイズとキュルケの喧嘩が勃発するようなつたのは余談である。

## 『ルイズが召喚したのが、エレブーだつたら?』

ルイズの長い髪の毛が、ブワツと逆立つた。

いや、別に魔力をほどばしらせとかそういうわけじゃない。この黄色と黒の生き物に近づいたら、自然とそうなつたのだ。

稻妻のような模様があり、虎のように縞模様が手足と尻尾にある。目つきも鋭く、口から覗いている牙も鋭い。

ブー！ つと鳴いたその生き物が、全身からバチバチと放電した。これでは、とてもじやないが近寄れない！

次の瞬間、コルベールが火球を放ち、放電している生き物に命中した。

ルイズがポカンツとしているところ、コルベールが今のうちにつと促した。しかし、直後、電撃がコルベールを襲つた。

火球による煙が晴れると、ブー！ つと再び鳴いたその生き物が片手で光の壁を張り、火球から身を守つた上でもう片手で電撃を放つたことが分かつた。

電撃で痺れて倒れているコルベールに、謎の電気の生き物がトドメを刺そうと迫ろうとして、ルイズの横を通り過ぎようとしたので、ルイズは意を決して、飛びつき、相手がビックリしたところを、素早く詠唱して、キスをした。途端、凄まじい電気が体を駆け巡り、ルイズは倒れた。

次に目を覚ましたら、保健室のベッドの上だつた。

全身が微かに痺れている。そして痛い。

そういうえば、進級試験はどうなつたんだろう？ つとルイズは、起き上がろうとして、痛みと痺れでまたベッドに戻つてしまつた。

そこへ、コルベールがやつてきた。その後ろに、あの電気を放つ生き物がいた。

ルイズが思わず身構えかけると、コルベールが、だいじょうぶだと制した。すると、電気を放つこと出来るその生き物が腕についたルーンをルイズに見せた。

ああ、成功したんだ！ つとルイズが涙ぐむと、その生き物は、フ

ンツ！とそっぽを向いた。

コルベールが去り、ルイズと、その生き物と二人きり（？）になつた。

ルイズが手を伸ばして、起こしてつと言ふと、その手をパンツと弾かれた。

ルイズは、その生き物が自分の手を弾いて逆らつたのだと理解して、痺れた体をおして起き上がり、持つていたムチを出したが、そのムチをバチッ！と一瞬の放電で焼かれた。

ポカンツとするルイズに、ケツとその生き物が吐き捨てるように舌を出した。

その日から、ルイズとその生き物の攻防が始まつた。

なにをするにしてもとにかくルイズに逆らい、部屋では藁の上で横になつてふんぞり返つてゐる。罰としてご飯抜きを言い渡すと、さらには、その強力な電力を維持するため、食堂の食料庫を食い漁り、迷惑をかけた。

その際に、一人のメイドが、エレブーだ！つとビックリしていた。この生き物の名は、エレブーというらしい。

詳しく述べと、電気を好んで食べると言われてゐる生物で、雷が鳴る時に現れ、自らが避雷針になつて雷を食べてしまうそうだ。

それ以外には？つと聞いたが、それ以外は分からないと言われた。

分かつたことは、エレブーという名前。あと雷さえ食べててしまう体质であること。

その後も相変わらず言ふことは聞かないし、餌抜きをしたら食料庫を荒らすため、ルイズは叱られて叱られて、仕方なく食事をたくさんあげるようにした。その甲斐あつて、食料庫を荒らすことは無くなつたが、食事後は腹をボリボリ搔いて寝こけるようになつた。

そのままブクブク太らないかと心配だつたが、電気エネルギーに変換するためか体型は維持されていた。それどころか、日を追うごとにバチバチと放電量が増しているように思えた。

ある日、ゼロの使えない使い魔！つと馬鹿にする声が聞こえ、起

きたエレブーが、腕をグリーングリンと回してから、電気を帯びたパンチでその生徒を撃破していた。

それがきっかけであれよあれよという間に決闘騒ぎ、いや、エレブー対多人数での一方的な戦いが勃発。

だがエレブーは、あの光の壁ですべての魔法を防ぎ、全身から莫大な電量を放つたり、電気を帯びたパンチで殴つたりして全員を倒してしまった。

全員が倒れた後、エレブーは、あくびをしてボリボリと腹を掻いていたのだった。もういかにも、つまらんつと言っているみたいだ。

それからというもの、エレブーに下手に悪口を言う馬鹿はいなくなり、エレブーが通るとみな道をあける始末だ。

これには、ルイズも頭を抱え、エレブーとの関係をどうすればいいのかとずっと悩むことになるのであった。

## 『ルイズが召喚したのが、マダツボミだつたら？』

ひよろひよろで、頼りなさそう。

それがルイズの使い魔に対する最初の印象だつた。

細い壺のような顔に小さな黒い両目、体は茎のようにひよろりとしており、両腕部分は大きな葉っぱ、足はもつと細い根っこが2本。

高さは70センチ程度で、足がひよろひよろの根っこであるためか足音がしない。なので後ろをついていても分からなくて、何度も振り返つて確認した。

図鑑で調べたりもしたが、この植物みたいな生き物のことは何も分からなかつた。

だが、召喚した後日、マダツボミだあ！つと驚いた声を上げたメイドが一人いた。

話を聞くと、シエスタというメイドの故郷の近隣の森に棲むという珍しい植物の生き物なのだそうだ。

だが、マダツボミがいる森には近づくなという禁令が出ているそうだ。

理由を聞くと、マダツボミは、二段階成長する特性があるのだが、最後の成長の姿であるウツボットになるため、満月の夜に成長に必要な養分を求めて、他の動物を狩ることを行うらしく、捕まれば生きたまま養分を吸われてミイラにされてしまうと言われているそうだ。

実際に何も知らない賊が森に入つてしまい、満月の夜の後日、ミイラになつて見つかつたという話があるそうだ。

ルイズは、青ざめ、ついバツとマダツボミを見た。マダツボミは、ボクつとつつ立てるだけだつた。

そういうえば、何を食べるのか思つてたら、その辺に飛んでいたチヨウチヨを吸い込んで溶かしたりしてた。シエスタのアドバイスで、肉類を持つてくると、口から溶解液を出して溶かしてから飲んでいた。水分補給は、足の根っこですらしく、水を張つたバケツに足を突つ込んでいた。

ちよつとした誤解でギーシュとトラブルになつた際には、青銅で

出来たワルキューレをその溶解液で溶かして見せたりしていた。見かけによらず怖い。

さらに土くれのフーケの盗難事件では、土くれのフーケの巨大な土のゴーレムを、口から吐いた種で行動不能に陥らせ、口から吐いた眠り粉でフーケを捕まえた。

そうして経験値を積んだことで、マダツボミは、ウツドンという形態に進化した。

食欲は更に旺盛になり、自分より大きな肉の塊を葉っぱで刻んで残さず食べた。

そして、ある日の満月の夜……、ウツドンが姿を消した。

どこに行つたの？ つと探し回つたが見つからず、翌日、ウツボットになつて戻ってきた。

しかし一方で、何匹かの使い魔がカラカラのミイラになつて見つかり、騒ぎになつた。

犯人は分かつていたが……、ルイズは、言い出せなかつた……。

## 『ルイズが召喚したのが、コラツタだつたら?』

ガブリつ。

2年生に進級するための進級試験である、使い魔召喚の儀式で、あとは、キスだけとなつた時、顔を近づけたら噛まれた。

30センチはあろうかという大きなネズミのような生き物の発達した前歯が、ルイズの顔に食い込む。

ぎやああああ！つと、ルイズは、悲鳴を上げ、ネズミを引き剥がそうとした。その際に、ネズミの口の一部がルイズの口に当たつた。その結果、ルーンが刻まれ、ネズミの方が悲鳴を上げて離れた。噛まれたルイズは、顔からだらだら血を流した。

保健室で絆創膏を張つてもらい、ルイズは、ムスッとした。

というのも、ルーンが刻まれ終わつたものの、ネズミのような生き物に手を出すと、また、ガブリ。怒つてムチを出すと長い尻尾で弾かれる。見かけによらず、このネズミ、強かつた。

フーッ！と威嚇してくるため、ルイズは、餌抜き！つと言い渡して、ふて寝した。

それから数分後ぐらいいだろうか。ガリガリガリガリ…つと、硬い物を囁く音が部屋に響き渡りだした。

うるさきでで起きたルイズが見たのは、固定化の魔法がかけられていて強固な寮の壁を囁つて穴を空けかけているネズミだった。

やめなさい！つと叫び、ネズミを掴んで止める。そして、ガブリ。また噛まれた。

翌日、壁の穴を直して貰うよう依頼してから、ネズミに餌を与えるとthoughtした。

しかし何を食べるか分からなかつと思つてたら、コラツタだあ！と驚いているメイドがいた。

話を聞くと、このネズミの名は、コラツタ。

シエスタというメイドの故郷の近隣に棲む、他では見られないネズミだそうだ。

何を食べるのかと聞くと、一生歯が伸びるので硬い物をあげたら

どうですか？つとアドバイスをもらつた。

そこで、硬い木の実をシエスタが持つてきてコラツタに与えた。

コラツタは喜んでガリガリと食べた。基本的には雑食だそうだ。

それと、歯が伸びすぎると餓死するらしいので注意してくださいね、つともアドバイスをもらつた。

昨日餌抜きにしてしまつたので、コラツタはよく食べた。

それにしても、固定化の魔法をかけられている壁に穴を空けるほどの歯なのに硬い物を嚙らないと伸びすぎるなんて…つとルイズは不思議に思つた。

あと、コラツタは、ラツタという成長した姿にもなるそうだとシエスタに教えてもらつた。

コラツタは、所構わぬ硬い物を嚙りたがつた。そのため、学院のあつちこつちが歯形だらけに。

一日中餌を探す習性ゆえに、うつかりギーシュがモンモランシーからもらった香水の瓶を飲み込んでしまつた事件が起こり、騒ぎに。ギーシュが吐かせようとコラツタをワルキユーレで攻撃を仕掛けたが、コラツタが青銅のワルキユーレをその歯で破壊してしまつた。

ルイズが騒ぎを聞いて、コラツタの口の中に手を突っ込んで嚙まれるのも構わず無理矢理吐かせて、なんとかなつた。

これに懲りたのか、口に入る物を所構わぬ食べることは無くなつた。

そして、ある日、土くれのフーケによる盜難事件が発生。コラツタが嚙つたと思われる宝物庫の穴から魔法をかけて宝物庫を開けたとみられていた。

そのため責任を感じたルイズは、フーケ討伐の任務に志願した。

そして土くれのフーケが潜伏していると思われる廃屋に行くと、フーケの巨大な土のゴーレムが出現。

ルイズが踏まれそうなると、コラツタがルイズを突き飛ばして庇つた。

その際に、カツと光り輝いたコラツタがラツタへと進化した。

そして大きくなつた歯で、怒りの前歯という技を繰り出し、土く  
れのフーケの巨大な土のゴーレムを一撃で粉碎した。

ロングビルに扮していたフーケが正体を現わし、ラッタと戦い  
に。

その最中、ラッタは、廃屋からフーケが盗んだ宝物庫の宝を使い、  
技を覚えた。

そして、10万ボルトという電撃の技を繰り出し、フーケを撃破  
した。

こうしてフーケは、捕まり、さらには、フーケが使い方を調べる  
ためにわざと戦いに持ち込んだきつかけとなつた宝物庫の宝の道具  
も使い捨てであつたことが判明し、フーケは、大損するのであつた。

『ルイズが召喚したのが、ゴクリンだつたら?』

なんか間抜け…。

それが、ルイズが感じた第一印象だつた。

黄緑色の体は、ツルツと毛もなく、足はない。手らしきものはあるものの、とても小さい。口は、唇を突き出しそうになつており、目は糸目で小さい。頭頂部に黄色い触覚みたいなものが一本。尻尾らしきものが、短い物が後ろにある。尻尾の上だけが少し黒い。

コントラクトサーヴァントの呪文を唱え、ムチュ～つという感じで突き出された唇に、キスをした。

キスをした直後、グワツと唇が突き出されていた口が大きく開いた。

えつ? つと思つた瞬間には、ルイズの頭から丸呑みにされたいた。

次の瞬間、コルベールが放つたエアハンマーに弾かれ、使い魔として召喚された生き物がルイズの頭を吐き出して転がつた。

唾液と胃液まみれになり、ルイズは、顔を押さえてのたうつた。ジユージューと胃液が肌に染みこんだからだ。

水の魔法が使える生徒がすぐに呼ばれ、すぐに治療されたおかげで事なきを得た。

ルイズは、自分が召喚した生き物を、ギッと睨んだ。

その生き物は、手にルーンが刻まれており、どこを見ているのか分からぬが、様子から察するにとりあえずルイズをじょつと見ているようだつた。

ルイズは、隠し持つていたムチを取り出し、その生き物に振り下ろそうとしたが…。

バクリツ

ムチごと手を飲み込まれた。

ぎやああああ、つとルイズが悲鳴を上げ、腕ごとその生き物を振り回す。パツとその生き物がルイズの手を吐き出し、ゴクリツとムチだけを飲み込んだ。

コルベールは、様子を見ていて、たぶんお腹をすかせているなつと分析した。

ムチを食べる生き物なんているんですか!? つとルイズは、噛みついた。

コルベールは、冷静に、新種か、未開拓の土地の生物かも知れないと言った。

ルイズは、唾液まみれになつた手を拭きながら、他の生徒やコルベールがフライで飛んでいく中、その使い魔を連れて歩いた。

手しか無いため、体を引きずるように懸命についてくる。

やつと部屋に帰り、ルイズは、そのままふて寝した。

そして翌朝……、起きると、机の上がやたら綺麗だ。というか何もない。杖もない。

ゲプツという音が聞こえたので、見ると、あの生き物が倍に膨らんでいた。

吐き出せ〜〜! つとルイズは、その生き物を掴んで揺すつた。

やつと吐き出させたものの……、あらゆる物が半分溶けていた

……。

ルイズは、杖まで失い、トボトボと歩いていると、ゴクリンだ! つとびつくりした声が聞こえた。

そこには一人のメイドがいて、ルイズの使い魔を見てびつくりしていた。

話を聞くと、シエスタというメイドの故郷の近隣に棲むという、この生き物の名は、ゴクリン。

なんでも食べて消化してしまう生き物で、胃袋以外の臓器がほとんど小さくて、食べることだけに生きている生き物らしい。

成長すると、マルノームというさらに寣欲旺盛な生き物に成長するそうだ。

今だつて悪食なのに、これ以上悪食になるのか……。つと、ルイズ

は、絶望した。

机の上の教材や杖を食べられてしまつた（※半分消化）と話すと、食欲さえ満たしておけばだいじょうぶですよ、つとシエスタは、曾祖父がかつて飼育していたという話からそう言つた。

それからというもの、教材と杖を新調したルイズは、食べられないよう、ゴクリンに餌をたくさんあげるようにした。

その甲斐あつて、他の使い魔が食べられそうになるような事件も無くなつた。

しかし、ある日起きたら、ゴクリンが紫色の大きな生き物、マルノームになつていた。

そして教室で、事件発生。

キュルケのサラマンダーが丸呑みにされた。  
すぐに吐き出させたので生きていた。

後日、ギーシュのジャイアントモールが行方不明になり、視界の共有でマルノームの腹に入つているのを知つたギーシュが、がんばつて吐き出させてなんとか助かつていた。

その数週間後…、オスマンの秘書・ロングビルが行方不明になつた。それと共に、巷を騒がせていた土くれのフーケの事件がぱたりと無くなつた。

マルノームが食つたんだじゃないかという疑いがかかつっていたが、ロングビルが消えた日、いつも通りルイズがたくさん餌を与えていたため、それはないという裏は取れた。

言葉が使えないマルノームに、あんたのせいじゃないわよね？  
つと聞いても、ぼへ～つとしているだけで、何も答えは得られなかつた。

## 『ルイズが召喚したのが、ヒメグマだつたら?』

ルイズは、もうもうと上がる煙の中に、60センチの生き物を見つけて、ガツツポーズを取った。

ついについに! 魔法が成功したのだという確信が得られたからだ。

春風により、煙が晴れると、そこには、大きな耳を持つオレンジ色に、顔の半分ぐらいを占める三日月模様がある可愛らしい熊がいた。なぜか、片手の掌をペロペロずつと舐めている。

か、可愛い!! つと、ルイズは、魔法の成功に加えて、可愛い使い魔を喚べたことに喜んだ。

コルベールがコントラクトサーヴァントの儀式をつと、促す。

熊の姿にメロメロになつていたルイズは、ハツとして熊に使い魔の印を刻むべく近づく。

すると熊は、ビクツと震え、後ずさるが、小石に足をつまずかせ、コテツと後ろへ転がつた。

ルイズはその隙に接近し、コントラクトサーヴァントの呪文を唱え、あとはキスだけとなり、まだ仰向けになつている熊を起こそうとして…、大きな爪で引っかかれた。

見かけによらない力によつて、ルイズの顔に爪が食い込み、深く傷を付けられた。

ルイズは、構わずキスをしようとするが、熊はバタバタ手足をばたつかせて暴れた。

直後、コルベールが放つた軽いエアハンマーが熊の頭部を襲い、熊が気絶した。

コルベールに今だと促され、ルイズは、熊を心配しつつ、キスをした。

そして、ルイズは、すぐに保健室に行かされ、水の秘薬で傷跡もなく治つた。

熊は、ルイズの部屋の藁の上に寝かされていた。まだ目を覚まさない。

ルイズは、保健室へ連れて行くべきかと思つてゐると、やがて熊が目を覚まして起き上がつた。

ルイズを見るなり、熊は、ピクッと震え上がつてゐた。ルイズは、熊から怯えられてしまいショックを受けた。

その時、ルイズの手が机の上にあつたハチミツの飴玉を落としてしまつた。

熊がピクッと耳を立て、クンクンッと飴玉を匂つてゐた。

欲しいの？ つて聞くと、熊は、コクコクと頷いた。どうやらコチラの言葉は理解できるらしい。頭は良いようだ。

ルイズは、飴玉の包み紙を外し、中身を熊に差し出した。

熊は、一口で少し大きめのその飴玉を口に入れた。

すると、熊は、身を震わせるようにほっぺたを手で押さえて喜び、コロコロと藁の上を転がつた。どうやら予想以上に美味しかつたらしい。

ルイズは、そんな熊のリアクションにメロメロになつてゐた。

翌日から、熊はルイズに気を許したらしく、後ろをついてくるようになつた。

すると、ヒメグマだ！ つと驚いたメイドひとりいた。

知つているのかと聞くと、シエスタというメイドは教えてくれた。

この熊の名は、ヒメグマ。

タルブ村の近隣の森でしか見かけない珍しい熊の一種で、蜜を好むのだそうだ。手に染みこませて、常に舐めてゐるそうだ。

ただし、成長するとリングマという凶暴でつかい熊になるそうで、可愛いからといって近づくと親のリングマがいる可能性もあるので、非常に危険なのだそうだ。

り、リングマじゃなくて…よかつた…つと、ルイズは思つたが、いずれ自分のヒメグマがリングマに成長することを思うと、不安がわき上がつた。

青ざめるルイズを、ヒメグマは、掌をペロペロ舐めながらコテツと首を傾げて見てゐた。

ヒメグマは、蜜を特別好むが、基本雑食らしく、あげれば肉でも魚でも食べた。

最初こそ怖がられて顔を引っ搔かれたものの、懐いてしまえば、ただあの時は怖がってただけだと分かり、ルイズは、ヒメグマを可愛がった。

しかし、ただ可愛いだけではないのだということを、示したのが、土くれのフーケによる盗難事件の時だった。

フーケの巨大な土のゴーレムを、技マシンという宝物庫の宝を自らに使つて、氷のパンチを放ち、土のゴーレムを破壊して、土くれのフーケを逃げ帰らせた。

更にその後の、アルビオンへの密命では、裏切ったワルドからルイズを守るべく前に立ち、風の魔法で吹き飛ばされた直後、リングマヘと進化を遂げ、爆発的に上がった身体能力を駆使して、疾風の二つ名を持つワルドを撃破した。

ヒメグマからリングマになつたルイズの使い魔は、婚約者に裏切られたショックから泣いているルイズをギュッと、けれど優しく抱きしめたのだった。

## 『ルイズが召喚したのが、ミルタンクだつたら?』

メス牛。

それがルイズが感じた第一印象だった。

4本足ではなく、2本足でヨチヨチと歩く。ピンク色の牛。いかにも乳牛ですつて言わんばかりの、乳房部分があり、ミルクが取れるのかと思つてたら…。

ミルタンク！ ミルタンクだあ！ つと驚いてるメイドが走つてきた。

落ち着くよう言い、落ち着いてから話を聞くと、どうかミルクを分けてくださいませんか!? つと土下座された。

理由を聞くと、同僚のメイドが病に伏せており、元気になるための活力剤にミルタンクというこの牛のミルクが良いので、どうか分けてくれないかということだつた。

そういうことなら…つと、ルイズが許可すると、シエスタというメイドは、ありがとうございます！ つとお礼を言つて、どこからかバケツを持ってきて、ミルタンクからミルクを絞つた。

そして大急ぎでメイド達が住む、宿舎へ走つて行つた。

その後間もなく、シエスタがまた走つてきて、本当にありがとうございます！ 仲間のメイドが元気になりました！ つと報告しに來た。

そんな早く!? つとびつくりした。

話を詳しく聞くと、シエスタの故郷のタルブ村では、かつて曾祖父が飼つていた影響で、その子孫に当たるシエスタの家族のみがミルタンクを飼育しており、その滋養強壮さと、美味ゆえに、ほとんどタルブで消費され、市場にはほとんど出ないのだそうだ。

試しに飲んでみますか？ つと、シエスタがこれまたどこから持つてきたのか、コップにミルタンクのミルクを絞り、ルイズに渡した。香りは…、ほのかに甘いような…、そして口に含んでみると、その甘みと濃厚さに驚かされる。かつてこんな美味なミルクを飲んだ

ことがあつただろうか？つという衝撃レベルの美味さだつた。

ミルクがダメな人は、ヨーグルトにして食べるんですよ！ ヨーグルトも絶品ですよ！ つとシエスタは、自慢げだ。

すると、モ～～～つとミルタンクが鳴いた。ポンポンとお腹を叩き、何か催促している。

その時、グ～～つと腹の虫が鳴つた。どうやらお腹をすかせているらしい。

お世話、お手伝いします！ つとシエスタが、率先してミルタンクの世話を買って出た。さすが身内がミルタンクを育ててているだけあり、実に慣れている。

せつせと世話をかいがあり、ミルタンクから絞れるミルクの量が増えた。

ルイズは、毎日少なくともコップ一杯ミルタンクのミルクを飲み、料理長のマルトーラに頼んで、ミルタンクのミルクで料理を作つて貰つた。

そのかいあつてか、ルイズの肌つや、そして髪の毛のつや、身長、そして胸が出始めてきた。

ミルタンクは、最大20リットルもミルクを出せるので、瓶に詰めて学院の中で売り始めたところ、ルイズの体型の変化もあり、飛ぶようになれた。

しかし、買い占めてがぶ飲みしていた生徒の一部が、ミルタンクみたいな体型になってきたため、クレームが入つた。

そして、ミルタンクのミルクが、栄養満点だが、相応に高カロリーであることが分かり、美味しいからと飲み過ぎると危険だということが分かつたのだつた。

がぶ飲みしなくてよかつた…つと、ルイズは、自分の体质と、自制心に安堵したのだつた。

その後、脂肪分をある程度抜いてカロリーを落としたヨーグルトと、脂肪分から作られたバターを作つて売ることにし、これまたたくさん売れて、ルイズは、幼児体型脱却と共に、お財布がウハウハだつた。

# 『ルイズが召喚したのが、ミルタンクだつたら?』 別ルート

メス牛。

それがルイズが感じた第一印象だった。

4本足ではなく、2本足でヨチヨチと歩く。ピンク色の牛。

いかにも乳牛ですって言わんばかりの、乳房部分があり、ミルクが取れるのかと思ってたら…。

ミルタンク！ ミルタンクだあ！ つと驚いてるメイドが走ってきた。

落ち着くよう言い、落ち着いてから話を聞くと、どうかミルクを分けてくださいませんか!? つと土下座された。

理由を聞くと、同僚のメイドが病に伏せており、元気になるための活力剤にミルタンクというこの牛のミルクが良いので、どうか分けてくれないかということだつた。

そういうことなら…つと、ルイズが許可すると、シエスタというメイドは、ありがとうございます！ つとお礼を言つて、どこからかバケツを持ってきて、ミルタンクからミルクを絞つた。

そして大急ぎでメイド達が住む、宿舎へ走つて行つた。

その後間もなく、シエスタがまた走つてきて、本当にありがとうございます！ 仲間のメイドが元気になりました！ つと報告しに来た。

そんな早く!? つとびつくりした。

話を詳しく聞くと、シエスタの故郷のタルブ村では、かつて曾祖父が飼つていた影響で、その子孫に当たるシエスタの家族のみがミルタンクを飼育しており、その滋養強壮さと、美味ゆえに、ほとんどタルブで消費され、市場にはほとんど出ないのだそうだ。

試しに飲んでみますか？ つと、シエスタがこれまでどこから持つてきたのか、コップにミルタンクのミルクを絞り、ルイズに渡した。香りは…、ほのかに甘いような…、そして口に含んでみると、そ

の甘みと濃厚さに驚かされる。かつてこんな美味なミルクを飲んだことがあつただろうか？つという衝撃レベルの美味さだつた。

ミルクがダメな人は、ヨーグルトにして食べるんですよ！ ヨーグルトも絶品ですよ！ つとシエスタは、自慢げだ。

すると、モ～～～とミルタンクが鳴いた。ポンポンとお腹を叩き、何か催促している。

その時、グ～～と腹の虫が鳴つた。どうやらお腹をすかせているらしい。

お世話、お手伝いします！ つとシエスタが、率先してミルタンクの世話を買って出た。さすが身内がミルタンクを育ててているだけあり、実に慣れている。

せつせと世話をかいがあり、ミルタンクから絞れるミルクの量が増えた。

ルイズは、毎日少なくともコップ一杯ミルタンクのミルクを飲み、料理長のマルトーラに頼んで、ミルタンクのミルクで料理を作つて貰つた。

そのかいあつてか、ルイズの肌つや、そして髪の毛のつや、身長、そして胸が出始めてきた。

ミルタンクは、最大20リットルもミルクを出せるので、瓶に詰めて体が弱い姉・カトレアに送つた。

するとカトレアの病にかなり効果が見られたということで両親から催促が来るほどだつた。ルイズは、せつせとシエスタと共にミルタンクを世話をしながらミルクを貰つては、送つた。

ところがある日、もう送るな！ つと掌を返したような返事が來た。

心配になつて実家に帰ると……、そこには、ミルタンクのようにぽつちやりとしてしまつたカトレアがいた。

病気は治つたが、今度は肥満に悩まされることになつたという……。

あとで調べたところ、ミルタンクのミルクは滋養強壮に良いが、反面高カロリーなので、飲み過ぎるとミルタンク体型になつてしまふ

という欠点があつたのだつた。

また病気になられても困るので、料理人と栄養士と相談して、ミルタンクのミルクを脂肪分を抜いたヨーグルトにして、カトレアはダイエットに励むことになったのだつた。

あと、抜いた脂肪分からバターがオマケで出来たので、ヴァリエール印で売つたところ、飛ぶように卖れたとか。

その後、エレオノールがミルタンクのミルクの栄養素を数値化し、ルイズの体型変化も含めて宣伝して、ミルタンクによる牧場をヴァリエール領に作ろうとして、ミルタンクが唯一生息するタルブ近隣の森とミルタンクの飼育をしているシエスターの親族をまとめて買い取ろうとしてかなりもめることになるのだが、それは別の話。

『ルイズが召喚したのが、ツボツボだつたら?』

壺。

最初の第一印象がそれだつた。

無数の穴が空いた赤っぽい色の壺のような物だつたが、近寄るにゅつと黄色い物が出てきた。

手足も首も頭も黄色い触手のようになつており、頭部分には、目らしきものが二つ。

生き物!? そつちの方にびっくりした。

しかし、生き物ならコントラクトサーヴァントができると思いつし、儀式に移つた。

だが、あとはキスだけとなつた時、近寄ると、壺みたいな生き物は、頭と手足を引っ込めてしまつた。

出できなさい! つとルイズは、壺のような殻を掴んで揺すつた。

揺すつてたら、ヘロヘロと首を出してぐつたりした。そのすきにキスをして儀式を終わらせた。

揺するためには掴んでいた壺部分から、ドロドロと何か甘い液体が出てきて、ルイズの手を汚したため、ルイズは悲鳴を上げた。

儀式は無事に終わつたが、ルイズの手はベッタベタ。謎の生き物もぐつたりしてるので、ルイズは、仕方なくベッタベタの手で自室まで運んで帰ることになつてしまつた。しかし、結構重たかつた。(※2

#### 0. 5キロ)

運ぶのに難儀したが、なんとか部屋に連れて帰つて、藁の上に乗せた。それからルイズは、井戸に行つて手を洗い、塗らしたタオルで、壺みたいな生き物の壺についているベタベタを拭き取つてやつた。

疲れたルイズは、そのままベッドで眠つた。

翌朝、グーグー寝ていたルイズを起こそうとする何かがいた。

ルイズが目を覚ますと、ニューンと伸ばした触手のような手で、

壺みたいな生き物がルイズを起こそうとしていた。

寝ぼけていたルイズだつたが、ハツと我に返り、起き上がつて支度をした。

しかし、ふと止まる。

そこにいる壺みたいな生き物の餌について疑問が浮かんだからだ。

しかし、時間も無いのでルイズは、その生き物についてきてつて言い部屋を出た。

食堂に行く直後、ツボツボだあ！つと驚いたメイドがひとり。

知っているのかと聞くと、この生き物は、とても珍しい生き物だと説明してくれた。

名前は、ツボツボ。シエスタというメイドの故郷であるタルブ村の近隣に希に見られる、珍しい生き物なのだそうだ。

だが、かつて亡き曾祖父が飼育していたことがあり、その影響か子孫のシエスタの家族もツボツボを育成しており、木の実を与えて、木の実ジユースを作つてもらつていてるのだそうだ。

ジユース？つて聞くと、ツボツボの足先から出る体液と混ざつて出来る絶品なドロドロのジユースなんですよ！つと嬉しそうに答えた。

ああ…、あの時壺のような殻から出てきたベトベトのドロドロは、ジユースだつたのか…つとルイズは、納得した。

せつかくですので木の実ジユースを作つてもらいませんか？つと提案され、ルイズは、少し考え、とりあえず、いいわよつと返事をした。

するとシエスタが、食堂のキッチンから木の実を色々と持つてきて、ツボツボに渡した。ツボツボは、触手のような手で器用に木の実をかき集め、殻の中に入れていった。

これで、しばらく歩き回るとジユースが出来るんですよつと説明。

しばらく歩き回れと言われても…つと思いつつ、ルイズは、食堂で食事を摂った後、授業に出て、そして授業が終わつた後に、ツボツボがルイズの足をツンツンとつづいた。

どうしたの？つと聞くと、ツボツボは、自分の殻を示した。どうやらジユースが出来たらしい。

そしてルイズは、シエスタを呼び、シエスタは、清潔なバケツを持ってきて、ツボツボの前に出した。

ツボツボは、斜めにされたバケツにドロドロのジュースを出した。

うわあ…不味そう…つというのがルイズの印象だった。

反対にシエスタは、美味しく出来ましたよ！つと喜び顔。そしてコップに注いで、どうぞ！とルイズに差し出した。

渋々受け取ったルイズは、まず匂う。匂いは…、甘い木の実の匂いだ。傷む寸前の果物の匂いに近いような気もしなくもない。

美味しいですよ！つとシエスタがキラキラを目々で期待しているので、ルイズは、意を決して、グッと一口飲んだ。

芳醇な木の実の濃厚な甘み、ドロドロというかトロトロとした舌触り、喉を通るときまで味が分かるような気がするほど味わい深い。

不覚にも…美味しい、つとルイズは思つたし、口にしていた。

よかつたです！つとシエスタは、喜び。ツボツボも喜んでいた。健康や美容にもいいらしいですよ！つと聞き、ルイズは、これらもツボツボにジュースを作つてもらうことにしたのだつた。

実家に帰つた際には、ツボツボの木の実ジュースを病弱なカトレアにあげた。とても喜ばれた。

## 『ルイズが召喚したのが、クヌギダマだつたら?』

これで最後だと放つたサモンサーヴァントによる、大爆発の跡に、なんか、コロツと転がつていた。

強いて言うなら、大きなマツボツクリ。

グレー緑色のそれが転がっていた。

ゼロのルイズが、でっかいマツボツクリなんて召喚したぞ〜つと、他の生徒達が馬鹿にしてくる。

ルイズは、唇を噛んだ。

そんなルイズに、コルベールがコントラクトサーヴァントの儀式を促す。

ルイズは、渋々、大きなマツボツクリに近づいて、コントラクトサーヴァントの儀式に移つた。

最後のキスをした時、ドカーン!つと、マツボツクリが爆発した。

もうもうと上がる煙が春風で晴れると、マツボツクリに目があり、コロコロとルーンが刻まれる痛みに耐えていて、ルイズは、ケホツ…と煙吐いて髪の毛は、ボンバー、そして全身ボロボロになつた状態で倒れた。

次にルイズが目を覚ましたら、保健室だった。

なんか、重い…つと思つたら、ルイズが被つてゐる布団の上に、あの大好きなマツボツクリがいた。

凹凸の隙間にある二つの目が、ルイズを見ている。

コルベルが、だいじょうぶかと声をかけてきたので、ルイズは、だいじょうぶです…つと返事をした。

なんですか？ このマツボツクリは…つと、ルイズが聞くと、コルベルは、分からないと答えた。

こんなマツボツクリみたいな形をしていて、しかも爆発する生き物など見たことがない。

傷が治つたため、保健室にいるわけにもいかないので、ルイズが保健室を出ると、ピヨンピヨンつとマツボツクリみたいな形した生き

物がついてくる。

部屋に帰つて図鑑で調べても、このマツボツクリみたいな形した生き物ことは分からなかつた。

ルイズは、分からないので、そのままベッドで寝た。

翌朝、マツボツクリみたいな形をした生き物を連れて、授業に出た。

マツボツクリなんて召喚してどうすんだよつと揶揄されるが、ルイズは我慢した。

そして、鍊金の授業で失敗し、その大爆発に反応してしまつたマツボツクリみたいな形をした生き物まで大爆発し、教室はメチャクチヤになつた。

その後、爆発するマツボツクリというレッテルを貼られ、近づく者はいなかつた。

ルイズが落ち込んでいると、クヌギダマだ！ つと驚いた声を上げたメイドがひとりいた。

捕まえて知つてゐるのかと聞くと、木にぶら下がつていないので初めて見ましたつと言われた。

この生き物名は、クヌギダマ。

ミノムシの一種で、通常なら木にぶら下がつて餌の虫を待つているだけの生き物らしい。自分でほとんど動かないそうだ。

なのだが、たまに落ちてきて不用意に爆発するため、タルブ村の近隣では、近づくことはあまりないそうだ。

成長すると、もつと大きく、鋼のようなミノムシ、フォレトスという種になるそうだ。こっちも爆発するのもつと危ないとか……。ミノムシ？ と、ルイズは、ガツカリした。

なにか特別な生き物なのかと思つたが、蓋を開ければ、あの木にぶら下がつて動かないミノムシの一種だつたなんて：つと。

だが、ルイズのガツカリは、後日変わることになる。

土くれのフーケによる事件が起つたとき、無謀にも挑もうとしたルイズを、土のゴーレムから守るためクヌギダマが体当たりで突き飛ばした。

そして、クヌギダマが巨大な土のゴーレムに踏まれてしまつた。

ルイズは、悲鳴を上げた直後、ゴーレムの足の下で、光が漏れ、倍以上に大きくなり、高速スピンで土のゴーレムの足を破壊したフォレ特斯がいた。

驚いたフーケが巨大な土のゴーレムで殴ろうとしたとき、ピヨンッと飛びはねてゴーレムの腕に乗ったフォレ特斯が、大爆発して、土のゴーレムを粉碎し、フーケを吹っ飛ばして学院の建物の壁に叩き付けて気絶させた。

フォレ特斯が、フンッと煙を吐き、その場にいると、ルイズが駆け寄ってきてフォレ特斯に抱きついて、わんわん泣いた。

## 『ルイズが召喚したのが、ハネツコだつたら?』

春風は、予想以上に強いものである。  
ゆえに。

ぴゅーっと今日もルイズの使い魔が吹っ飛ばされていた。  
またぐー!つとルイズが追いかけに行くのは、もう恒例行事になっていた。

ルイズが召喚した、ソレは、胴体と顔が一体になった体をしており、尻尾が後ろにあり、手足は短く、そして耳らしき尖った部位があり、そして頭頂部に大きなタンポンを思わせる葉っぱがある生き物だった。

葉っぱ部分以外は、ピンク色で、顔もどこか間抜けなようでいて、可愛くはある。

とにかく軽くて、風ですぐ飛ばされた。(※0.5キロ)

そのたびに回収しに行くルイズである。

この生き物の名は、ハネツコという。

シエスターというメイドが、飛ばされて来たハネツコを回収してくれた時に教えてくれた。

普段は集団で強風に耐えているそうだが、そよ風は好きで、そよ風の吹く時は、ピヨンピヨンふよふよとしている姿が、森やタルブ村の草原で見られるそうだ。

成長すると、ポポツコ、そして最後にワタツコという形態になるそうだ。

ワタツコともなると、風に乗つて世界一周まですると言われているそうだ。子孫を世界中に残しに行くために。

いつか、あなたも旅立つちやうの?つとルイズがハネツコに聞いても答えはない。言葉をそもそも喋れないのだから。

しかし、今年の春は、風が強かつた。

あんまりに飛ばされるので、いい加減ルイズも学習し、ヒモでくつて飛ばされないようにした。ハネツコは大変嫌がつたが、背に腹

はかえられないということで、我慢してつとルイズが心を鬼にしてヒモでくくつた。

後日、ハネツコがポポツコになつた。

多少体重が増したことで、少々の風では飛ばされなくなつたが、頭部に咲いた大きな花に太陽の光を浴びるため、太陽に近づこうと勝手に浮かび上がるようになつた。

そして気がつけば、ワタツコに。

ルイズが目を離した隙に、ワタツコは強風に乗つて旅立つて行つてしまつた。

その後、ルイズは、使い魔に逃げられた貴族と後ろ指さされたが、ルイズは、きっと帰つてくると信じて待つた。

そして、再びの春……。

ワタツコは、たくさんのハネツコとポポツコを連れて帰つてきた。他のハネツコやポポツコにも同じルーンが刻まれていて、ワタツコの子孫であることが分かつた。

どこから拾つてきたのか、ワタツコは、ルイズに珍しい宝石類までカラコロと落として渡そうとした。

ルイズは、そんなことより……。

馬鹿使い魔！ つと涙目でワタツコを抱きしめたのだつた。

学校卒業後、ワタツコ達の生息域は、タルブ近隣だけじゃなく、ヴァリエール領にも広げられ、ヴァリエール領の穏やかに風に吹かれ、嬉しそうにピヨンピヨンふよふよとしているワタツコ達の姿が、ルイズ亡き後も、ずっとずっと先まで見られたと言われる……。

『ルイズが召喚したのが、ケムツソだつたら?』

どう見ても、毛虫です。

つというのが、第一印象だった。

毛虫といつても、棘は大きく、ボコボコとしており、全体的に赤っぽい色合いで、頭頂部とお尻に黄色い棘があり、目が大きい。

しかし、大きさは30センチとかなり大きく、そしてなぜか2匹いた。

コルベールがコントラクトサーヴァントをと促してきただため、ルイズは、棘に気をつけつつ、二匹に儀式を施そうとして…。チクッ

二匹の方にキスをした直後に、お尻の棘が額に…。そしてルイズは倒れた。

次に目を覚ますと、保健室のベッドの上だつた。

あの毛虫の毒の後遺症か、熱に浮かされた状態で目を下に向けると、二匹のあの赤い毛虫がこちらをじくつと見ていた。その体にはルーンが刻まれていた。

その後、無事に回復したルイズだが、毛虫の餌について悩んだ。虫と言つても千差万別。虫によつて食性が違うからだ。

しかも、この毛虫は見たこともない種類。だから餌が分からな  
い。

ルイズが困つてゐると、そこに……、ケムツソだあ！と驚きの声を上げたメイドがひとりいた。

知つてゐるのかと話を聞くと、シエスタというメイドの故郷であるタルブ村近隣の森に棲むという、毛虫の一種だそうだ。

餌は、木の皮の下にある樹液だそうだが、草も食べるそうだ。好みの草は自分で探すので、近くの森に連れて行つては？つとアドバイスをもらつた。

とりあえず、二匹を学院の裏手にある森について行くと、クンクンつと匂いを嗅いで、ムシャムシャと特定の草を食べたり、近くの木

の皮をお尻の棘で器用に剥いで、その下の樹液を舐めた。

野菜の屑でもいいと思いますよつとということで、食堂から野菜の屑をもらってきてたシエスタ。その野菜屑も一匹のケムツソは食べた。

このケムツソって変わってるんですよつとシエスタが言つた。  
なにが変わつているのかというと、同じ種類のケムツソから、二  
パターン、成長する違いがあるそうだ。

サナギの段階でそのルートが決まり、最終的にチョウチョになる  
か、蛾になるか……。

だから二匹? つとルイズは、ムシャムシャと野菜屑を食べている  
ケムツソ達を見た。

その想像は当たつたらしく、やがてケムツソ達は、サナギになつ  
た。

カラサリスと、マユルドに。

微妙な色合いの違いだが、よく形は似ている。

そうして様子を見ること、数日後、サナギは破られた。

そして、美しいチョウチョと、毒々しい蛾が現れた。

それぞれの名は、アゲハントと、ドクケイル。

対照的な二匹ではあるが、仲は良いらしい。一緒にルイズの使い魔となつたという仲で、一緒にずっと行動してきたからだろうか?

それぞれが、やがて番を連れてきて、卵を産み、またケムツソが生まれ、そしてカラサリスと、マユルドになり、そして、また羽化する。それを繰り返していくと、あつという間にアゲハントとドクケイルの群れができあがつた。

生まれてきた子孫達にもルーンがあり、ルイズに従つた。

時に、美しく、時に毒を以つて敵を制裁し、ルイズの人生に貢献  
し続けた。

数十年後?、ルイズが生涯を終えた後も、ルイズの遺言でケムツソが暮らす森に作られたルイズの墓の周りを、アゲハントとドクケイルが仲良く飛んでいた。

## 『ルイズが召喚したのが、ラルトスだつたら?』

その生き物は、とても不思議だつた。

なんというか、雰囲気が。

メイドのシエスタが教えてくれたが、この生き物の名は、ラルトス。

頭の赤い部分で人の感情を読み取ることが出来るのだとか。

そのせいか、とても気遣いができる子で、ルイズがイライラしていれば近寄らず、逆に抱きしめたいなうつて思つてると近寄つてきた。

そして念力などの不思議な力で、物を動かし、ルイズの身の回りのことをしてくれた。

やがて、ラルトスは、キルリアという形態に進化した。

その日から、ルイズの周りではちよつとした異変が起こり始めた。

まず、土くれのフーケの噂がなくなつた。あと同時に、オスマンの秘書であったロングビルが消えた。

と、いうか、ロングビルが最初からいなかつたみたいに……。

それを不審に思つたのはルイズだけで、他の者達は夢でも見たんじゃないかとか言つて笑う。

そして、近頃不穏な噂が流れていたアルビオンが、生き残つたウエールズにより形勢が逆転され、アンリエッタとの婚約と同時にアルビオンとトリステインの併合が発表された。

それと同時に、ハーフエルフであり、ウエールズの親類であつたティファニアが見つかり、彼女の保護者役だつたマチルダという元貴族と共に保護された。

そうして芋づる式で、ルイズとティファニアの系統が伝説の虚無であることが分かり、アンリエッタから始祖の祈祷書を賜ることになつた。

そんな最中、牙を剥いてきたのは、レコンキスタの残党と、それを裏で操つていたガリアであつた。

すると、前線部隊が駆けつけるよりも早く、ルイズのキルリアが率いる、ラルトス、そしてその上の進化形態である、サーナイト、エルレイド達が前に出て、その強力無比のサイコパワーで撃破して見せた。

そうして、サーナイトへと進化を遂げたルイズのキルリア。テレパシーを以って、自身が見た未来予知をルイズに伝え、聖地に眠る、大いなる意思と呼ばれる精霊石を破壊しないと世界がヤバいことを知らせた。

そして、ロマリアがそのことを知つていて、秘密裏に行動していることも知らせ、アンリエッタらに間接的に伝えられてから、世界情勢が動き出し、ルイズのエクスプロージョンによる、精霊石破壊か、始祖ブリミルの故郷である聖地への帰還かでもめにもめた。

ロマリアのヴィットーリオは、始祖ブリミルの祈願を叶えるため、聖地への帰還を强行しようとしたため、サーナイト達がこれを阻止。

仲間達を集めて、その強大なサイコパワーで、ルイズを聖地のそこに眠る大いなる意思と呼ばれる精霊石の下へ運び、ルイズにエクスプロージョンを使つてもらつて、精霊石を破壊するに至つた。

……あとで聞いた話であるが、シエスタの曾祖父が飼育していたキルリアには、空間を歪め、そして未来を見通す力があつたとされていた。

そして、ヴィットーリオが移住先に向かおうとさせた聖地とは、シエスタの曾祖父、そしてサーナイト…、ラルトス、キルリア、エルレイド達の先祖の故郷であることが分かつた。

## 『ルイズが召喚したのが、メリープだつたら?』

その生き物は、小さな羊だった。

尻尾が長く、耳と顔と、尻尾の部分だけ毛が無い。尻尾には黒と黄色の縞模様がある。そして尻尾の先端に丸いモノがついている。変わった羊ではあった。

なーんだ、羊があつとガツカリしつつ、ルイズは、コルベールに促され、コントラクトサーヴァントの儀式を行つた。

あとは、キスだけとなつて、羊の身体に触つた瞬間。

ビリツ！

つと、なり、ルイズは、痺れ、倒れた。

しかし幸いなことに、口がそのままルイズを見上げていた羊の口に当たり、それでルーンが刻まれたのだつた。

身体の全身が痺れ、ピクピクしているルイズを、慌てたコルベルが助け起こし、そのまま保健室に搬送。

羊は、メーメー！ つと鳴き、ルーンが刻まれる痛みに地面を転がつっていた。

その後の調べで、この羊…、なぜか電気を持つていることが分からり、ルイズが痺れたのは感電が原因だと分かつた。

一見フワフワの毛並みは、静電気によつて膨らんだ物であり、怒ると倍以上に膨らむ。

そして下手に触ると、ビリツ！ となる。

羊のくせになんて恐ろしい！ つと、ルイズは思った。  
メリープだあ！ つと驚いた声を上げたメイドがいた。

シエスタというメイドだつたのだが、知つてゐるのか聞くと、彼女の故郷の近隣に棲む、珍しい生き物なのだそうだ。

ところが話を聞いてみると、一見羊だが実は羊ではないらしい。  
二段階ほど成長する特性があるのだが、最終的には、デンリュウ  
というすべての体毛を失つた竜の一體になるというのだ。

竜と言つても、正確には竜ではなく、翼もなく、鱗もなく、鋭い爪も無い。だが尻尾の先端の球体から遙か遠くまでを照らす光を発

することができ、迷ったモノを導くと言われているそうだ。

ルイズは、それを聞いてびっくり。

まるでおとぎ話に出るような、妖精のような不思議な生き物みたいじやないかと。

ビリビリとする迷惑な羊だと思つてたが、シエスタの話を聞いて見方を変えたルイズは、ビリビリしないよう気をつけつつ、メリープの世話に勤しんだ。

その甲斐あつてか、メリープは、ストレスが少なくなり、ビリビリすることが少なくなつた。

メリープは、戦いに関してはとても優秀だつた。

発電能力を持つため、電気による攻撃を得意とし、ルイズをゼロだと難癖付けてくる相手を感電、痺れさせて撃退。

成長してモココという形態になると、毛は少くなり、2本足になる。

シエスタいわく、成長の過程で発電力が高まるため、毛が少なくなるそうだ。

つまり、デンリュウともなれば……。

ルイズは、ゴクリッと息をのんだ。

モココは、その小ささに似合わない発電力を持つて、学院に現れた土くれのフーケを撃退した。

巨大な土のゴーレムをも破壊した、雷は、凄まじく、うつかりとばつちりで学院の建物さえ雷から飛び散つた電気により火事が起こつたほどだ。

そして、アルビオンへの密命で、ついにモココは、デンリュウへと成長を遂げる。

すぐそこまで迫つていたレコン・キスタの軍勢に向かつて、尻尾からアルビオン全土を照らすような凄まじい光を放つた。

あまりの光量に、近距離にいたワルドは、目を閉じる間もなく失明。レコン・キスタの空中艦隊も光に目をやられたのか、飛行状態が狂つていき、そこへデンリュウが放つ、雷の嵐が来て壊滅寸前に追い詰められたのだつた。

デンリュウからの合図で目をつむったおかげで近距離にいたが  
日をやられずにすんだルイズは、後々ずっと語り続けることになる。  
“デンリュウは……、光の化身であり、雷神だと。

## 『ルイズが召喚したのが、イワークだつたら?』

最初は、複数の岩が固まつた岩山だと思った。

だが、違つた。

他の生徒達から嘲笑を受けながら、渋々ルイズがコントラクトサーヴァントの儀式を行おうとしたとき、ガラガラと、音を当ててそれが動いたのだ。

それは、岩のヘビだった。

1本の角があり、両目があり、口がある。くねつた身体の節々がひとつづつが岩だ。尻尾にさしかかるにつれ小さくなる。

ルイズがぼう然としていると、その岩のヘビが、ゴオオオ！つと低い鳴き声を上げ、全身が岩で出来ている尻尾をルイズに振り下ろそうとした。

コルベールが咄嗟に魔法でルイズを跳ばし、回避させた。ルイズがいた位置に、大きな尻尾が振り下ろされ土煙が上がる。

岩のヘビがギロリッとコルベールを睨むと、口をパカツと開けて、岩を猛スピードで吐き出した。

コルベールは、横へ転がり吐かれた岩を避ける。

直後、岩のヘビに無数の氷の矢が当たり、岩のヘビが苦しげに鳴き声を上げた。

タバサが杖をしており、今だと言つた。

ズドンッと倒れ込んだ岩のヘビに向かい、ルイズは急いでコントラクトサーヴァントの儀式を行い、その口にキスをした。

ルーンが刻まれる痛みに、岩のヘビが悶え苦しみ、その巨体が大きく動いたことでルイズは跳ね飛ばされ、そのまま意識を失つた。

次に目を覚ましたら、ルイズは保健室にいた。

身体の節々が痛いが、そういうえばあの岩のヘビはどうなつたのかが気になつた。

そこへコルベールがやつてきて、身体はだいじょうぶかと聞かれ、身体はまだ痛いがだいじょうぶだと答えた。

岩のヘビはどうなつたのかと聞こうとしたとき、地響きが聞こえ

た。

今のは？つと聞くと、あの岩のヘビが動いている振動だと答えた。

ルイズは、痛む身体を押して外へ出ると、広場を占拠するように岩のヘビがいた。

岩のヘビは、ルイズを見つけると、ガラガラと音を立てながら顔を近づけてきた。ルイズは、咄嗟に身構えると、岩のヘビは、ルイズの細い身体に鼻の先を擦り付けてきた。

すると、い、イワーク！ つと驚いている声が聞こえた。

見ると、洗濯物籠を落としているひとりのメイドがいた。捕まえて話を聞くと、シエスタというメイドは、この岩のヘビについて知っているらしかった。

岩のヘビの名は、イワーク。

タルブの近隣にある岩山を住処にしている、珍しい生き物なのだとか。

かつて曾祖父が飼育していたこともあり、シエスタは、少しだがその生態を知っていると答えた。

地面を高速で掘り進み、硬い物を食べて身体を丈夫にする生態があり、年を取ると身体に丸みが出てくるのだとか。

ルイズのイワークは、ゴツゴツしており、たぶん年齢的にはまだ若いと見られた。

100年地面の下で生きていると、ハガネールという個体になり、身体の成分がダイヤモンドと相当のものになるのだとか。

き：気が長い！ つとルイズは思つた。100年だなんて…つと。

あ、そういえばつと、シエスタは言う。

ある条件を満たすと、100年せどもハガネールになるのだとか。

だが、その条件は分からぬと言われた。

もしかしたら故郷のタルブある、曾祖父の遺品にそのヒントがあるかもしれないと言わされたので、いてもたつてもいられないルイズは、休みの届けを出し、イワークを連れてシエスタの故郷へ向かうこ

とにしたのだった。

シエスタの案内でシエスタの家を訪ね、倉庫に納められた彼女の曾祖父の遺品を見せてもらつた。

古い日記があり、開いて見たものの、見たこともない文字で書かれており、シエスタの家族によると彼女らの曾祖父に当たる人物は、元々は余所から来た不思議な人物だつたのだとか。

丸いマジックアイテムから巨大なイワークを出し入れし、自在に操り心通わせていたのだとか。

はて？ つと気がつけば、イワークがタルブ近隣に棲み始めたのは、シエスタの曾祖父が住み始めてからだと理解できた。

他にヒントになる物は無いかと漁つたところ、メタルコートと書かれた変な金属物を見つけた。

そういうえば：つと、シエスタの祖母が思い出したように言う。

イワークの進化形であるハガネールを、シエスタの曾祖父がかつてイワークと共に飼育しており、曾祖父亡き後、他のイワークと共に近隣に住み着いたと。

イワークの寿命を考えると、もしかしたらまだ生きている可能性があり、もしかしたら、ボスとして君臨しているのではと。

結局、ハガネールになるためのヒントは、得られなかつたと思うルイズだつたが、シエスタの厚意でメタルコートをもらい自分のイワークのもとへ戻つた時だつた。

ルイズが手にしているメタルコートを見たイワークは、パクツとメタルコートを咥え、奪つた。

そしてそのまま地面に潜り、姿を消してしまつた。

ルイズが制止する暇も無くいなくなつてしまい、ルイズは焦つた。

そして少しして、イワークの巣になつてゐる岩山の方で、ピカツと何かが光つたような気がした。

やがて、ゴゴゴゴ！ と地響きがして、イワークを超える白銀の巨体が現れた。

イワークと違ひ頭が平たく、デカい。

ハガネールだ！つとシエスタの祖母が驚いた。

これが？つとルイズが見上げていると、ハガネールは、金属で出来ていて動かないはずの口の端をあげて笑つた。

そして鼻先をルイズに擦り付ける。

ルイズは、その仕草で理解した。

このハガネールは、自分のイワークだと。

どうやら、メタルコートこそが、イワークをすぐにハガネールへと進化させる鍵だったことが分かった。

ルイズは、よしよしつとハガネールの鼻先を撫でると、元イワークのハガネールは、嬉しそうに低い声を漏らした。

## 『ルイズが召喚したのが、ゴニヨニヨだつたら？』

もくもくと上がる煙が、春風吹かれ、消える。

そこにいたのは、ウサギのような大きく長い耳を持つ、薄紫色の生き物だつた。しかし、耳の先端と、短い足の先端は黄色い。

一見するとぬいぐるみ？ つと勘違いしそうな外見ではあるが、煙が晴れてからキヨロキヨロと周りを見回していて、生き物だと分かった。

よく見ると、変な顔をしている。特に目が…。

変なの召喚したかな？ つと思いつつ、コルベールがコントラクトサーヴァントの儀式をするよう促したため、ルイズは、その生き物に近づいた。

ルイズが近づいてきたので、その生き物はビクッと震え上がり。そして。

学院にも届くほどの大音量を口から放つた。

あまりの大音量に、ルイズは、ひっくり返り、離れた場所にいた生徒達もひっくり返り、その使い魔達も逃げ回った。

そしてその生き物は背中を向けて逃げようとした。

ルイズは、グワングワンする頭を抱えて起き上がり、力を振り絞つてその生き物に飛びつき、素早くコントラクトサーヴァントの儀式の呪文を唱え、また大音量を放とうとした口にキスをした。

ルーンが刻まれる痛みに、別の意味で大音量の鳴き声を上げる、その生き物。

至近距離でその大音量を喰らつたルイズは、耳の鼓膜が破裂した。

その後保健室で治療を受け、すっかり大人しくなつた生き物を見おろした。

コルベールなどは、こんなに小さい（60センチ）のに、どこからあんな大音量を出してるんだと不思議がつっていた。

コルベールが気を利かせ、また大音量で耳をやられたらたまつたものじやないだろうと、あの大音量を緩和させる耳栓をルイズに与え

た。

ルイズが、その生き物を連れて歩いていると…。

ゴニヨニヨだあ！つと驚いたメイドがいた。

さつきのあの鳴き声、やつぱり！つと声を漏らしているので、話を聞くと、知っているらしかった。

この生き物の名は、ゴニヨニヨ。

危険を察知すると窓ガラスを割るほどの大音量を出して、敵を怯ませる不思議な生き物で、タルブ近隣の森でたまに見かけられるそうだが、あまりに大音量を出すため、遭遇しても絶対に近づかないそうだ。

二段階ほど成長する特性があり、成長すると、ドゴーム、そして最後にバクオングというそれぞれ、大音量の声を操る生き物になるそうだ。

名前を聞くだけで、相当な音を出しそうである。ゴニヨニヨ段階で、アレなのに…、それ以上になるのかつと、ルイズは、不安げにゴニヨニヨを見た。

まあようするに、音を武器とする生き物らしかった。

なのだが、ゴニヨニヨ以降は、あんまり可愛くないんですねつと、シエスターというメイドは言っていた。

その後、ゴニヨニヨをぬいぐるみみたいに思つて、不用意に近づいた女子生徒にビクツとなつたゴニヨニヨが学院の中で大音量の声を放ち、廊下の窓を全部割る事態を発生させる事件があつたり。

シエスターを庇つたことで発生したギーシュとの決闘で、ゴニヨニヨがドゴームに進化し、可愛くなくなつたが、その声の衝撃波でギーシュを一撃で撃破。

さらに土くれのフーケの土のゴレームをも、声で破壊し。

アルビオンへの密命で、共に来ていたワルドが裏切つた際には、バクオングへ進化を遂げ、ワルドが得意とする風の魔法を全て破壊する声の攻撃を放ち、ワルドを撃破。

そして、教会の外へ出るなり、迫つてきていたレコン・キスタの軍勢に向か、最大級の声を放ち、竜騎士達や馬の陸軍の耳を破裂させ

て全滅させた。

その声は、トリステインにも聞こえており、帰った際には、トリステインにも隣国のガリアとか、ゲルマニアにも地の底から現れた魔神が復活した!?なんて変な噂が流れて、市民がパニックになっていたそうだ。

## 『ルイズが召喚したのが、マリルだつたら？』

かつわい／＼！つと、ルイズは、その生き物を見てまずそう思つた。

大きさは、40センチと小さく。

雷状に凹凸がある黒い尻尾の先端に丸い大きなものがついていて、身体は青く、腹の部分は白く、手足は短い。耳はネズミみたいに丸くて大きい。

目も黒くてつぶらで、実に愛らしい見た目だ。

可愛い可愛い！つとルイズが興奮していると、コルベールがコントラクトサーヴァントの儀式をと、促した。

他の生徒達が、可愛い生き物をゼロのルイズが召喚したと悔しそうにしているのを、後目に、フフンツとルイズは得意げに笑い、そして儀式を始めた。

ルイズが目の前に来ると、キヨロキヨロと周りを見回していたその青い生き物が、ビクツと震え上がり、口からブーっと水を吹いてルイズの顔に当てた。

突然のことと、その水圧にルイズは、ひっくり返り、青い生き物は短い足に似合わぬ速さで背中を向けて逃げ出した。

コルベールが火を放ち、その退路を断つ。

ひっくり返っていたルイズは、慌てて起き上がり、コルベールの炎に退路を断たれて立ち往生しているその生き物を捕まえ、素早くコントラクトサーヴァントの呪文を唱え、キスをした。

ルーンが刻まれる痛みに、リルーリルーっと変わった鳴き声をあげ泣き叫ぶその生き物。

ルイズがだいじょうぶ、だいじょうぶよつと声をかけながら押さえつけるように抱きしめていると、ゴウツと尻尾が振られ、水を纏つたそれがルイズの頭を殴打してルイズをノックアウトさせた。

ルイズが次に目を覚ましたのは、保健室だつた。

コルベールがだいじょうぶかと声をかけてきたが、ルイズは、あの生き物は？つと聞き返した。

コルベールが、ルイズを案内し、水棲の使い魔を飼育するプールに連れて行くと、他の水棲生物に混じって、あの青い生き物がスイスイと水面を泳いでいた。

あの尻尾を浮かせている様子からするに、あれが浮き袋の代わりと見られた。

その生き物は、ルイズの存在に気づいて固まる。

ルイズがおいでつと言うと、またブーツと水を吐いてルイズに浴びせた。

水辺だからか水の威力が上がっており、ルイズはひっくり返つて後頭部を強打した。

コルベールが助け起こし、ローンが刻まれているのだが、あの通り人間を警戒していて、近づいてこないと言った。

ルイズは、後頭部を摩りながら、そんなあ・つとショックを受けた。

餌で少しづつ懐かせて行かせればいいのでは? つとコルベールが提案したが、そもそも餌が分からぬ。

草食性かもしれないし、雑食性かもしれない。

ルイズが困りながら、とりあえず、肉と草、一般的に使い魔の餌にしている物をどちらも持つてプールに行くと、ひとりのメイドがルイズの使い魔と交流している姿があつた。

だが、使い魔はルイズを見るとすぐに水の中に逃げていった。

メイドは、ハツとして、申し訳ありません! つと頭を下げてきた。

ルイズは、それよりなぜあの可愛い生き物と交流できたのか知りたかった。

なので話を聞くと、お腹をすかせて食料庫に紛れ込んでいたのを見つけ、餌を与えていたのだそうだ。

シエスタというメイドが言うには、あの生き物の名は、マリル。シエスタの故郷の近隣の水辺で見られる、珍しい生き物なのだとか。

雑食性で、小魚や水草なども食べるそうだ。

なぜ自分に懷かず、見ず知らずのメイドなんかに・つとブツブツ

とルイズは文句を言う。シエスタは恐縮してしまう。

故郷のマリルは人懐っこいそうだが、何か酷いことをしませんでしたか？つと聞かれ、ルイズは、もしかしてローンを刻まれたときか：つと思いついた。

だいじょうぶです！がんばりましようつとシエスタに励まされ、その日からマリルを懐かせるため、ルイズは奮闘した。

最初は、シエスタからしか餌を受け取らず、ルイズを見るとすぐ逃げていた。それが数週間後、やつとルイズがこれ以上危害を加えてこないと分かつたらしく、手から餌を受け取るようになった。だが餌を受け取るとすぐ水の中に逃げた。

うつかりや誤解で、ギーシュと決闘騒ぎになってしまった時、マリルが自ら盾となるように現れ、水を纏った尻尾による攻撃でギーシュのワルキユーレを破壊しギーシュを倒したりもした。

極めつけは、巷を騒がせている土くれのフーケが学院を襲撃した際、マリルリというウサギのような耳の形態に進化を遂げて、土くれのフーケの巨大ゴーレムをプールに誘って、そこでプールの水を利用して、大水流を放ち、土くれのフーケを擊破した。

その夜の舞踏会を抜けたルイズが、プールに近づくと、すぐにヒヨコリツと顔を出してくるようになり、ルイズは、マリルリ（マリル）との絆が築けたことが嬉しかった。

## 『ルイズが召喚したのが、ウソツキーだつたら?』

何度もかの大爆発の末に、現れたのは、背丈ほどある木だつた。

2本の枝が、腕のように見える少し奇妙な木であるが、ルイズは酷くガツカリした。

美しく強い使い魔を求めたのに、現れたのは、ただの植物だつたのだから。

ルイズがただの木を召喚したので、ルイズをからかう声があがる。ルイズは、悔しい思いをしながらも、コルベールに言われるまま使い魔の契約の儀式を行うために近づき、杖を木に掲げて、最後はキスだけとなつて、キスをしようとする。

ペチンッ

つと、顔を枝が軽く殴つてきた。

えつ? つと思つて目を開けたルイズが見たのは、木の模様に紛れていた二つのつぶらな小さな目だつた。そして、その下に口らしき物もあつた。よくよく見ないと分からぬ程度に擬態しているそれは、木ではなかつたのだ。

なにこれ? つとルイズが思つてゐると、ルイズがガクンッとこけた。足払いをかけられたのだ。根っこに見えた部位は、二つの足だつた。

こけたルイズは、ギッと木のような生き物を見上げ、すぐに立ち上がり、再度契約をしようと挑む。だが枝のような腕を振るわれ、足払いをかけられ、邪魔される。

その後どうなつたかというと、見かねたコルベールが軽く火を放つて注意を引こうとしたのだが失敗。キュルケも見かねて援護するがキュルケの火の魔法でも怯まず、それを見かねたタバサが氷の魔法を放つたところ、これには過剰に反応した木のような生き物が倒れたのでその隙を突いてルイズが契約を結んだのだつた。

無事に契約が結ばれると、2本の足でルイズの後ろをついてくるよになつた。

奇妙なその木のような生き物について調べたのだが、生物学に詳

しい教員にも分からなかつた。

ウソツキーだ！つと驚いた声をあげた人間がたつた一人いた。  
シエスタというメイドだつた。

詳しく聞くと、この生き物の名は、ウソツキー。

木の真似をしているが、実は植物ではなく、岩に近い生き物なの  
だそうだ。

イタズラ好きな習性があるのか、人が通る道を塞ぐ習性があり、  
シエスタの故郷のタルブでたまに現れるため荷馬車などが通る道の  
邪魔してくることがあるそうだ。

だが岩に近い生物であるためか、水属性に弱く、雨が降るといつ  
の間にか姿を消すのだそうだ。そのため、ウソツキーをどかすため、  
ウソツキー対策として水が入ったジョウロを持つて行くことになつ  
ている。

シエスタの言うとおり、ウソツキーは、イタズラ好きだつたよう  
で、正体が分かつても木のフリをして学院の敷地内で進路妨害をす  
るようになり、苦情が来るようになつた。

水属性に弱いため、水魔法が使える者が退治しようとすると、身  
体を器用にクネクネさせて氷と水を避け、相手を殴り飛ばすなど見か  
けによらない戦闘能力を発揮した。

そんなんだから当然主人であるルイズに苦情が来る。ルイズは、  
参つてしまつた。

シエスタが、シエスタの曾祖父がかつて飼育していたことがある  
という話があると聞いたことがあると言つていて、躊躇はなんとか  
なると思います！つと励ました。

ルイズは、今朝も今朝からルイズの部屋のドアの前で木のフリし  
てジツと進路妨害しているウソツキーを前に、フーーーーっと息を吐  
き…。

杖を構えた。

そして渾身の、溜まりに溜まつた怒りを放つように魔法を使つ  
た。

そして大爆発。

ルイズも爆発に巻き込まれ、ボロボロになり、部屋は隣の部屋を巻き込んで大破、ウソツキーは、黒く煤けて、ケホッと煙を吐いた。

次やつたら…、粉々にするわよ…?つと地獄の底から響くような声で脅したルイズに、ウソツキーは、さすがにやり過ぎたと反省したのか、それ以降イタズラをすることはなくなつたのだつた。

その一件以降…、"爆発のルイズ"という不名誉な二つ名で呼ばれるようになり、ルイズは、ゼロとどつちがマシかと悩むことになつたのだつた。そんなルイズを慰めようとウソツキーが枝のような手で肩を叩くが、お前のせいだ!つと逆に怒られ、追いかけ回される光景が日常になるのであつた。

## 『ルイズが召喚したのが、ウパーだつたら?』

ツルンとした、表面。水色の皮膚。点のように小さな二つの目。微笑んでいるような大きな口。両手はなくて、二つの小さな足に、お尻に丸みのある尻尾があり、丸みのある頭の左右に耳らしきヒレのようなものがある。

小さなその生き物を召喚したルイズは、コントラクトサーヴァントの儀式を行つたのだが、キスをしたら、ヌメツとしてて、そのヌメリが唇についてピリピリとした。保健室で見てもらつたら、どうやらヌメリに毒成分が含まれているらしかった。

無事に使い魔にできたが、この見たこともない生き物は少々困った生き物だった。

ヌメヌメしているので水棲生物だったのだが、それはいい。

問題は、泥んこ遊びが好きで泥まみれになつては、部屋に帰つてくるのだ。しかもルイズに飛びついてくるものだから、当然ルイズも泥まみれになる。

いくら言つても聞かず、今日も元気に泥のついた身体で学院内を跳びはねるように歩いてる。おかげで主人であるルイズが掃除を言い渡される羽目になつた。

ルイズが掃除を終えて、トボトボと歩いていると、あの生き物がメイドと戯れていた。

なにやら慣れた様子で接しているので、話を聞くと、シエスタというメイドが語ってくれた。

この生き物の名は、ウパー。

彼女の故郷の森の中の池や泥のある場所に生息する水の生き物だそうだ。

成長する特性があり、成長するとヌオーというとてものんびりとした生き物になるそうだ。

どれぐらいのんびり屋かというと…、水の中で自ら動かず口を開けて餌の獲物が入つてくるのを待つほどのんびり屋らしい。また、痛みにも鈍感らしく、気ままに泳いでいて船底に頭をぶつけてもまったく

く気にしないのだという。

なにそれ？ つとルイズは思つたし、ウパーにたいしてだいぶガッカリした。

そんな使えなさそうな使い魔を手に入れてしまつたのかと思つたからだ。

ですけど……つと、シエスタが付け加えるように言つた。

かつて亡き曾祖父が飼育していたウパーとヌオーが、雨が降らず水不足に悩んでいたタルブの地を潤したという言い伝えがあり、曾祖父亡き後、野生化したウパーとヌオーがいるせいか、他の土地が水不足になつてもタルブだけは水不足にならなくなつたと言われているそうだ。

真実かどうかは分からぬが、ウパーとヌオーには、雨を呼ぶ力があるとタルブに住む一部の老人達が信じてゐるそうだ。

あなたつて……、そんな力があるの？ つと聞いてみたが、ウパーはいつも通りにこやかにしてゐるだけで答えない。というか喋れない。ところが、今年の夏……、トリステインは、例年にない雨不足となつた。

一番に悲鳴を上げたのは、平民で構成されている農村の住民達だ。

当然作物も枯れ……、野菜を中心に食料が充分に出回らなくなり、それは貴族の生活にも大きな打撃を与えた。

アンリエッタ達が必死に水不足と食糧難を解決するため奔走していた中、トリステインで唯一水不足を逃れていた土地があつた。タルブ村だつた。

そんな中で、ルイズがヌオーへと進化を遂げたウパーに、雨乞いをしてくれないかと頼んだところ、のんびりと踊るようになつたヌオー（ウパー）。

間抜けな顔も相まつて笑いの種になつたが、やがて太陽が雲で隠り、雨が降つてきたのだ。

このことは、すぐに王宮に知れ、招集されたルイズは、シエスタから聞いた話を語り、ルイズのヌオーがタルブ近隣に棲むウパーとヌ

オーを引き連れてトリステイン中で雨乞いを行い、水不足を解消させたのだつた。

トリステインを救つた救世主とウパーとヌオーが称えられたが、雨乞いしすぎて、今度は水害が起ころうなつてしまい、今度はウパーとヌオーを退治しようとする動きがあつたりと、今年のトリステインは、騒がしいことになつたのだつた。

あと、ウパーとヌオーを退治しようとした一部の人間達が、ウパーとヌオーが大人しいと見くびり、地震を起こす力で擊退されたあげく、地震による災害まで呼んだとしてウパーとヌオーが、称えられると同時に、間抜けな顔を被つた大自然の化身として恐れられる対象となるのはそう遠くない未来である。

『ルイズが召喚したのが、フワンテだつたら?』

紫色の風船?

それが第一印象だつた。

しかしヒモのような部位が下に一つその先端に逆さまの黄色いハート型、そして二つの黒い目、目の間に黄色いバッテン、頭のつんには雲のようなフワフワ。

本物の風船みたいにフワフワと浮いているソレは、風船のような変な生き物だつた。

変なの：つと思いつつヒモのような部位を掴んで引き寄せて使い魔の儀式を施す。

目をつむつてキスをしたのだが、ふと足下が妙にフワフワしたような感覚になつたので目を開けると、そこは宙。掴んだヒモ部分がルイズの腕に絡みついてそのまま浮かされていたのだ。慌てて下を見ればどんどんに小さくなつていく使い魔召喚の儀式の場所とコルベールと他の生徒達の姿が。

ルイズが慌てて、たすけてーーー！つと叫ぶと、タバサのシルフィードが飛んできてルイズを咥えると、ずっと腕に絡みついている風船みたいな生き物ごと地上へ降ろした。

地上に降ろされると、風船みたいな生き物が、プワーピワー！つと抗議するように鳴く。それがまるでせつかく空へ連れて行こうとしたのに…つと言つてているような気がした。

小さいくせに、小柄で軽いとはいえ人間のルイズを空高く連れて行こうとするなんて、どこにそんな力が？つとコルベールも他の生徒達も不思議がつた。

タバサが珍しく嫌そうな顔でその風船みたいな生き物を見つめていた。キュルケがどうしたのつと聞くと、この生き物危険…つとタバサがルイズに忠告したのだつた。

ルイズは、意味が分からなかつたが…、ルイズが最後となつた進級試験が終わり、タバサとキュルケに見張られた状態でまた浮かされないようにしつつ風船みたいな生き物を引っ張つて学院に帰ると…。

イヤーーー、フワンテ！つと悲鳴を上げたメイドがいた。  
見るなり逃げ出すので捕まえて話を聞いた。

この風船みたいな生き物の名は、フワンテというそうだ。

なんでもシエスタというメイドの故郷では、人とモンスターの魂が合わさって生まれてくるとされている幽霊の一種と言われており、うつかり子供が風船と間違えて掴んでしまうと、そのままあの世へ連れて行かれてしまうという怪談があるらしい。

まさか!? とルイズがフワンテを見る。

まさかフワンテは、ルイズを子供と勘定して連れて行こうとしたのか。あの世へ。

シエスタは、震えて涙目になりながら、ベラベラと他にも怖いフワンテにまつわる話をした。

子供を連れて行こうとする他に…、何かの拍子に破裂すると中に詰つた叫びのような声と共に魂があふれ出すとか、道連れを作るたびに膨らんでいくとか、その辺に漂うさまよえる魂が集まつて生まれ、これまた仲間を増やすために子供を連れて行こうとするとか……。

な、なんて恐ろしいモノを使い魔にしてしまつたんだ！ とルイズは青ざめた。タバサに至つては、ルイズの死角で無表情でガタガタになつていた。

その後は、大変だつた。隙あらば空の彼方へ連れて行こうとするフワンテに、ルイズは気が気じやなく、おちおち寝るのも恐ろしかつた。なぜなら寝ると川の向こうで死んだ親戚やら知り合いが手を振つているのを見るからだ。この川を渡つてしまつたらヤバい！ つと分かるが、フワンテにグイグイ引つ張られそうになるのだ。そしてギリギリで目が覚める。

そうして数日もせずゲツソリしたルイズに…、さすがにマズいと感じたキュルケや他の生徒達もフワンテにまつわる恐ろしい怪談を聞いて、退治した方がいいのでは？ と考へだし、ついに決行。

だが、フワンテもただじや倒されまいとする。そしてどこからか、いつの間にか集まつてきていた仲間達のフワンテの群れを引き連れ応戦。

学院中を巻き込んだ戦いの末、フワンテの群れを退けたが……、  
気がつけばルイズが消えていた……。

フワンテを恐れて隠れていて逃げるタイミングを失っていたシ  
エスタが、泣きながら、進化してフワライドという姿へと変わったフ  
ワンテに連れて行かれました……と言っていた。

友人関係でもあるアンリエッタも協力して探したが、ルイズを見  
つけることは出来なかつたとか……。

## 『ルイズが召喚したのが、ミツハニーだつたら？』

えつ？ 蜂の巣？

それが第一印象だつた。

しかし、穴が三つある大きな蜂の巣の形が不意にブーンっと羽音を立てて浮き上がつた。よく見ると左右に虫の羽があり、蜂の巣の穴の中に可愛いシンプルな顔がある。どうやら三四匹の蜂がひとつになつてゐるらしい。なんとも不思議だ。

コルベールに促され、コントラクトサーヴァントの儀式を行い、この不思議な蜂（？）を使い魔にした。

なんの蜂かしら？ つと思つて調べたが、図鑑にも載つていなし、生物に詳しい教師すらも分からないと言つていた。

そんな時、ミツハニーだ！ つと驚いて声を上げたメイドがいた。

話を聞くと、この蜂の名は、ミツハニー。

ビークインという女王蜂を中心として、ミツハニーが群れで従い、ビークインのために蜜を集めてくるそうだ。

なぜそんなことを知つているんだと聞いてみると、なんてことはない、彼女、シエスタの故郷ではビークインとミツハニーによる養蜂が行われていたのだ。

ビークインとミツハニーを、シエスタの曾祖父がどこから連れてきて、タルブ村に住み、その後子孫達がその養蜂を受け継ぎ、近隣の森に野生化したビークインとミツハニーが棲み着くなどしているそうだ。

ビークインとミツハニーの養蜂に関しては、曾祖父の遺伝である黒髪を持つシエスタの一族にしかできず、小さな村でしかないタルブの貴重な収入源のためリーダーを務めているとか。

ビークインは、そのフェロモンでミツハニーを操り、敵を攻撃するしが、ビークインのフェロモンの強さで従えられるミツハニーの数が変わるそうだ。

ただし…、ミツハニーは、メスのみが成長することでビークイン

となれるのでそのほとんどはオスらしい。

ミス・ヴァリエールのミツハニーは、メスですねと、だから将来ビーグラインになりますよつと、シエスタは言つた。

ルイズは、シエスタが語つたハチミツの品名を聞いて、それが王家御用達で、なおかつ病弱な姉のカトレアのために、極たまに仕入れることがある高級品だと分かつた。

ミツハニーがビーグラインになつてくれれば、カトレアのためそのハチミツを仕入れられるのに…つと思い、シエスタにミツハニーをビーグラインに育て上げる方法を教えてくれと頼んだ。

シエスタは、恐縮しつつ、自分は養蜂に携わつてないので、親戚に頼んでみますつと、故郷に手紙を送つた。

そして返信が返つてきたが、結論から言うとタルブ村のビーグラインとミツハニーは、シエスタの曾祖父が飼育していたモノの子孫達で、ほぼ野生であり、その成長については知らないということだつた。

なら、タルブ村に行くわよ！つとルイズは鼻息荒く意気込んだ。なんとしてもミツハニーをビーグラインに成長させたかったからだ。タルブの森から来るならそこに成長のヒントがあるはずだと踏んでのことだ。

そして休みの届けを出し、シエスタと共に彼女の故郷であるタルブ村へ。

到着するなり、ルイズのミツハニーが森へ行つてしまつた。

どうします？つと心配そうに聞くシエスタに、しばらく様子見よつとルイズは、内心不安を押し殺しつつ毅然と答えた。

宿もないタルブ村で、シエスタの家に泊めてもらつたのだが、数日してもミツハニーは帰つてこなかつた。

やがて休み届も限界の日数になつたので、心配するシエスタに気丈に振る舞いつつ帰り支度をしていると、ブーンつと大きな羽音が聞こえたので、家を飛び出すと、そこにはシエスタの一族が育てているビーグインよりも大きなビーグインがいた。しかも、ミツハニーをとんでもない数引き連れていた。

あなたなの？つとルイズが尋ねると、ビーグインがコクリツと頷

いた。

その後、学院に帰つてからというもの、シエスタの一族から貰つた巣箱を設置するなどしてビーグラインとミツハニーのハチミツを集めさせるようとした。

実家にいるカトリアに送る一方で、ロイヤルゼリーなる女王蜂しか食べられない特別な蜜をルイズは自分のビーグラインからもらうようになり、その結果…、幼児体型に変化が！

あつという間に噂は広まり、実家に送りきれない、または自分でも消費しきれない分は、ルイズ印を付けて売った。サイフが潤い、仕送り無しでも十分すぎるほどになつた。

『ルイズが召喚したのが、ゴマゾウだつたら?』

なにこれ?

つぶらで可愛らしい黒い目、お鼻が長く、ぺつたりした平たく垂れた両耳を持つ薄青緑の四つ足の動物だつた。

強いて言うなら、子供の頃に与えられたぬいぐるみとか…そんな物を大きくしたように見える。つまり外見だけなら可愛い。

その動物は、やがてキヨロキヨロと周りを見回して、パオーン、パオおーん：つと、切なく鳴き出す。

コルベールがルイズに、儀式を急かす。

この動物が可哀想に見えてきていたルイズは、罪悪感を感じつつ、儀式に移ろうとすると、ビクツと震え上がった動物が突如体をダンゴムシのように丸めた。

えつ？と思つた時には、丸まつた状態で突撃してきたその動物に轢かれていた。

天地がひつくり返り、頭から地面に墜落。

ゴロゴロと高速で転がり回るその動物を、コルベールがなんとか止めて丸まつた状態を解除させて、キュルケに助け起こされたルイズがクラクラしながらコントラクトサーヴァントの儀式を行い、やつとこさ使い魔に出来た。

使い魔の印を付ける際に痛みが伴うため、この動物からは最初嫌われた。従属の効果はあまり出てないようだ。

使い魔の舎に入れていたが、ルイズが近づくと端っこに逃げてしまう。

ゴマゾウだ！つと声を上げたメイドが後ろにいた。

知つているのかと聞くと、メイドは恐縮しつつ、自分の故郷の近くで見られる珍しい動物だと答えてくれた。

この動物の名は、ゴマゾウ。

とても力持ちで、鼻の力が強く、人間だつて簡単に持ち上げられるとか。

今は可愛いが、成長するとドンファンという形態になり、あまり可愛くなくなるという。

かつて曾祖父が飼育していたそのうので、馴れさせることは可能だということだつた。

ゴマゾウは、とても大人しいんですけど、酷いことしませんでしたか？つと聞かれ、ルイズは使い魔の儀式で印を焼き付けたせいかと考えついた。

その後シエスターのアドバイスをもらい、ゴマゾウが好むエサを与えるながらなんとか距離を詰めていき、なんと背中に乗せてくれるまでになつた。

まるでぬいぐるみにでも乗つて歩いてるような光景だつたため、馬鹿にする声が聞こえるが、ルイズは無視。それよりゴマゾウが心を開いてくれたことを喜んだ。

そうしているとレビテーションでゴマゾウが浮かされ、その衝撃でルイズが転がり落ちてしまつた。

パオーンパオーン！つとルイズを心配するゴマゾウ。

ゴマゾウは、杖を持つて笑つて他の生徒を見つけると、キツと睨み丸まつて転がり出した。

ハツとしたその生徒は、慌てて背中を向けて逃げるが転がるスピードに勝てず轢かれた。

それによつて経験値が積まれ、ゴマゾウがあつという間に無骨な姿をしているドンファンへと成長した。

轢かれたがなんとか無事だつたその生徒に、ドンファンが突撃し、笑つていた他の生徒も追い回して騒ぎに。

ドンファンの硬い装甲のような皮膚は、並の魔法を受け付けず、そうしてドンファンや主人のルイズに手を出す馬鹿はいなくなつた。ルイズは、ドンファンを頼もしく思うと同時に…、ゴマゾウの時の可愛さを恋しく思つたのだつた。